



ご挨拶

日本武道学会会長 大保木 輝雄

2020（令和2）年度の第53回大会は初のオンライン開催（本部主催）となりました。世界的なコロナ禍という状況下にもかかわらず、65題の発表がなされます。関係する先生方の熱意と志に、尊敬の意を表します。また、本年度の本部企画の特別講演を快くお引き受けいただき、大会に華を添えて下さいます講道館長・上村春樹先生に厚く御礼申し上げます。

本年度は総会もオンラインで開催します。奮ってご参加いただきますよう、何卒宜しく願いいたします。

専門分科会企画につきましては、なぎなた（8月29日）、剣道（9月8日）、弓道（9月12日）、障害者武道（9月13日）の各分科会において、ウェブ会議システム（ZOOM等）を用いたフォーラムが予定されています。開催日が重なっておりませんので、要項をご参照の上、関係種目以外のフォーラムにも是非ご参加ください。ウェブ会議は遠隔地からも参加可能ですので、この機会に交流の縁を繋ぎ今後の交流のきっかけとしていただき、コロナ禍を転じて福となしていただければと願っております。

このように例年とは事情が全く異なる状況のなかで、大会に向けて適切かつ迅速に対応をされておられる運営役員の皆様に対し、改めて感謝と御礼を申し上げます。また、ご支援・ご協力を賜りました本会関係者や賛助会員、そして本会の窮状を察しご支援いただきました有志の皆様にも厚く御礼申し上げます。

さて、皆様ご存じのように1968（昭和43）年に創立した本会は、半世紀以上の歴史を刻んで参りました。創立の背景には、敗戦の惨禍を潜り抜けてきた日本の悲願である1964（昭和39）年の東京オリンピック開催があります。初めてオリンピック種目となった「柔道」を含め、様々な「武道」が世界の人々にその存在を認められ、開催に際して建設された日本武道館は、武道のみならず日本精神のシンボルともなりました。本会の創立は、そうした東京オリンピックのレガシーでもあり、設立趣旨は武道の普及発展に資するために様々な課題に対して学術的研究成果を社会に還元することに在ります。

設立当時の課題であった「武道とは何か、武道学とは何か」という問いは、今日もお課題であり続けています。今、それを改めて問い直すことは、混迷を極める世界にあって新たな歴史を創り出す原動力になるのではないのでしょうか。

コロナ禍により来年に延期された2度目の東京オリンピックで、柔道に加えて空手道が正式種目として参加することになりました。東京での2度目のオリンピック開催で期待されることは、武道をめぐる、世界中の人々とその「普遍性」について活発な議論がなされる契機となることだと考えます。なぜなら、武道の底流にはのびきならない危機的状況をそのまま受け入れ、ピンチをチャンスと考え一歩踏み出す勇気、嘉納師範流にえば「なに、くそ」精神と「精力善用・自他共栄」の精神、つまり地球上の人類がいつも「元気で・仲良く」生き抜く力が流れているからです。

かつてペストやスペイン風邪がそうあったように、私たちは今、未知のウイルス禍による世界史の転換点に立っています。かつての困難を潜り抜けた後に新たな科学や文化が開いたごとく、武道はどう変わるのか。武道の真価が試され、見直される新たな時代の創出に向けて、先生方のお力添えを重ねてお願いし挨拶とさせていただきます。

一般会員・大学院生会員・学部生会員の皆様へ

〔大会への参加方法と、参加費納入方法について〕

講演・発表の資料・動画等は、9月7日（月）～13日（日）の7日間、当学会ホームページ特設サイトにて公開します（質疑応答は、9月7日・8日の2日間）。

特設サイトへの入場には、専用のパスワードが必要です。パスワードは、大会参加費（一般会員、大学院生会員、学部生会員とも一律）2,000円を納入いただいた方にのみ8月下旬までにお知らせします（7月開催理事会承認事項）。大会に参加される場合、別途郵送にてお送りしてあります払い込み用紙にて、参加費を8月25日（火）までに納入してください。

なおその際、必ずEメールアドレスを、判読しやすいように、ご記入ください。お支払いが確認できましたら、お知らせいただいたアドレスあてに、特設サイト入場に必要なお知らせをさせていただきます。

大会参加費、大会参加手続きに関するお問い合わせ：

日本武道学会事務局 budogaku@xj8.so-net.ne.jp

発表者の方へ

1. 発表資料、および動画作成方法等の案内

発表資料、および動画作成方法等は8月中旬に公開される大会特設サイトにてご案内します。また、発表者の皆様には、関連情報をメールにてお送りいたします。

2. 発表データ（資料・動画等）のアップロード期限

8月28日（金）までに、発表データ（資料・動画等）を、特設サイトに必ずアップロードしてください。

発表方法、発表資料作成に関するお問い合わせ：

日本武道学会広報委員会 budokoho@gmail.com

3. 発表後のデータの取り扱い

大会会期終了後、サーバーへ登録された全てのデータは事務局にて責任を持って消去いたします。

4. 発表証明書について

発表証明書の必要な方は、当学会事務局 budogaku@xj8.so-net.ne.jp あてにお申し込みください。その際、提出先の「機関名・機関長名」を必ずご記入ください。大会会期終了後に、電子媒体（PDF）にて証明書をお送りします。

一般研究発表

人文・社会科学系

演題番号	演 題	発表者	所 属
A-1	中華人民共和国における空手道の受容・展開過程に関する研究	謝 勁文	早稲田大学
A-2	大学生空手道選手の試合における実力発揮に及ぼす心理・社会的要因	谷木 龍男	清和大学
A-3	空手家が語る中国武術の実態：1922-1945 の期間に着目して	劉 暢	早稲田大学スポーツ科学学術院
A-4	沖縄空手の「型の構成」に関する研究	嘉手苺 徹	沖縄空手研究所
A-5	香川輝著『剣道極意』にみられる女性論の背景	大石 純子	筑波大学体育系
A-6	日本におけるフェンシングの導入史 —当時の剣道とのかかわりに着目して—	結城 倫弘	天理大学体育学部
A-7	近世剣術における戦術に関する一考察 —とくに対人的な戦術に着目して—	軽米 克尊	天理大学体育学部
A-8	大正期における柔術の進展：近代柔道整復術の創成	丸澤 遼子	日本体育大学 大学院
A-9	精神・知的障害者を対象とした柔道療法の治療効果に関する介入研究	中村 和裕	福山大学
A-10	ドイツにおける柔道の生涯スポーツとしての捉え方に関する研究： スペシャルニーズがある対象者向けのアプローチを中心に	マーヤ・ ソリドワール	津田塾大学
A-11	各国の柔道クラブ所属児童保護者の柔道に対するイメージの比較	曾我部晋哉	甲南大学
A-12	柔道長期実践者の SOC（ストレス対処能力）と健康関連 QOL の関 連性 ～一般高齢者との比較～	小崎 亮輔	関東学園大学
A-13	手裏剣術考Ⅲ（根岸流の相対武術知新流）	早坂 義文	古武道研究会
A-14	甲陽軍鑑を論拠に再び「京流」について ～西国に興った「京流」が東国に残った～	内田 建也	山梨支部
A-15	高鍋藩大石神影流師範 石井寿吉について	森本 邦生	広島県立広島 工業高等学校
A-16	外国人の日本論にみられる武道に関する一考察 —明治時代に着目して—	田嶋 結	筑波大学大学院
A-17	大日本武徳会に関する一考察 —新聞記事にみる 1900～1904 の様相について—	筒井 雄大	国際武道大学
A-18	近代以降の武道書にみられる武士道思想に関する一考察	堀川 峻	筑波大学大学院
A-19	新当流における宗教性について —『兵法自観照』にみられる神々に注目して—	二宮 恭子	筑波大学大学院
A-20	武道関係用語に関する一考察	阿部 智美	筑波大学大学院
A-21	『起倒流組討一相之傳』にみる起倒流組討の兵法観に関する一考察	菊本 智之	常葉大学
A-22	宝蔵院流創流期、戦国末の合戦体験者が、術技継承に当たり「直槍 は突くもの」と伝えたことに関する考察	石川 哲也	全日本槍術連盟
A-23	鏡心明智流四代桃井春蔵直正の退避先についての再検討	柴田 洋一	大阪市立扇町 総合高等学校
A-24	武道に関する国会議論	田中 宏和	桐蔭横浜大学

演題番号	演 題	発表者	所 属
B-1	異なる竹刀重心位置が剣道初心者の気剣体一致に及ぼす影響	椿 武	神戸親和女子大学
B-2	大学生柔道競技者における減量時の身体組成・水分摂取量・発汗量変動の一例	金持 拓身	桐朋中・高等学校
B-3	柔道における肩車の運動学的技術分析	伊藤 悦輝	早稲田大学スポーツ科学研究科
B-4	柔道の受のバイオメカニクス的研究 —熟練者における投げやすい受について—	平沼 義浩	早稲田大学スポーツ科学研究科
B-5	柔道の大外刈りによる頭部外傷に対するマウスガードの装着効果	生田 秀和	大阪体育大学
B-6	柔道の初心者と熟練者の後ろ受け身における頭部角加速度の比較	林 弘典	びわこ成蹊スポーツ大学
B-7	柔道選手における運動間に行う前腕筋群へのアイシングが把持筋持久力に及ぼす影響	志々目由理江	宮崎大学
B-8	金的（釣鐘）への当身に関する考察	稲川 郁子	日本体育大学

一般研究発表

武道指導法系

演題番号	演 題	発表者	所 属
C-1	弓道における通信大会の歴史と現代的活用の検討	松尾 牧則	筑波大学体育系
C-2	少林寺拳法の授業前後におけるライフスキルの変化 ～授業展開の違いに着目して～	高坂 正治	国際武道大学
C-3	武道等指導充実・資質向上支援事業に係る武道指導に関する調査結果第五報	柴田 一浩	流通経済大学
C-4	「わかる」と「できる」を結び付ける中学校剣道授業の学習指導法に関する研究	本多壮太郎	福岡教育大学
C-5	剣道打突の起を認知する要因と打突の機会及び勝つ原理	今福 一寿	明星大学教育学部
C-6	網膜色素変性症と闘う剣道愛好家への指導を通して見える武道の可能性 ～競争社会から共創社会へ～その2	三苫 保久	滋賀県立瀬田 工業高等学校
C-7	柔道初学者に対する受身の練習方法に関する考察 —古流武術式稽古方法の紹介—	河野 敏博	新風館道場
C-8	大学男子柔道において高校時代の結果がチーム成績に与える影響	大辻 康太	桐蔭横浜大学
C-9	知的・発達障がい児の実践事例から捉えた柔道療育の効果と課題	後藤 優太	鹿屋体育大学
C-10	柔道療育施設における利用児の行動変容についての一考察	内村 香菜	合同会社笑光

一般研究発表

ポスター発表

演題番号	演 題	発表者	所 属
P-1	空手道に携わる女性の現状についての調査報告Ⅱ —海外の空手道実践者の調査をもとに—	末次 美樹	駒澤大学
P-2	サンドイッチ構造とエラスティカ理論を活用した現代和弓の設計とその特性評価について	Mariani Giacomo	筑波大学数理 物質科学研究科
P-3	小学校体育における相撲の授業実践 ～地域の奉納相撲と連携させて～	小出 高義	大東文化大学
P-4	大学生なぎなた選手の疼痛部位と傷害予防についてのアンケート調査	橋本 留緒	丸太町リハビリ テーションクリ ニック
P-5	剣道選手の平常時と試合前後の心理的变化について	新里知佳野	日本体育大学
P-6	教員養成カリキュラムにおける「剣道」の位置づけ	中嶋 克成	広島大学大学院 / 徳山大学
P-7	踏み込み動作に伴う力の抜きの評価 —剣道競技者の下肢筋電図活動と動作の解析—	麓 正樹	東京国際大学 人間社会学部
P-8	小野派一刀流における「九太刀」と組太刀表五十本との関係について —小野家、津軽家の古文書をもとに—	立木 幸敏	国際武道大学
P-9	剣道経験が人間形成に及ぼす影響 —実践者と保護者の質的調査からの検討—	天野 聡	東海大学
P-10	剣道高段者における剣道の実践と人間形成の関係	笹木 春光	東海大学
P-11	生体信号から日本剣道形の技術を定量化できるか	高橋健太郎	関東学院大学 理工学部
P-12	剣道用具の評価観点に関する検討	鶴見 健太	東海大学大学院
P-13	剣道の実践がライフスキル・主観的幸福感に与える影響	山本 聖樹	東海大学大学院
P-14	中学校柔道授業が共感性に及ぼす影響 —固技を主体とした単元の検討—	島 孟留	群馬大学 共同 教育学部 保健 体育講座
P-15	柔道 MIND 活動に関する実態調査 —指導者を対象として—	田中 勤	奈良学園登美ヶ 丘高等学校
P-16	柔道競技における投技のスコアを獲得するために効果的な方法：男子 60kg 級と男子 100kg 級の比較	三宅 恵介	中京大学
P-17	柔道の乱取りが大外刈りで生じる頭部角加速度に及ぼす影響	石川 美久	大阪教育大学
P-18	柔道授業における心理社会的学習成果の特徴と教師の言葉がけとの関連	山本 浩二	関西福祉大学 教育学部
P-19	体づくり運動における小学校低学年を対象とした柔道遊びの検証	與儀 幸朝	鹿児島大学
P-20	柔道の基本動作を導入した体づくり運動(高校)に関する実践的研究	天久 功一	沖縄県立那覇西 高等学校
P-21	Special Judo Fitness Test を用いた大学女子柔道選手の体力特性の検討	大川 康隆	東海大学
P-22	中学校武道授業の実施状況と担当教員の意識	京林由季子	岡山県立大学 保健福祉学部
P-23	中学校武道必修へ「型」の考え方を取り入れた授業づくり	太田 順康	大阪教育大学

本部企画

特別講演（録画）

ピンチをチャンスに変える武道の心

上村春樹氏（講道館長）

企画の趣旨

本学会においては、武道の本質を問い直すという立場から、大会本部企画として「生涯武道」の問題を 2018 年度より複数年計画で取り上げてきている。

2018 年においては、「生涯武道の現状とこれから」と題し、①競技と競技以外の部分の現状、②幼少年から高齢者に至るまでの各ステージにおける実践のされ方の現状、③女性の実践の現状、④海外における実践の現状、⑤上記現状を踏まえた問題点、の 5 つの視点を提示し、特に①と②を中心に各競技（柔道・空手道・剣道・弓道・なぎなた・障害者武道）の相互理解を先ずは深めるべく議論を展開した。

2019 年においては、「生涯武道の視点から女性の武道を考える」と題して、特に「女性の武道」に焦点を当て議論を展開した。昨今、あらゆる分野で女性特有の課題を検討し、女性の活躍を支援するプログラムが企画されるような動向がみられるが、多様性をもつ武道の世界は、はたして人生の節目々々で生活のスタイルが大きく変化することが多い女性にとって、各ライフステージでそれぞれが持つ可能性を十分に発揮し、生き甲斐を持って活躍できる場となっているのであろうかという問題意識から、女性の武道実践について、現状と理想、今後の方向性などについて、多角的に議論を進めた。

本来であれば、本年度は、国際化する武道界における生涯武道を議論する予定であったが、今般の新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、世界的に武道を通常のような形で実践することが出来ない状況が続き、更に国際的に十分な議論をする場を設定することが難しい現状にある。しかし、逆にこのような武道を取り巻く環境が危機的状況にある今だからこそ、大小様々な危機が間断なく訪れる人生のなかで、生涯にわたって武道を実践していく意味、そしてこういった時だからこそ発揮される武道の精神、心といったものを考える好機ととらえていきたいというのが本企画における主たる方向性である。

今回は、明治維新以後のある意味で武道が危機的状況であった近代日本において、この命脈を繋ぎ発展させて現代武道の礎を築いた嘉納治五郎師範の事績を顧みるべく、その道統を受け継ぐ「武の聖地」講道館をお訪ねし、上村春樹館長に、経験豊かなお立場から「生涯武道」「コロナ禍」「国際化」「オリンピック」などをキーワードとしながらお話しを伺い、武道界の未来に活力を与えていただこうというのが本企画の趣旨である。

企画委員会：

酒井 利信（委員長）、大石 純子（副委員長）、アレキサンダー・ベネット、増地 克之、鷺見 勝博、松井完太郎、三村 由紀、軽米 克尊

特設サイトへの録画公開日：令和 2 年 9 月 7 日（月）～9 月 13 日（日）

剣道専門分科会企画 講演会

令和2年9月8日（火）14：30～16：00

剣道と新型コロナウイルス感染症はどのように共存させていくのか？

講師 東京医科歯科大学名誉教授 宮坂信之氏

新型コロナウイルス感染症は、世界では患者1,245万人、死亡者56万人に及ぼうとし、我が国では患者2万1千人、死亡者1000人に届こうとしており、依然、猛威を奮っている（2020年7月11日現在）。

剣道はコンタクトスポーツであり、いわゆる「3密」の要素は避けられない。さらに、剣道は剣道着、剣道具の着用により熱中症は起こりやすい。このような状況下において、全日本剣道連盟は「稽古自粛の解除及び感染防止ガイドライン」を制定した。その中で、新型コロナ感染症への感染防止策として、面マスクを義務付け、シールドの着用を強く推奨している。これらの感染防止策を講ずる一方、熱中症の状況把握の一環として、熱中症報告システムを立ち上げている。

本講演では、新型コロナウイルス感染症について紹介をしながら、剣道と新型コロナウイルス感染症をどのように共存させていくのか？をテーマにして聴講者と一緒に考えてみたい。

※ 講演は、標記の日時に、WEBミーティングシステム（zoom）を用いて行います。分科会会員の方には参加方法を別途お知らせします。

会員以外で聴講ご希望の方は、剣道専門分科会事務局（okumura@u-gakugei.ac.jp）へお問い合わせください。

弓道専門分科会企画

新型コロナウイルスの影響による 「新しい生活様式」に基づいた弓道の在り方

2020年1月以降に中国・武漢市をはじめとする肺炎及びその原因とされる新型コロナウイルス感染症(COVID-19)が流行したことにより、弓道も様々な面で影響を受けている。多くの弓道競技大会・審査・講習会などの各種行事が中止となっている。また、2020年5月25日に日本政府の緊急事態宣言が全国で解除されたものの、その後も個人練習再開の見通しが立っていない場所も存在する。弓道界においても、「新しい生活様式」に基づいた対応を迫られている。

弓道は、その競技特性として対人形式を取らず、全ての競技・審査を人と人との接触を行わずに行うことが可能である。そのため、弓道会・学校単位での活動を再開している地域では、「新しい生活様式」に基づいたオンライン審査・競技大会などといった取り組みを行っているところがある。新型コロナウイルス終息の見通しが立たない中では、こうした取り組みが今後も継続して必要とされる可能性が高い。また、オンライン審査・競技大会などは、新型コロナウイルス終息後も新たなツールとして弓道の活性化に用いられることが期待される。

本企画では、全日本弓道連盟及び高校の弓道部活動において積極的にオンラインを活用して活動を行っている指導者を招へいし、新型コロナウイルスの影響による弓道実施上の様々な制限に対して、如何に対応を行っているのか(行うのか)について、それぞれの立場での講演を事例紹介も交えて行う。そして、ポストコロナも見据えた今後の弓道の在り方について議論を行い、今後の弓道研究にどのような新たな視点が必要かを見出すことを目的とする。

日時 : 令和2年9月12日(土)13:00～15:00
 開催方法: Zoomを用いたリアルタイムでのオンライン開催(予定)
 講師 : 全日本弓道連盟副会長 浅野有三氏
 一般社団法人愛知県弓道連盟名誉会長 宇佐美義光氏
 静岡県立島田商業高等学校教諭・静岡県弓道連盟理事 中山研人氏
 司会: 五賀友継(国際武道大学)

参加方法について

- ① 弓道専門分科会会員には登録されたメールアドレス宛に直接ご連絡します。
- ② 日本武道学会会員で弓道専門分科会に所属されていない方で参加をご希望される場合は、9月9日(水)までに弓道専門分科会事務局までご連絡ください。

日本武道学会弓道専門分科会事務局
 担当: 五賀友継(国際武道大学)
 E-mail : budo.kyudo@gmail.com

なぎなた専門分科会 研究会

日 時 2020 年 8 月 29 日（土）13：30～15：30

場 所 zoom オンライン開催

（ホームページから申し込まれた方へ ID などを後日送付いたします）

演 題 ①「なぎなた選手における傷害の特徴とその予防について」

講 師 橋本 留緒（丸太町リハビリテーションクリニック）

内 容 あらゆるスポーツ・武道をする中で傷害は起こり得るが、予防できる傷害も多く存在する。様々な競技においてスポーツ傷害の予防は、①傷害調査、②傷害の原因、メカニズムの特定、③予防策の導入、④予防策の効果判定、という予防の実践モデルに沿って行われてきた。しかしながら、なぎなたではスポーツ傷害に関する研究がほとんどなく、傷害予防は指導者の経験に頼っているのが現状である。そこで、なぎなたのスポーツ傷害の特徴を把握するために、2018 年 3 月に大学生なぎなた選手を対象として傷害に関するアンケート調査を実施したので、その結果を報告する。結果を踏まえ、理学療法士の立場からなぎなた選手に必要なと考えられる身体機能や、稽古前後のケアの方法などを紹介する。また、現場でのスポーツ傷害に対する意識や、実際に行われていることについて簡単なアンケートを実施する予定なので、現在のなぎなたの現場に適した傷害予防についてディスカッションしたい。

演 題 ②「新型コロナ感染拡大に伴い自粛期間中における‘なぎなた愛好者’のからだの健康と今後の対策」

講 師 田中 ひかる（近畿大学）

内 容 新型コロナ感染拡大に伴い 2020 年 4・5 月の「ステイホーム」自粛期間から緊急事態宣言解除後のおよそ 1 か月以内の「なぎなた愛好者の健康度や生活習慣」の実態を 2020 年 7 月 1 日から 31 日の間で調査した。そのなかで、なぎなた愛好者における健康度・運動・食事・休養の各尺度から 4 つの傾向を知り、健康度・生活習慣パターンの特徴をみた。さらに、私たちは「新しい生活様式」が求められるなか、なぎなたの活動をはじめ新しい取り組みなど様々な行動変容がみられた。以上のことから第 2・3 波に対する備えをはじめ、健康の増進や生活習慣の改善を探る。

障害者武道専門分科会企画 オンライン討議会

障害者への武道普及

— 新型コロナウイルス感染拡大を契機とした新しい日常の中で —

話題提供者	森脇保彦（国土舘大学）
	濱名智男（日本文化大学）
	アレキサンダー ベネット（関西大学）
	エリック ボルテル（i-Karate ベルギー）
	マルガレータ ジョハンソン（ABCD スウェーデン）
	荒川尊祐（国際武道大学）
コーディネーター	南澤 徹（北海道恵庭南高等学校）
	大橋千秋（一般社団法人 障害者武道協会）
	松井完太郎（国際武道大学）

日時：令和2年9月13日（日）13:00～14:00

場所：Zoom ウェビナー（下記から事前登録してください）

https://zoom.us/webinar/register/WN_GCCmYWuISv6-Y-hFnDJ1Fg



障害者を対象とする武道療法の効果を科学的に検証することは困難を極めます。事例が少なく、同じ障害に分類されても状態・状況がそれぞれに異なり、また効果が出るまでに一般的に長い時間が必要となるからです。それでも私達にできることは、事例を積み重ねるたびに、仮説・可能性を論じ合うことだと考えます。

新型コロナウイルス感染拡大の中で、武道指導を実施する方々が、これまでにない様々な対応をなさいました。それが小さな萌芽的なものであっても、新しい日常における標準的なものになる可能性があります。例えば、オンライン稽古は、それ自体が障害者への武道普及に大きな可能性を持っているはずです。そこで柔道・剣道・空手道を中心に、より多くの事例を共有し、新型コロナウイルスと共にある新しい日常の中で、どのように障害者への武道普及をするのか、その可能性を討議します。

なお、日程・時差調整の都合上、話題提供の多くは、事前にインタビューを収録するかたちで実施します。

参加無料（一般の方も参加できます）事前に上記アドレスからご登録下さい。

開会時 10 分ほど頂いて障害者武道専門分科会総会を実施いたします。

ご不明な点は、右記松井までお問い合わせください。kantaro@budo-u.ac.jp

中華人民共和国における空手道の受容・展開過程に関する研究

○謝勁文（早稲田大学）

【目的】

本研究では、筆者が注目するのは次の二つ課題である。課題①は、中華人民共和国（中国）建国後における空手道の受容過程を調査・考察する。1984年に中国における空手道の導入以後、約30年間が経過した現在、全国で240の競技団体（各省、学校競技チームなど）が中国空手道協会に加盟して、競技者は10万人以上が存在している。しかしその詳細な研究は未だなされていない。課題②は、中国スポーツ機関の管理下における空手道の展開過程とその問題点を調査・考察する。空手道の文化性とオリンピック種目化に伴うビジネスイベント性との相克の問題がある。現在、中国空手道協会による空手道普及の方針にどのような問題点があるかを考察する。以上により空手道の受容・展開過程を包括的に描こうとするのが、本研究の目的である。なお、本研究は史資料とインタビュー調査に基づいて行う歴史研究である。

【方法】

課題①について、日中両国の新聞記事を中心に用いて分析した。課題②について、国家体育総局が出した文書及び記事、「中国空手道協会関係規程」、『全国空手道指導教範』などの書籍・資料、中国における空手道普及活動について関係者の何泓孝氏にインタビューした内容を用いて分析した。

【結果および考察】

本研究の成果は以下の通りである。(1)新中国建国後、銘苧拳一は上海出身の友人を介して、ブラジル大統領の推薦により1990年に上海で空手道の普及を開始した。1999年に上海市武術協会空手道委員会を成立し、総監督に就任した。多年の努力によって2007年までに中国空手道練習者は10万人に達し、中国における空手道普及に大きな影響を与えた。(2)2006年5月29日、国家体育総局「2006, 206号」文書により中国空手道協会を設立することが承認され、「ボクシング・テコンドー運動管理センター」の管理下に置かれている。2008年12月9日に山東省青島市で中国空手道協会設立大会が開催された。会議では、中国空手道協会憲章を発表して、国家体育総局の副局長である于再清氏を中国空手道協会の初代会長に選出した。2012年、全国に空手道の普及を拡大するために、全国空手道教範の『体育空手道』が出版された。その内容は一つ流派を中心に構成されており、各流派を総合的に論じた理論及び方法書が必要である。

A-2

大学生空手道選手の試合における実力発揮に及ぼす心理・社会的要因

○谷木龍男（清和大学）、田井健太郎（群馬大学）、麓正樹（東京国際大学）

【目的】稽古やトレーニングで培った実力を試合で十分に発揮することは、選手だけでなく指導者・スタッフが切望するところであろう。本研究は、大学生空手道選手の試合における実力発揮に及ぼす要因を心理・社会的要因を探索的に検討するものである。

【方法】

1. 調査協力者：関東学生空手道連盟及び（一社）関西学生空手道連盟 1 部に所属する大学空手道部部員 225 名（男性 157 名、女性 68 名、平均年齢 19.6 ± 1.2 歳、平均競技年数 13.7 ± 2.5 歳）。
2. 調査項目
 - 心理的要因：心理的競技能力（DIPCA.3）、グリット（日本語版グリット 12 項目尺度）、首尾一貫感覚（日本語版 SOC-13 項目版尺度）
 - 社会的要因：入試形態（推薦／一般など）、居住形態（実家／独居／寮など）、経済状況感、アルバイト就労状況、朝食の摂取状況、睡眠時間
 - 練習の質と態度：「練習の負荷」「練習での追い込み」「練習での目標や目的」「必要な練習」「練習の楽しさ」「空手道への好意」をそれぞれ 1 項目で尋ねた。
 - 実力発揮度：重要な試合での実力発揮度を 0% から 100% のアナログスケールで回答を求めた。
3. 手続き及び倫理的配慮：研究者又は各部の指導者が各大学の空手道部部員に対して対面で調査協力を求め、同意が得られた部員がオンライン調査に回答をした。

【結果および考察】実力発揮度とそのほかの変数の単相関分析を行った。その結果、心理的競技能力 ($r = .53$) およびその高次因子「自信」($r = .53$) と「作戦能力」($r = .43$) との間に有意な中程度の正の相関が示された (全て $p = .01$)。グリットと首尾一貫感覚とは有意な弱い相関が示された (それぞれ $r = .18, .19$, 共に $p < .01$)。練習の質に関しては、「練習の負荷」($r = .02$) との間に有意な相関はなく、「練習での追い込み」($r = .26$)、「練習での目標や目的」($r = .31$)、「必要な練習」($r = .31$)、「練習の楽しさ」($r = .19$) と弱い有意な正の相関が示された (全て $p < .01$)。社会的要因変数との有意な関連は示されなかった。

これらの結果から、大学生空手道部員の試合における実力発揮に及ぼす要因は心理的競技能力の「自信」と「作戦能力」、「練習での追い込み」、「練習の負荷」、「必要な練習」、「練習の楽しさ」であることが示唆された。また、実力発揮に関連する社会的要因を特定することはできなかった。

今後、インタビュー調査などを実施し、本研究で明らかとなった関係性を質的に検討していくと共に、縦断的研究を実施し、「実力発揮」との因果関係を検討することが必要である。

空手家が語る中国武術の実態：1922-1945 の期間に着目して

○劉暢(早稲田大学)

I. 緒言

近代以降の日本において、中国武術は武道関係者によって語られてきた。なかでも大正末期から昭和初期にかけて、多くの空手家たちは中国武術を空手の源流とし、日本本土に紹介した。沖縄出身の空手先駆者たちは中国武術をどのように認識していたのか、また中国武術に関する情報はどのように手に入れたのか。本研究は日本における中国武術の普及の始まりを探るため、これらの問題を明らかにすることを目的とする。

II. 研究方法

本研究は史資料の批判的検討に基づく歴史研究である。主に用いた資料は空手関係の著書、新聞記事、空手家らの回想録などである。研究期間は初めて中国武術を言及した『琉球拳法唐手』が出版した 1922 年から、冷戦に伴う東西陣営の対立による中国武術関係の情報が一時的に日本で見られなくなり始めた 1945 年までとする。

III. 結果と考察

- 1920 年代から 1930 年代にかけて、多くの空手家は空手の源流を中国武術に求め、そして中国武術の起源は少林寺で仏法を説かれた達磨大師にあるという「達磨起源説」を掲げた。その後、1940 年代に中国武術の起源を明代の道士、張三豊に託す「張三豊起源説」がみられた。
- 「達磨起源説」と「張三豊起源説」は信憑性に欠く説であり、前者の内容は『易筋経』に初見し、1915 年に出版された『少林拳法秘訣』により中国で流布した。一方、後者の内容は王征南墓誌銘（1669）に初見し、20 世紀初頭に出版された多くの武術書籍にみられる。日本の多くの空手家らはこれらの説を無批判に受け入れている。
- 中国武術に関する情報は『靈肉修養神通自在』（1920、『易筋経』の訳書）などの書籍、宮城長順、上地完文など訪中経験のある沖縄出身空手家や、蔡長庚など在日する華僑空手家を通して日本に伝来した。
- 中国武術と空手の関係について、距離を取る考えを示す空手家もいる。こうした考えの背後には、沖縄の武術が日本の空手として発展したことへの称賛と空手の文化的固有性の強調に加えて 1930 年代以降、日中関係の悪化に伴う脱中国文化の意図がある。

IV. 結論

中国武術は空手と深い関わりを持つ技術であり、大正末期から昭和初期にかけて多くの空手家らは空手の源流を説明するため、当時、中国国内に存在する虚実混同の説が用いられていた。こうした中国武術に関する情報は訳書、訪中経験のある沖縄出身空手家や在日する華僑空手家を通して日本に伝来した。

沖縄空手の「型の構成」に関する研究

○嘉手苺徹（沖縄空手研究所）

【目的】型は、「初動」（礼法・構えと象徴的な挙動）、「技法の展開」（様々な技法）、「終動」（象徴的な挙動と構え・礼法）の3つによって構成され、「型の構成」としてとらえることができる（『武道学研究』第49巻第2号、2016年）。本研究は、沖縄空手の型の構成について、初動と終動がどのように行われているのかを比較・分析し、考察するものである。

【方法】沖縄県では、2018年に「第1回沖縄空手国際大会」を開催し、空手と古武道の競技を行った。大会には44カ国から2119名が参加している。空手は、流派の系統を3部に分け、「首里・泊手系」（指定の28型）、「那覇手系」（同10型）、「上地流系」（同7型）の合計45型を競技規程で示す指定型とした。指定型は流会派によって異同があるため、各流会派から選出された指導者クラスの有段者が45型を延べ132名で演武して撮影、大会実行委員会のホームページに動画でアップされた。

本研究では、大会実行委員会が撮影した動画の45型132種の礼法を除いた初動と終動に着目して分類を行い、比較・分析した。初動や終動に含まれる構えや象徴的な挙動は流会派によって解釈や位置づけは時期によって変容し、曖昧さを持っている。型の核心となる技法に対して初動と終動は二義的ともいえるが、型の一部としてほとんどが省かれることなく継承されてきた。

【結果および比較・分析、考察】

1. 「首里・泊手系」28型（演武型85種）

初動は17種、終動は12種であった。終動が初動と同じになる型は69型で、異なるのは16型であった。外観の類似性を考慮すると、初動、終動ともに1)両拳で構えたタイプ、2)両掌で構えたタイプ、3)右拳左掌で構えたタイプ、4)初発又は終末の技法で構えたタイプに整理できる。

2. 「那覇手系」10型（演武型40種）

初動は2種、終動は1種であった。初動は、1)両掌で構えたタイプ、2)両拳で構えたタイプで、終動はすべて初動の最初の構えと同じであった。「那覇手系」を代表する剛柔流は、戦前期まですべての初動は1)2)を連続して行っていたが、戦後1)に統一した会派と戦前期のまま継承した会派に分かれている。

3. 「上地流系」7型（演武型7種）

初動は2種、終動は型に含まれる技法の構え4種であった。終動はすべて初動と異なっていた。上地流は福建南拳系の3型を継承して、1950年代に5型を新たに創案して型の体系化が行われてほぼ統一された。

3つの系統の流会派の初動と終動に含まれる構え・象徴的な挙動は、異同はあるもののほとんどが両拳、両掌、右拳左掌を用いた類似性が見られた。

【結論】沖縄空手の3つの系統は、近代以降、それぞれの型を保有する流会派として体系化が進んできたが、初動と終動の類似性から同一の源流を持つものと推察される。

香川輝著『剣道極意』にみられる女性論の背景

○大石純子（筑波大学）

【目的】武芸・武道と女性の歴史を紐解くにあたり、そこには大きく二つの立場がある。一つは、武芸・武道的な活動を行った女性やその活動、それにまつわる史実への着目である。もう一つは、武芸・武道と女性の関わりに付随し、あるいは影響を及ぼした考え方・思想への着目である。武道と女性に関する歴史研究では、横山健堂、山本節、宮川禎一の研究、柔道においては、嘉納治五郎先生伝記編纂会、丸山三造、藪根敏和ら、山口香、溝口紀子などの諸研究がある。なぎなた（薙刀）においては、三田村邦彦、井上アヤ子、中村民雄、前畠ひろみ、福田啓子などの諸研究、剣道では、庄子宗光、境英俊、大塚真由美、小澤博、前田シン子、新里千佳野・矢野裕介ら、の諸研究など管見の限りでも先行研究は多数ある。これらの研究では、女性に関わる武芸・武道の史実解明及びそのような活動をした女性自身に焦点が置かれてきた。これに対して拙稿（日本武道学会 51 回大会研究発表抄録・身体運動文化研究 25 巻 1 号）では、『近代剣道名著大系』所収の近代期剣道書を網羅的にみて、その著者らがどのように女性について論じたかを分析考察し、武道と女性の係わりの背後にある考え方の概要を明らかにした。そして、特に香川輝が『剣道極意』において顕著な女性論を展開していたことを指摘し、香川の女性への短刀術・剣道奨励論の一端についても論じた。多くの先行研究とは若干異なる観点からの考察により、これまで正面からの研究対象としては見逃されてきた香川輝の女性論が浮き彫りにされた。しかし、香川輝の思想展開の中で武道と女性の関連付けがどのような段階を経てなされたのか、影響を受けた思想があったのか、等については未解明のままである。よって、本研究においては、それら課題の解明に向けて、香川輝著『剣道極意』の女性論の形成の背景を探ることを目的とする。

【方法】香川輝（1862-1923）は、知事として、剣道家として活躍したが、その晩年において、4 編の論考を世に出している。最も充実して体系化された内容を持った著作は大正 5 年（1916 年）4 月 8 日に大正書院から刊行された『剣道極意』であるが、同年 12 月 20 日に同じく大正書院から『袖珍剣道極意俗解』も刊行している。香川はこの他に 2 つの雑誌に剣道に関連する内容を記した小論を掲載している。一つは明治 42 年（1909 年）4 月 10 日発行の雑誌「成功」16 巻 1 号に掲載されたもの、もう一つは『剣道極意』刊行後の大正 6 年（1917 年）8 月 1 日発行の雑誌「雄辯」8 月号に掲載されたものである。本研究では、『剣道極意』の女性論の背景を探るにあたり、『剣道極意』に先立って発行された雑誌「成功」に掲載された香川による小論の内容、その刊行時頃の諸事象などに注目する。

【考察】『剣道極意』の女性論を分析すると、冒頭の「総論」で「我が國古來女子ノ冷遇」について述べる中で「武士道」に言及している。続く「第一編第一章 剛柔」では、「男女各々剛柔ノ二端ヲ備フ」と論じる。雑誌「成功」の小論でも「剛柔」と「武士道」が語られる。「成功」刊行約 1 年前には新渡戸稲造『武士道』邦訳の刊行があり、更に遡るが明治 35 年には香川が剣を学んだ山岡鉄舟口述の『武士道』が光融館から刊行される。これらと香川女性論の関係を探る。

A-6

日本におけるフェンシングの導入史 —当時の剣道とのかかわりに着目して—

○結城倫弘（天理大学体育学部）

【背景】

武道の固有性について考える際、国外の類似する格闘技と比較を行うことがある。本研究は、武道種目の中でも剣道（剣術）と、その比較対象として挙げられるフェンシング（西洋剣術）に焦点を当てるものである。

フェンシング（西洋剣術）は日本に導入されて以来、常に当時の日本の剣道（剣術）と比較がなされてきた。そこで、フェンシング（西洋剣術）がどのような経緯で導入され、両者が比較されるようになったのか、またそこでどのような議論がなされてきたのかを明らかにすることは、剣道の固有性を考える際の一助と成り得ると考えられる。

【先行研究の検討と本研究の目的】

先行研究としては、塩入宏行「フェンシングの歴史(その1)—16世紀イタリアのフェンシング—」「中世より19世紀に至るフェンシングの歴史(2)」「中世より19世紀に至るフェンシングの歴史(3)」、柴田将男「西洋剣技の武術からスポーツへの変遷過程に関する一考察」などが挙げられる。

上記の研究では、海外におけるフェンシングの歴史や西洋剣技からスポーツとして発展していった経緯については述べられているものの、日本におけるフェンシングの導入について、また導入当初の日本人の反応について研究したものは管見の限り見当たらない。ここに本研究の考察の余地がある。

以上のことから本研究は、日本におけるフェンシングの導入史を考察し、当時の日本人のフェンシングに対する反応及び実践の様相を明らかにすることを目的とする。

【方法】

本研究においては、各大学剣道部及びフェンシング部の部誌などの史料を読み込み、解釈することにより問題にアプローチしていく手法を用いる。各大学剣道部及びフェンシング部の部誌からは、スポーツとして導入されたフェンシングがどのように受け入れられ、行われていたかについて当時の時代背景も考慮しながら、記述を抜き出し考察していくこととする。

【結果および考察】

日本におけるフェンシングの導入過程を考えたとき、大きく三期に分けることができる。まず、第一期は導入前期である。この時期は、明治45年（1912）に笹森順造がアメリカに渡った時から、昭和6年（1931）日本にスポーツとしてフェンシングが導入されるまで、海外において交流がおこなわれていた異文化交流の期間といえる。第二期は、昭和6年（1931）から、第二次世界大戦が終結する昭和20年（1945）までの、日本におけるフェンシングの導入期である。岩倉具清によって、日本に持ち込まれたフェンシングは、異国のスポーツということもあり、導入当初は用具の不足などの困難があったにもかかわらず、学生スポーツが一番の受け皿となり普及していく。最後の第三期は、第二次世界大戦後に、フェンシングを利用した剣道の保存や新たなスポーツ「しない競技」を生み出すこととなる自文化への応用期である。

当時の日本人の反応や、実践の様相については当日の発表に譲ることとする。

近世剣術における戦術に関する一考察 —とくに対人的な戦術に着目して—

○軽米 克尊（天理大学体育学部）

【はじめに】

剣道は、数ある運動競技の中でも特に生涯をかけて実践されているものの一つである。生涯をかけて稽古をすることが出来る理由の一つとして、体力によって勝敗が左右されにくい点が挙げられよう。剣道は様々に変化する相手の動きを見極め分析する洞察力や、その分析によって相手に何かしらの仕掛けを行い、心を迷わせ、身体が崩れたところを打つ、という対人間での駆け引きが最も重要であると考ええる。この駆け引きの重要性は近現代剣道のスタートといわれる高野佐三郎『剣道』においても説かれるところである。

本研究は、近世剣術における対人的な駆け引きを「戦術」と定義し、この戦術が歴史の中でいかに変わってきたのかを明らかにしようとするものである。

【先行研究と問題の所在】

近世剣術の戦術に関する研究としては、これまでに源了圓、高橋進、湯浅晃、加藤純一、前林清和など多くの研究者が行っている。また、近年ではこれらの先学を踏まえた上で小森敏也が「近世剣術における戦術に関する一考察」という修士論文を執筆している。これらの研究においては、新陰柳生流における戦術を中心に、「表裏」「懸待」「拍子」「水月」「色」などの戦術に関するキーワードを元に見解が述べられており、新陰柳生流において、高度な対人的戦術が展開されていたことが明らかである。また、小森は剣術の三大源流に基づき、網羅的に広範なキーワードを収集し、新陰流系統に戦術の記述が圧倒的に多いことを報告している。

これらは近世剣術の戦術を特に新陰流系統を中心に考察をしているが、この新陰流からは多くの分流が生まれていく。時代が下り、流派が増えていくにつれ、この流派の特徴である戦術がいかなる変容をしていくのかを研究した先行研究は管見の限り見ることが出来ない。この辺りに本研究の考察の余地がある。

以上から、本研究においては、新陰流の戦術について、特に対人的な戦術に着目し、近世期、時代が経過するにつれて発生した分流の中で、いかなる展開を見せたのかという点を明らかにすることを目的とする。

【考察】

新陰流で駆使されていた戦術は、「表裏」「懸待」などを駆使することで相手の精神を迷わせ、自分の思惑通りに相手を行動させるという点が重要であると考えられるが、こういった考え方は近世中期に興った分流である夕雲流や直心流において否定されている。これら二流は、新陰流系統である真新陰流の小笠原源信齋から派生した流派であるが、両流の流祖はともに自身が源信齋から学んだ剣術を否定し、自流を創始しており、流派創始の背景に「戦術の放棄」とも言える思想があったと考えられる。また、流派創始の経緯として、流祖が師である小笠原源信齋と実際に立合い、打ち勝つといった描写もみられる。

なお、本研究は天理大学一般学術・研究・教育活動助成を受けている。

A-8

大正期における柔術の進展：近代柔道整復術の創成

丸澤遼子(日本体育大学大学院) 久保山和彦(日本体育大学)

背景： 明治期において、次第に衰退した柔術界は概ね三つの活路を見出していく。一、警察などの保安職の武術指導者として、従来の武術をそのまま役立てる者。二、廃れていく柔術道場の中で、経営の柱になっていく接骨術へ向かう者。三、流派横断的に柔術を編纂した講道館柔道へ向かう者などである。それぞれの中心には、一)久富鉄太郎(関口流)、二)吉田千春(天神真楊流道場・接骨術)、三)嘉納治五郎(講道館柔道)があった。

大正期になると、近代の要請に呼応するように、柔術界の一)、二)は「講道館柔道」へ、また二)及び三)の道場主を中心として、二)に傾斜して接骨術の医学的専門性を高めつつ「接骨術から柔道整復へ」進展していったのである。

目的： 本研究においては、大正9(1920)年に「営業規則」として創成したばかりの柔道整復師会の史料『東京柔道整復師会会報』(三点)を調査して、担い手らの施術方法を把握し、この時期における柔道整復の位置づけを明らかにする。

方法： 大正期の東京都柔道整復師会会長であった荻原七郎及び長谷五郎、二名の口述史料を詳しく解題する。

結果： 1)柔道整復は非観血療法である。2)柔道整復は「(従来接骨術)柔術の一部であった時代」から、「医療技術としての柔道整復」へと変化していた。3)整形外科の補完医学に位置づけられていた。4)柔道整復術の講習会が、大正15年には開催され始めていた。

まとめ： この時期の骨折・脱臼に用いられた施術体系の一端を知り、柔道整復と医師に導入されていた整形外科との技術比較することにより、当時は整形外科の「補完医学」に位置づけられていた。また、柔道整復の講習会が、大正15年から開催され始めており、現在では100校を超える「養成学校」の起点と考えられた。

A-9

精神・知的障害者を対象とした柔道療法の治療効果に関する介入研究

○中村和裕（福山大学）

【目的】柔道は技術や身体機能の向上を習得する過程で、合理的思考力や敢闘精神を獲得し、自己の精神修練や他者への貢献といった、心理・社会的な人間としての成長を促すといわれている。その柔道を精神・知的障害者や発達障害児に療育療法として実施する取り組みが国内外で実施されている。しかし、その有効性を定量化し、評価する手法は確立されていない。本研究では、1975年から精神科医療機関で実践している柔道療法について、精神・知的障害者を対象に **social skills training (SST)** の構造を取り入れた柔道療法の効果発現様式の同定と定量化を目的として、得に自己効力感や、生活の質に対する主観的意識の変化に焦点を当てて検討した。

【方法】2018年12月から2019年5月まで、病院付設型の精神科デイケア、就労継続支援A型・B型事業所に通う、精神・知的障害を有する地域生活者を対象に柔道の治療的効果に関する調査を実施した。調査対象者34名中柔道療法体験希望者20名に対して、2018年12月12日（水）から2019年5月22日（水）まで、一回1時間の柔道療法を月2回×6カ月の計12回実施した。柔道療法開始前・開始13週間後・開始26週間後（以下 期間と記す）に体力測定と心理測定を実施した。14名の非柔道療法実施群については同期間に体力測定と心理測定だけを実施した。調査尺度は、柔道療法が不安や緊張感を軽減し、予想外の出来事に適切に対処する自信を高める効果や、今の日常生活、環境、出来事をありのままに受容する意識を育む作用を提供するといった仮説から、主観的ウェルビーイングとリカバリー意識の変容を The Subjective Well-being Inventory (SUBI:11 因子 40 項目)、および Japanese Version of the Questionnaire about the Process of Recovery (QPR-J:5 因子 22 項目)で調査した。

【結果および考察】調査対象者34名中柔道療法に参加した20名において、SUBI心の健康度における下位因子の幾つかにおいて有意な変化を認めた。SUBI心の健康度では、あることを成し遂げたことによって得られる達成感や、不安や予想外の出来事に対して対応できるという自信の変化を認めた。SUBI心の健康度やQPR-Jに関連する下位因子では有意な変化が認めない傾向が見られたが、これらについては研究条件の差異に関係があると推測する。また本研究に見られた治療効果はどの程度持続するのか、本研究で網羅されていない運動生理学変化は存在するのか、またそうであればその心理面への影響があるかなど、いくつかの補完すべき重要な疑問が残っている。

【結論】結論として、認知行動療法の SST (Social skills training) の要素を含んだ柔道療法は、比較的早い段階に主観的幸福感に含まれる達成感や自信を獲得させることが示唆された。この結果は精神科リハビリテーションとしての柔道療法の効果発現様式の理解と定量分析の一助になるものと考えている。

A-10

ドイツにおける柔道の生涯スポーツとしての捉え方に関する研究： スペシャルニーズがある対象者向けのアプローチを中心に

○マーヤ・ソリドーワル（津田塾大学）

【目的】本研究は科学研究費助成基金・若手研究 B「ドイツにおける生涯スポーツとしての柔道の捉え方：対象者別の指導法を中心に」（2020-2024 年）の一貫としてスペシャルニーズがある対象者へのアプローチを問題とする。ここで「スペシャルニーズ」（Special Needs）とは、特別な要求がある合理的な配慮が必要とされる障害がある対象者の意味である。Gärtner (1990:p. 177)ⁱは柔道の競技スポーツとリクリエーションスポーツ（生涯スポーツ）への区別の重要性を強調し、リクリエーションスポーツとしての柔道のインクルーシブスポーツとしての可能性を述べる。本研究においてインクルーシブスポーツとしての柔道の可能性に焦点を当てながら、ドイツ柔道連盟のガイドラインに見られる障害がある対象者へのアプローチを考察してみた。

【方法】本研究の第一段階として先行研究に基づいて 1970 年代に始まったドイツにおけるスペシャルニーズ柔道の主な展開と方針を把握してみた。続いて、ドイツ柔道連盟のガイドラインの分析に基づいてスペシャルニーズがある対象者別へのアプローチを明らかにしてみた。

【結果および考察】1970 年代から旧西ドイツの柔道が競技スポーツから子供を中心とする生涯スポーツへと展開すると同時に、柔道の教育的な価値が社会的に認められ、インクルーシブスポーツとしての普及も始まる。柔道療法も含むインクルーシブスポーツとしての柔道特有の価値はその教育理念と全面的な運動としての特性にあると指摘されている。ⁱⁱまた、Gärtner (1990:p. 177)ⁱⁱⁱは自分のスキルレベルに集中及び適応できる全面的な教育手段としての柔道の価値を論じる。

【結論】ドイツ柔道連盟は「皆のための柔道」をコンセプトに、インクルーシブスポーツとしての柔道の普及を図っている。柔道は「精力善用・自他共栄」という「技術的と倫理的な原理」を基盤とする「全面的な教育」であるため、合理的配慮を認めるインクルーシブスポーツとして捉える。^{iv}ドイツ柔道連盟の「障害がある柔道家のための昇級審査規定」において対象者の要求にあわせた合理的配慮が見られる。また、2016 年に G・ID 柔道の昇段審査規定（初段のみ）が新たに採用され、指導者研修会においても「インクルーション」がテーマとされるようになってきた。

ⁱ Gärtner, A. *Integrating Physically Handicapped into Sport: Judo*, Doll・Tepper G., C. Dahms, B. Doll, H. Von Selzam, *Adapted Physical Activity. An Interdisciplinary Approach*, 1990, pp.177-181.

ⁱⁱ Innenmoser J., W. Janko, H.-J. Vögtle, *Judo als Rehasport. Behindertenspezifische Ausarbeitung der Sportart Judo*, 1992, pp.62-63.

ⁱⁱⁱ Gärtner, A. *Integrating Physically Handicapped into Sport: Judo*, Doll・Tepper G., C. Dahms, B. Doll, H. Von Selzam, *Adapted Physical Activity. An Interdisciplinary Approach*, 1990, pp.177-181.

^{iv} ドイツ柔道連盟のホームページ参照（2020 年 6 月 30 日）：

<https://www.judobund.de/fuer-aktive/judo-fuer-menschen-mit-einer-behinderung/>

A-11

各国の柔道クラブ所属児童保護者の柔道に対するイメージの比較

○曾我部晋哉（甲南大学），山崎俊輔（甲南大学）

一般
A-1
と
A-24

【目的】幼児期における子どもの意思決定は、保護者が代理で合理的観点から選択することが多い。近年では、子どもの選択・意思決定の発達側面から子どもに対して意思決定を要求する際に、選択肢を提供するなどの自律性支援が効果的で、統制的支援（意思決定を強要すること）よりも中央実行機能が発達することが報告されている（Bindman et. al. 2015）。しかし、子どもへの「習い事」を選択する際、選択肢を意思決定する消費者は保護者となる。消費者は、他者に影響されながら態度や消費行動を決定しており、自己観の違いにより他者から受ける影響に差異が生じる（Kurt et. al. 2011）。そこで、本研究は、欧州を中心に「習い事」として社会的地位を確立している「柔道」について、意思決定者である保護者を対象に、自己認知および他者認知の観点からどのように捉えているかを各国で比較することを目的とした。

【方法】各国の柔道クラブ所属児童（12歳以下）保護者（日本 n=92、カナダ n=62、オーストラリア n=78、フランス n=47、イギリス n=34、オランダ n=54、アメリカ n=44）を対象に、①保護者自身は「柔道」「柔道家」に対してどのようなイメージ持っているか（自己認知：SP）、②他者は「柔道」「柔道家」に対してどのようなイメージを持っていると考えているか（他者認知：SP0）、の2項目のアンケートを実施した。それぞれの項目の選択肢（複数回答可）は、肯定的選択肢と否定的選択肢の11対、計22個の選択肢とした。各選択肢の肯定的回答率と否定的回答率の差を算出し、柔道イメージ指数（JII: Judo Image Index）とした。そして11項目のJIIの平均（AJII）を算出し、各国で比較した。

【結果および考察】各国のJIIを以下に示す。日本（n=92）：SP(22.1)、SP0(12.5)、カナダ（n=62）：SP(40.3)、SP0(22.1)、オーストラリア（n=78）：SP(38.9)、SP0(21.8)、フランス（n=47）：SP(47.0)、SP0(20.3)、イギリス（n=34）：SP(29.7)、SP0(20.1)、オランダ（n=54）：SP(31.8)、SP0(19.2)、アメリカ（n=44）：SP(40.7)、SP0(18.0)であった。上記の結果をまとめると、柔道に対する保護者自身の自己認知が最も高い国はフランス（47.0）であり、逆に最も低い国は日本（12.5）であった。また、柔道に対する他者認知が最も高い国がカナダ（22.1）であり、最も低い国が日本（12.5）であった。つまり、フランスでは、柔道に対する消費者のイメージが肯定的である上に、他者認知も高い。そのため、柔道に対して社会的ステータスを感じている上に、他者へも自信をもって勧めることの出来る「習い事」としての社会的地位を確立しているものと思われる。しかし日本では、消費者である保護者自身が、他者から否定的なイメージを意識しながら「習い事」として選択している可能性がある。

【結論】今後、柔道が「習い事」として社会的地位を確立するためには、保護者の自己認知と他者認知を高め、そのギャップを小さくする必要がある。そのために、諸外国が認知している柔道の価値を再認識し、再確立する必要がある。

A-12

柔道長期実践者の SOC（ストレス対処能力）と健康関連 QOL の関連性 ～一般高齢者との比較～

○小崎亮輔（関東学園大学）、菅波盛雄（順天堂大学）

【背景】

現代は、健康寿命を延伸させることが社会的な課題のひとつとなっている。これまでに健康寿命を延伸させるための手段として、適度な運動を実施することが有効であると報告されている（安永ら，2007）。またスポーツの実践については生活習慣病の罹患率低下やストレス反応の抑制など、健康増進に寄与することが多数報告されている（Crews et al., 1987）。これらの報告から、高齢者については運動やスポーツの実践が医療費の削減につながることも期待されている（長岡，2012）。以上より、現代における身体的・精神的・社会的健康に関する社会問題については、スポーツの実践によって大きく改善される可能性があると言えよう。筆者らはこれまでに柔道の長期・高齢実践者に対して健康状態の調査を実施してきた。そのなかでは健康に関連する心理的能力である SOC（ストレス対処能力）が健康を測る指標である健康関連 QOL に有意な影響を及ぼしていることがわかっている。

そこで筆者らはこれまでの報告や研究を勘案し、柔道の長期実践者の健康状態と一般人の健康状態の比較検討を実施することとした。調査の対象は、これまでも対象としている柔道の長期実践者に加え、A 県 M 町の一般住民を対象とすることとした。

【方法】

本研究では 2018 年度の日本ベテランズ国際柔道大会（於：愛媛県松山市）への参加者と A 県 M 町の町民祭への参加者を対象に質問紙を用いた集合調査を実施した。質問紙については、SOC 尺度と健康関連 QOL 尺度に加え、運動や精神的健康に関わる尺度で構成された。また柔道の実践者にのみ体組成計による体組成の測定を実施した。

【結果】

2 度の調査の結果、合計で 395 の標本を回収することができた。柔道の長期実践者について、特に 60 歳以上の体脂肪率に注目してみると、同年代の体脂肪率を調べた先行研究の結果より明らかに低いことがわかった。その他、採集された各尺度のスコアや分析結果については、発表当日に公表するものとする。

手裏剣術考Ⅲ（根岸流の相対武術知新流）

○早坂義文（古武道研究会）

【序文】

知新流手裏剣術は、尾張徳川家を中心として御三郷の間で幕末までに行われ、戦中時代まで続いた流儀である。昭和初期からこの武術の研究機当たったのが福田信正先生である。

同先生は、藤田西湖門下の手裏剣術等を研究された人物で、戦後、福田先生とともにこの流儀の保存に当たったのが恩師齋藤聰先生で、根岸流手裏剣術と相対する武術である。

【知新流手裏剣術考】

知新流は、尾張藩に継承された武術で、丹羽織江氏張から始まる。傳書に張也は、宮本武蔵の弟子に竹村興左右衛門と云う者の門弟、円明流剣術八田九郎右衛門知義の弟子、飯島市兵衛が工夫して飯嶋源太左右衛門及日置重右衛門、朝野傳右衛門等へ段々伝えて、全人より丹羽織江氏張が傳授を受けたものである。飯島市兵衛は、（宮本武蔵―竹村興左右衛門―林市郎右衛門―八田九郎右衛門と続く）宮本武蔵の流れをくむ流儀武術である。

【知新流の武術体系】

流儀の技法は、釘形手裏剣（大型、中型、小型の三種類）、短刀形手裏剣、脇差打、二刀剣術武術で。目録には、八ヶ条の立打の教え、五ヶ条の打ち方の教え、印可五ヶ条から成り立っている。剣術は、二刀使いを含め七本から成り立っている。

この流儀の教えで、「道中旅行の節山賊の類に出会った時に先を打って進み、敵を退ける器成り。然し手裏剣にて必ず一人を打ち倒すものと思ふべからず、人は一刀一突にて死

するに非ず、手裏剣にて即死させんとは不覚なるべし。唯先を打ってその虚に乘じ 勝ちを得るには良器たるべし。」としている。

【根岸流と知新流の相対関係】

根岸流は、向相^{こうそう}といって左足を前の左自然体に成り、その位置から手裏剣を右手に持ち左手を真っ直ぐに構えて放つ投擲武術である。

知新流は、左足を前にした一足調の平行立に立ち、右足を進めながら右足が前に言ったときに手裏剣を右手から放ち的に立ち投擲武術である。

このように、右足が前に出るか、後ろにあるかによって、進退動作に微妙に変我がみられるが、いずれにしても左手に太刀等の武具を持っていることを想定して、それぞれの流祖が工夫したもので、甲乙は着けがたい。

【結論】

古武道の保存継承は、本当に難しい。しかし、ひとたび途絶えたなら、歴史から消えてしまう。福田信正先生が保存した知新流を受け繋いだ齋藤聰先生から引き継がれ、そして次の世代につなげ、その技法と資料をバトンタッチするため日々精進していきたい。

A-14

甲陽軍鑑を論拠に再び「京流」について ～西国に興った「京流」が東国に残った～

○山梨支部 内田建也

甲陽軍鑑は長いあいだ虚偽説が唱えられていたが、近年山梨県立大学の酒井憲二氏が国文学的な立場から虚偽説を覆す「甲陽軍鑑大成」を発刊、虚偽説は打ち消された。このような立場から、この甲陽軍鑑を論拠として再度「京流」について論じてみた。

先ず、大日本剣道史（堀正平著）・日本剣道史（山田次郎吉著）とも京流の道統として山本勘助を挙げているが、その伝承は判然としない。

しかし、甲陽軍鑑では、その末書下巻之下に山本勘助の略歴について「山本勘助うわさ五ヶ條の事」という一項があり、その生い立ちを知り又京流を修行したことを知ることでもある。更に甲陽軍鑑末書下巻の中第一に「山本勘助軍配拔書之事」、「鬼一法眼秘伝書」の一項もあり、五行思想に基いた勘助流軍配術を紹介している。即ち山本勘助は京流を鬼一法眼から授かり京流と共に陰陽道を身につけ、軍配師として、相次ぐ戦いに占いをういたことを窺うことができる。このことについて著「山本勘助」の著者平山優は「山本勘助が軍配術を身につけたのは、鬼一法眼の京流を学ぶなかで会得したものと考えられる」と言及している。

即ち、山本勘助が武田信玄に仕える前に学んだ京流を、武田信玄から命ぜられ「兵法記」を著わす時「兵法記」の巻三剣術の巻第三至極の図の事に京流の形を転用したと思われる。後に堀正平が「大日本剣道史」を著わすに際し、「兵法記」の巻三剣術の巻第三至極の図の事を京流形に間違いないという思惑から京流形として掲載したものと思われる。しかれば「兵法記」の巻三剣術の巻第三至極の図の事以外の11項目の剣理と実戦的な教えも京流の教えと思われる。

従って、西国（山城国）に興った京流が「兵法記」という名目で東国（甲斐国）に残ったと言えよう。

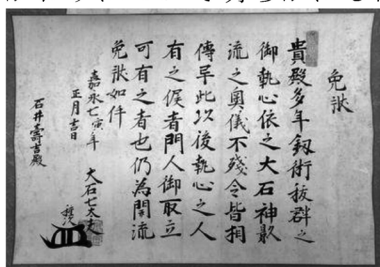
高鍋藩大石神影流師範 石井寿吉について

森本邦生（広島県立広島工業高等学校）

I はじめに

高鍋藩大石神影流師範 石井寿吉は高鍋藩士である石井進の長男として天保2年10月20日に生まれた。藩校明倫堂で文武を学び、嘉永3年、柿原澤之丞とともに柳河藩の大石七太夫（進種次）に入門、嘉永7年正月には七太夫より免状を授かっている。

本研究では石井寿吉の英名録からその動向をさぐり、高鍋藩と大石神影流のかかわりについて明らかにしたい。



大石神影流免状



石井寿吉肖像



英名録

II 高鍋藩の武術

高鍋藩は正徳3年(1713)城内に稽古所を設け藩臣に武芸、兵法の稽古をさせた。明和2年(1765)には藩主の在城中に必ず一度武芸上覧を行い、一か月に一度大目付以上列席のうえ稽古改めを行うことを定めた。安永7年(1778)には藩校明倫堂が開設された。

武術は明倫堂開設後も従来の稽古所で稽古が行われた。剣術には雲弘流、心影流、示現流、淵水流、武備志流などがあった。槍術は騎馬以上に種田流が行われ、騎馬より下には月山流長刀が行われた。

III 石井寿吉の廻国修行

石井寿吉が嘉永3年に大石七太夫に入門して以降の試合相手を記した英名録（表題なし）によると、嘉永3年には大石門下と試合したほか、熊本藩で試合し、嘉永4年から嘉永5年の半ばまで九州を廻国し、嘉永5年8月頃から嘉永6年にかけて長州藩を手始めとして瀬戸内海を經由して京都、奈良、大坂、四国を廻国し再び九州を廻国している。嘉永7年と安政2年には高鍋藩と近隣の藩で試合し、安政3年には江戸で試合をしている。安政4年の記録はなく安政5年には九州を廻国し、安政5年の暮れには江戸での試合の記録がある。また万延元年と文久元年には再び江戸での試合の記録がある。

IV まとめ

石井寿吉は藩命により嘉永3年に柿原澤之丞とともに大石七太夫に入門し、高鍋藩に大石神影流をとり入れた。高鍋藩はまた同時期に柳河藩の加藤善右衛門のもとに武藤庄之進と泥谷敦水を入門させている。剣術は元治二年に大石神影流と津田一伝流の二流派を当藩流として他を排した。高鍋藩は大石神影流の藩への導入によって剣術の活性化を図ったと考えられる。

外国人の日本論にみられる武道に関する一考察 —明治時代に着目して—

○田嶋結（筑波大学大学院）、酒井利信（筑波大学）、大石純子（筑波大学）

【研究の動機および目的】外国人が武道を捉える際には、文化的・社会的背景の違いから日本とは異なる認識がみられる。その点を具体的に明らかにしていくことは、未知の武道に対する外国人の見解を知ることとなり、今後日本人が武道を海外に広く普及していくに際し有益な情報となりうる。演者はこの観点から研究を進め、イーエスモース『日本その日その日』などの外国人による日本論に見られる武道に関する記述について考察し発表してきた。本発表では、特に明治時代の文献に着目する。過去に目を向けると、外国人が武道に触れる機会が増えるのは、海外文化と日本文化が交錯し始めた明治維新以降である。開国から明治時代にかけて、西欧文化や西欧人が日本へ流入し、日本文化は外国人にとって異質な興味深いものとして観察、記録された。このように、明治という時代は、日本の門戸が世界に開かれ、武道が外国人の目に広くさらされた時期であり、外国人の武道に対する初期の印象を明らかにする上において注目に値する。よって本研究は、明治時代における外国人による日本の武道の捉え方がどのようなものなのかを明らかにすることを目的とする。

【方法】本研究は、明治時代に外国人によって日本について記された文献から、武道に関する記述を正確に読み込んで解釈する、いわゆる文献学的手法を用いる。扱う文献については、佐伯彰一・芳賀徹編『外国人による日本論の名著 ゴンチャロフからパンゲまで』（1987）に記載されている文献の中から、明治時代の著作に焦点を当てる。まず、各文献から「武」に関する記述を抽出し、読み解いていき、そこから日本の武道の捉え方を考察していく。

【結果および考察】『外国人による日本論の名著 ゴンチャロフからパンゲまで』に記載されているもののの中で確認できた明治時代の文献は14冊である。著者には欧米の他、中国出身者もあり、それぞれの立場や国、地域、そして、日本人との見解の相違点、共通点がみられた。抽出できた「武」に関する記述で最も多かったものは「武士」「侍」に関するものであり、その容姿や習慣（切腹）、武士の象徴でもある刀について関心を抱いていることが窺えた。また、武士文化の中で培われた「武士道」についても記述がみられ、外国人が「武士道」を知る契機となったこととして1899年に新渡戸稲造の『BUSHIDO-The Soul of Japan-』が刊行されたことの影響が推察された。武士階級が消滅し、西洋文化が流入した明治時代において「武士道」の「死」に対する考え方を「受け入れがたいもの」とする著者がいる一方で、日本の歴史的・文化的背景から理解しようとする著者もいた。明治期にあっても外国人にとって「武士」「侍」に対するインパクトは大きく、日本を象徴するものの一つと捉えられていたようである。その他、武術・武道に関する記述もみられ、中には実際に実践した著者もあり、柔術・剣術・弓術・相撲についての具体的記述がみられた。特に柔術は体格に関わらず、相手の力を利用する方法が魅力の一つであったことが窺え、相撲は相撲取りのその大きな体つきが強い印象を与えていた。

大日本武徳会に関する一考察 － 新聞記事にみる 1900～1904 の様相について－

○筒井雄大（国際武道大学）、酒井利信（筑波大学）、大石純子（筑波大学）

【研究の動機及び目的】明治維新以後、日本古来の武道の普及・発展を目的として設立された「大日本武徳会」は、日清戦争の英雄である小松宮彰仁を総裁として迎え、警察組織を中心とする内務省の地方組織を活用したことで、全国的な組織へと拡大し、武道の再興において大きな役割を果たした。しかし、後半は太平洋戦争への時局の流れとともに政治的な役割を持つようになり、その結果、日本の伝統文化としての武道が戦争の善導策として利用され、武徳会は戦後、戦争責任を問われ解散することとなる。

以上のように、武道を牽引しつつ激動の歴史を刻んできた武徳会だが、その変遷を具体的な様相から明らかにすることは、近代日本における武道史研究において意義あることと言える。その第一段階として、設立当初の様相を改めて詳細に把握する必要がある、このことを本研究の目的としてこれまで研究を進めてきた。

【研究方法】先行研究において近代日本におけるスポーツジャーナリズムの礎を築いたと指摘されている『大阪毎日新聞』と、まだ先学において取り扱われていない『東京日日新聞』を検討し、先行研究では指摘されていない事柄について明らかにする。また本研究で分析・考察の対象とする時期は、武徳会の設立日及び日清戦争の終戦日でもある明治 28 年（1895）4 月 17 日から日露戦争が開戦され、武徳会設立からちょうど 9 年の明治 37 年（1904）4 月 17 日までの期間とする。同期間の武徳会関係記事・広告を網羅的に調査し、データベース化したうえで同系統のものを分類し、武徳会の具体的な様相を明らかにする。

明治 28 年（1895）4 月 17 日～明治 33 年（1900）4 月 17 日までの様相については、本学会前回大会も含む学会において発表済みであるため、本発表では、明治 33 年（1900）4 月 18 日～明治 37 年（1904）4 月 17 日までの様相についての発表を行う。また、研究対象期間全体の複数の記事・広告を俯瞰することで顕在化した、特筆すべき事項を挙げて本研究の締めくくりとする。

【結果及び考察】多岐にわたる武徳会関係記事・広告から、数多くの様相が見受けられたが、近代日本陸海軍の兵制に多大な影響を与えたイギリスとフランスの領事及び武官を第 1 回武徳祭大演武会に招聘していること、陸海軍関係者が大いに関わっていること、海軍関係者が関わり、本来近世の武芸十八般にも現在の日本武道協議会に加盟する武道種目にもない短艇の競漕会が行われていたことから勘案すると、通説では、内務省の地方組織である警察組織を活用したことから、警察組織とのつながりを取り沙汰される武徳会であるが、日清戦争から日露戦争までのこの期間に設立展開した武徳会はやはり、軍部との密接な関係もその大きな特徴としてあげるべきであろう。

A-18

近代以降の武道書にみられる武士道思想に関する一考察

○堀川峻（筑波大学大学院）、酒井利信（筑波大学）、大石純子（筑波大学）

【研究の背景および目的】 武道が国内外を問わず、多くの人々に親しまれる身体運動文化へと発展してきた過程の中で、大きな転換点に明治維新が挙げられる。武術・武芸は武士社会という母体を失いつつも、日本人全体また海外へと受け継がれていった。中林氏は、その明治維新以後の武道の精神性に武士道思想が影響を与えていることを指摘し、また武士道思想と武道には近世以前から複雑な繋がりがあったことも示唆している。しかし、現在残されている資料からはその詳細な考察をみることはできず、また他にこの課題について深く言及がなされているものもみられない。以上から本研究では、武士道思想が近代以降の武道に与えた影響を、近世以前からの流れを踏まえつつ紐解くことで、近代以降の武道の精神性の一端を解き明かすことを目的とする。

【方法】 本研究は、近代以降の武道書にみられる武士道の語やそれに関連する記述について考察を行う、いわゆる文献学的手法を用いる。また武道の中でも近代以降の各時代で学校体育の正課として国民の教育を担い、国家的に隆盛した近代の武士道思想とも関係の深い剣道と柔道に関する文献、特に『近代剣道名著大系』や『嘉納治五郎大系』等に所収されている文献を中心に、考察を行っていく。

【結果および考察】 『近代剣道名著大系』所収の文献の中で最も早く武士道の語が用いられたのは明治 28 年に著された隈元実道『武道教範 抄』であり、それ以前の文献にはみられなかった。明治期の代表的な武士道書は、日清・日露戦争以降に著されたものが多いが、剣道書においても同期間から武士道の語が頻出していた。大正 4 年に著された高野佐三郎『剣道』において説かれた武士道には、その徳目に快活・剛毅・忍耐・持久等の語が含まれている。これらの語は、武道正課編入運動によって初めて武道が随意科となった際の、文部省令第 26 号 13 条「體操」でみられる「快活剛毅堅忍持久ノ精神ト規律ヲ守リ…」の記述と酷似している。高野は『剣道』の緒言において、編述に当たり影響を受けた人物に正課編入運動の中心であった星野仙蔵や小沢愛次郎らの名前を挙げており、武士道の徳目にもその影響が現れている可能性が示唆された。剣道書に見られた武士道の徳目に関しては他にも、「博愛」など近世以前にはあまりみられなかったものが語られるようになっていた。嘉納治五郎の著述には、同時代の剣道書に比べて武士道の語が現れる回数が非常に少ない。『武士道叢書』等武士道に関する数々の文献を著し、近代の国家主義的な武士道を先頭に立って鼓吹した井上哲次郎とも親交の深かった嘉納治五郎であるが、武士道の語を多用することはしなかった。そのわずかな記述の中で、明治期に著されたものは近世以前からの武士道を受け継ぐことが重要視されていたが、昭和以降の記述では「武士道のみでは物足らぬので、今日の社会に必要な全ての道徳を説かねばならぬ」と、武士道だけでなく、時代に合わせた道徳観を説いていくことの必要性が強調されていた。詳細は当日の発表に譲ることとする。

新当流における宗教性について

—『兵法自観照』にみられる神々に注目して—

○二宮 恭子(筑波大学大学院), 酒井 利信(筑波大学), 大石 純子(筑波大学)

【研究の動機及び目的】日本における武道の宗教性についてはこれまで、特に近世剣術伝書を取り上げ剣術への禅の影響を指摘し、心と体の関係について論ずる研究が多くなされてきた。しかし酒井(2016)は、それより以前の中世において神道の影響を受けた時代があったことを刀剣の思想を中心的なテーマとしつつ指摘している。つまり、武道史の中では禅の影響を受ける前に神道の影響を受けた時代があり、その神道的宗教性は一部流派の中で受け継がれてきたということである。剣術流派として鹿島神宮を中心に発展してきた新当流は、この神道的色彩が顕著であり、その技術の特徴として呪術性が確認でき、また、新当流の起源や技術が述べられる際には神話的イメージが潜在する傾向が窺われた。このことについては既に発表済みである。神話の中で語られる神道的な神々は、古代日本人の信仰や畏怖の念の対象となり、精神世界を表徴するものである。ここでは、具体的な神話的イメージを探るため『兵法自観照』にみられる神々に注目し、新当流における宗教性の一端を明らかにすることを目的とする。

【方法】近世以前の武道は徹底した秘密主義をしいていたため、流派の奥義を詳細に文章に記すことは少ないが、『兵法自観照』は大月関平が著した貴重な古文書であり、この古文書を解説した史料をデータベース化し、主に取り扱うこととする。また神道的な宗教性にアプローチするには、古代の人々の精神世界について把握していく必要がある。その為ここではそれらが表現されている『古事記』『日本書紀』を用いて、その内容を踏まえつつ、『兵法自観照』の解釈を行うこととする。

【結果及び考察】『兵法自観照』の記述において、タケミカヅチの他に経津主大神・大己貴神・事代主命・健甕角神・饒速日命等の記紀神話に登場する神名を確認することができた。『兵法自観照』に記されている、これらの神々が関わる神話は、オリジナルの記紀神話の内容と異なる部分が認められる。例えば、タケミカヅチをあげると、この神が登場する記紀神話としては、「国譲り神話」や「神武東征神話」があり、『兵法自観照』においてもこれらの神話が援用されている。「国譲り神話」の内容が記紀神話と『兵法自観照』で異なることは先学で指摘されているが、本研究では更に『兵法自観照』において、記紀神話ではタケミカヅチが登場しない「神功皇后説話」を援用し、あえてこの武神を関係づけて記述していることを確認した。この他、「八岐大蛇退治神話」「天孫降臨神話」について記紀神話と『兵法自観照』の記述内容に相違が認められる。これらの詳細は当日の発表に譲ることとする。

武道関係用語に関する一考察

○阿部智美（筑波大学大学院）、酒井利信（筑波大学）、大石純子（筑波大学）

【研究の動機及び目的】武道に関する用語は、その概念が曖昧なまま使用されている場合が多く、時代によって表現は様々である。酒井（1994）が「武道史研究において、従来のように歴史的事実を抑えていくことは勿論大切なことであるが、一方、それぞれの時代で、どのような用語が、どのように使われていたかを整理することも重要ではないだろうか」と述べているように、武道に関する用語の整理は、武道学において重要な基礎的研究であるといえる。以上から、本研究では現代の武道に影響を与えた武芸流派が多く出現し始めた中世以降を対象とし、各時代における武道関係用語の様相や意味内容を整理し把握することを目的とする。

【研究方法】本研究は、武道に関する文献目録と、今村嘉雄他『日本武道大系』所収の文献史料を用いて、二部構成で行うこととする。まず第一部として、武道関係の文献のタイトルに注目し、目録からタイトルに含まれる武道に関する用語を全て抽出したものをデータベース化し、各時代でどのような用語が使用されていたか、またその変遷の分析、考察を行う。次に第二部として、『日本武道大系』全巻から武道に関する用語を全て抽出し、その意味内容を整理し分析、考察を行う。

第一部で研究対象とする文献のタイトルには、その文献を象徴する重要な言葉が現れていると考えられる。本研究は、文献のタイトルと文献史料の内容の二つをみていくことで、より詳細に武道関係用語の実態を明らかにしようとするものである。

【結果及び考察】第一部、第二部を通して特筆すべき内容の一つとして、用語「剣道」について取りあげる。

これまでの研究では、「剣道」の用語が用いられ始めた時代を寛文（1661-1673）とするものと、寛永（1624-1645）とするものの二つの説が見られた。しかし、寛永の頃から用いられ始めたとする説は、笹間（2003）によって否定もされている。このように、「剣道」の用語の初出については先行研究において見解が分かれる所であったが、本研究の第一部において、寛永以前の文献である『丸目蔵人の剣道の型』（慶長年間（1596-1615））というタイトルに「剣道」の用語が新たに確認された。さらに、筑波大学附属図書館所蔵『熊本縣史料』所収の文献史料の中に『丸目徹齋（長恵）剣道印可状』（元和10年（1624））が確認され、タイトルに「剣道」の用語がみられた。丸目蔵人は正式には丸目蔵人佐長恵と称し、後に徹齋と号しており、タイ捨流の創始者であるとされている。よって、これら二つの史料はタイ捨流関係のものであると思われる。また第二部では、「剣道」の用語の使用が、先行研究で指摘されているように平常無敵流・安倍立の二流派のみでなく、タイ捨流関係の伝書の中にも確認された。

以上、本研究で用いた文献目録や史料は、二次史料であるため慎重に考察を進めていく必要があるが、寛永以前または平常無敵流・安倍立以外の流派において「剣道」の用語の使用が示唆された。詳しい内容については、当日の発表に譲ることとする。

『起倒流組討一相之傳』にみる起倒流組討の兵法観に関する一考察

○菊本智之（常葉大学）

【目的】

『起倒流組討一相之傳』は、真田宝物館が所蔵する松代藩真田家文書「幸貫公関係起倒流柔道伝書 二十六冊 同巻物 五巻」に収められている史料の1つである。史料の中には、松平定信から伝授されてきた起倒流柔道、甲乙流関係史料以外に、寺田市右衛門正浄、正栄親子の手による伝書がかなりの割合で含まれており、『起倒流組討一相之傳』は、正栄によって記されたものである。

寺田市右衛門正浄は、瀧野専右衛門遊軒とともに堀田佐五右衛門頼庸の弟子において双璧であり、「先師未傳之妙訣（内向）」を発明し「この道の卓才」と呼ばれた人物である。真田幸貫が行った起倒流柔道は、瀧野専右衛門遊軒→鈴木清兵衛邦教→松平定信→真田幸貫と継承されたものであり、鈴木清兵衛邦教が家伝の「神武の道」から新たな境地を見出して開いた流派であることから、真田幸貫が行った起倒流柔道と寺田市右衛門正浄、正栄親子の起倒流とは、すでに異なる流れを汲んでいた起倒流ということになる。そこで本研究では、『起倒流組討一相之傳』にみられる兵法観について検討し、真田幸貫の起倒流柔道の修行、研究、思想に与えた影響を明らかにしていく一助としていきたい。

【方法】

真田宝物館所蔵の松代藩真田家文書「幸貫公関係起倒流柔道伝書 二十六冊 同巻物 五巻」の中から『起倒流組討一相之傳』を取り上げ、同史料群の中から「起倒流組討」に関する史料数点で補完しながら解説、分析、考察を行い、寺田市右衛門系伝書の兵法観について考察を深める。

【結果および考察】

『起倒流組討一相之傳』は、「武意之巻」「士常之巻」「思無邪之巻」からなる。「武意之巻」には「劔術乃修行ハ組討ナリ 躰術の始メハ劔術ナリ 始ナシ終ナシ 始終一貫乃所 万藝一致 此場に至て武藝の大道と云々」と記され、組討の概念は、劔術、体術などの区別なく、「万藝一致 この場に至りて武芸の大道」としている。「士常之巻」には「見る事聞事を専すれハ 外を勤て内を失ふナリ 念より出而其事に止る 見聞学知行住座臥 物に止る事なかれ 是を決定するを不動智と云」「平生兵法にあらずと云事なし(略)況や士道に於ておや」「起倒流本体性鏡 是を以而可_レ知_ル 不_レ見_ニ知_ル 鏡智流に云 是を見て是を不見 新陰流に云 目付の第一なり 目無になれといふ義也 可_レ秘_ニと云」と記され、不動智を援用した武士の常に心掛けるべき兵法の考え方が示されている。「思無邪之巻」には、「(前略)将より卒に至る迄 常々軍詞をも心掛け 兵の道を可_レ嗜事也 随分身を全し勇猛興国ノ躰修し 仁性_ヲ自_ラ生する所 武藝の大道なり 今世 切組一通乃劔術ハ不_レ能_レ取_ニ 死へき場所を知て 一寸も不_レ退を士と云 主人を知り己_ヲを知り国をしり地形を知り時節を知り相手を知る事 常々可_レ慎 是を當流氣扱ひと云 是を知るを兵法乃達者と云」と述べながら、究極的には「万法一致にして至理極る 則_ハ心乃一刀に非すと云事なし 劔術躰術格々別々と思ふ人世に多し 大道不案内の人と知るへし 世法に不_レ限 奥儀を知れハ外なし(以下略)」と起倒流組討の兵法観を述べている。

A-22

宝蔵院流創流期、戦国末の合戦体験者が、術技継承に当たり 「直槍は突くもの」と伝えたことに関する考察

○石川哲也（全日本槍術連盟）

【目的】槍は「長柄の先端に剣形の穂を嵌めた刺突用武器」と定義され、久保田正志「日本での槍戦術の推移と特徴」において槍による戦法とその変遷について戦国期の用法について、各古記録上から武士ユニットによる個人戦が主体で突きにより勝敗が決していたことが記録されていたことが論じ、また足軽における長柄による集団戦術についてもまとめられている。その一方、江戸期に入ってから著述された著者不明「兵法物語」の記載である「槍は叩く物」の記載を正しいものとして風潮する傾向がみられ、江戸時代に完成された槍術流儀は平和な時代の産物とし戦国期の用法が反映されていないという考え方が横行している。しかし、叩くという所作は、槍の利点である一動作の攻守や、突出すことによる手間分の利など槍の特性が生かされず、雑兵用に長くなればなるほど動きが鈍くなる長さ（ $y = ax^2$ ）の問題など不合理な点が多い。そこで多くの流儀が戦国時に端を発しており、なお流儀の創始時期の人物が合戦に参戦している事例も確認されていることから、こういった合戦経験者が、技を構成し継承するにあたり、相手の攻撃所作をどうとらえていたかを分析することにより、戦国後期の槍の用法を確認することを目的とする。

【方法】戦国期に合戦経験のある流儀継承者として宝蔵院流系、（石垣原）松崎統字、（大阪の陣）渋江小平治、中村市右衛門、高田又兵衛、（有馬）高田又兵衛、磯野主馬、大島雲平：大阪の陣を取り上げ、その流儀の直槍の動作を確認することにより、合戦経験者が槍の動きをどうとらえていたかを検証する。

【結果および考察】抄録では中村市右衛門 7 流系、高田又兵衛の例を挙げる。表から十箇までの 21 本を各流系で直槍の動きの表す表現を 161 確認したが、槍合せ時に「打」とあるのは 11 のみであり、別流系の同一の型と比べると、相手の槍を拂う動作を打と表現しているものや、他では突くと表現しているものを打込と表現しているものであり、集団戦における打ちのようなものではないことは明らかである。同様に宝蔵院各派のものも基本的には相手の隙に付けまたは突入る、拂うという動作で槍合わせの技が構成されている。

【結論】宝蔵院流各派の継承者は、合戦の経験も踏まえ合戦に有効な術技として術技を継承し、各藩へ採用されたが、合戦経験者が存命の時分に有用な術技として採用されていることから、その内容は戦国期の合戦の個人ユニットの槍合わせの姿を反映している。この中で直槍の用法として、相手の隙に付け突込む、相手の槍の払い打ち、誘い打ちなどが見られるが主体は突きであったことが確認された。「信長公記」天正 23 年の坂井大膳の軍が「2・3 間叩立候へども敵の鎧は長くこなたの鎧はみじかくつき立てられ」とあるのは、叩いた用法も用いられたこと示されているが、長い槍では突き立てたことも示され、長柄の雑兵の集団密集戦でも突き立てが用いられていることを示している。槍による個人ユニットの突き合いも含め、合戦では集団密集戦に限定されるものではないことから叩くという用法は合戦においては限定的であったと考えられる。

鏡心明智流四代桃井春蔵直正の退避先についての再検討

○柴田洋一（大阪市立扇町総合高等学校）

一般
A-1
A-24

【目的】本稿の目的は、江戸三大道場で有名な士学館の鏡心明智流四代桃井春蔵直正が、鳥羽・伏見の戦い前に徳川軍から致仕した後の退避先について再検討を加えることである。先行研究として、古くは堀正平(1934)、戦後の再発見は加藤政一(1967)がある。ほかに石神卓馬(2002)や間島勲(1996)にも詳しい。菅田八幡宮の資料等が次のように記す。1867(慶応3)年に第15代將軍徳川慶喜に従い京都から大坂に移る。12月28日(11月とも)致仕届を出して幕府より離脱。南河内の石川幸雲院へ弟子と逃れる。1868(慶応4)年5月初旬に新政府へ帰順。天満の建国寺の境内で剣術を教授。

【方法】退避先とされる南河内の石川幸雲院の所在を探索するとともに、全日本剣道連盟発行の『鈴鹿家文書解説』(2006)所収「第655号の後證遺言並追書」や、桃井家に残されていたとされる書類の写し等を用いて再検討を行った。

【結果および考察】通説とされた南河内に石川幸雲院は存在しない。正しくは人物名で石川香雲院(蘭方医)である。彼は幕府奥医師で慶喜の侍医で、伊東玄朴と松本良順との間に活躍をした。1866(慶応2)年から法印に昇叙し、香雲院と号した。福沢諭吉が1854(安政元)年長崎滞在中に教えを受けた蘭方医である。

直正は、1867(慶応3)年に京都の屯所において9月より脊骨痛のため、石川香雲院へ治療を受けながら、遊撃隊頭取の今堀(越前守)登代太郎に「勅命に対する暴挙を遺憾に堪えず」と数度諫め、天皇への恭順を主張したが聞き入れられなかった。12月に移った大阪では屯所であった天満の町奉行組屋敷にて寒邪・発熱・腹痛・下痢のため、平野町の医師石村友徳(漢方医)へ治療を受けたが、12月28日致仕届を提出。1月3日夜、遊撃隊頭取の駒井但馬守(志津馬)家臣の襲撃を受け、幕府より離脱。弟子の導きで中津藩蔵屋敷へ避難。1月8日あるいは13日、大坂に進駐した官軍の伏見宮の御内で、春蔵門弟の萩原内蔵が迎えに来て松原宿(現東大阪市)の孫弟子吉田源兵衛宅へ弟子と逃れる。

1868(慶応4)年1月17日に大坂の北御堂の仁和寺宮嘉彰(伏見宮第8王子)陣営に出頭して事情を説明したところ、お聞き届けになり、大坂表御用処の萩原氏宅に同居。2月23日、江戸に逃れた今堀氏からの使いが帰東を促したが断り、時勢を論じて帰した。5月初旬、新政府へ帰順(伏見御所御役所より、願いの通り御家来を仰せ付けられた)。

【結論】通説は誤りで、桃井春蔵直正の退避先とされた石川幸雲院は正しくは蘭方医の香雲院であり、退避先は中津藩屋敷から松原宿の吉田源兵衛宅であった。直正は幕末・維新において影響力をもった剣豪でありながら、十分に研究されているとは言えない。さらに研究を深め、真実を明らかにする意義がある。

武道に関する国会議論

○田中宏和（桐蔭横浜大学）、秋山大輔（九州産業大学）

I. はじめに

わが国の社会状況はめまぐるしくかつ大きく変化してきた。この変化は、大きな社会問題を招き、同時に産業構造の変化、社会の高度情報化、国際化をもたらした。一方で、政治、行財政、経済構造、教育など社会の様々な分野において、従来のシステムの見直しが大胆な改革として推し進められている。

わけても教育の振興を図ることは、極めて重要な国民的課題であるとの認識の下に、これまでも様々な施策が講じられてきた。平成18年には教育基本法が改正され、平成20年には中学校学習指導要領の改訂がなされた。更に近年では、平成29年に幼稚園、小学校、中学校の学習指導要領がそれぞれ改訂され、続く平成30年には高等学校の学習指導要領が改訂された。

特に平成20年の中学校学習指導要領改訂以降は、武道が必修化され、これにより武道は、教育基本法における教育の目標を実現する役割を担っている。

その影響を受け、わが国における武道は、大きな国民的関心及び政治的関心を集めているといえよう。

そこで本研究では、武道に関する国会議論の論点について明らかにすることを目的とする。

II. 方法

国会（衆議院・参議院）常任委員会である衆議院文部科学委員会（旧文教委員会、旧文部委員会を含む）、参議院文教科学委員会（旧文教委員会、旧文部委員会及び旧文教・科学委員会を含む）の会議録を中心に議論の分析を行うこととする。

III. 武道に関する国会議論

武道に関する議論は、第1回国会衆議院文教委員会から展開されており、その後、第198回国会参議院文教科学委員会まで140回議論が展開されている。

しかしながら第1回国会から第45回国会までは、武道についての議論は、ほとんど展開される事はない状態であった。その後、第46回国会以降から徐々に議論が展開され、第159回国会以降はほぼ毎国会で議論が展開されている。

これは上述した、国民的関心及び政治的関心の高まりの表れといえよう。

そしてその主な論点としては、①武道必修化について（事故、安全管理、施設または予算の確保等）、②武道教育の重要性及びあり方について、③日本武道館の建設、運営及び助成について、④武道の振興、⑤施設の建設について、⑥武道の復活についてがあげられる。

この中でも、特に武道必修化に関しては、多くの時間が費やされ、議論が展開されている。つまりこれは武道に関する事項の中でも、とりわけ武道必修化が、国民的関心及び政治的関心を集めた現れといえよう。

このように武道に関する議論は、多岐にわたるものの武道必修化を中心に議論が展開されており、今後もその関心の高さからさらなる武道に関する議論が展開されることが予想される。

B-1

異なる竹刀重心位置が剣道初心者の気剣体一致に及ぼす影響

○椿 武（神戸親和女子大学）

【目的】

剣道初心者に限られた授業時間内で熟練者のような気剣体の一致した打突を修得させることは非常に難しい。これまで、打突動作に類似した運動の実践など指導方法の工夫による検討が行われている。打突動作は、1 m 以上の竹刀を短時間に振り上げ、振り下ろしをする操作を行い、同時に下肢の動作を協調させる必要がある。特に、実践的な打突を行う場合、竹刀を素早く操作しなければならないため、初心者は熟練者以上に操作する竹刀による影響を身体に受けると推察される。筆者は、剣道初心者を対象に同じ重さで長さの異なる3種類（3尺9寸、3尺8寸、3尺7寸）の竹刀を用いて面打突を行わせ、打突と右足の踏み込みのタイミングの時間差から竹刀の長さとの気剣体の一致の関係を検討した。その結果、竹刀の長さによる時間差への影響は認められないものの、身長に対する竹刀の長さが短い時は長い時と比較して時間差が少なく、熟練者の様な打突動作様式に近づき、各被験者の身長に応じた操作を行いやすい竹刀の長さがある可能性が示唆された（日本武道学科会関西支部 令和元年度研究発表会）。また、竹刀の操作性に関しては、長さ以外に竹刀の重心位置も影響を与えと考えられる。

一般
B-1
B-8

そこで本研究では、剣道初心者を対象に重心位置の異なる竹刀を用いた面打突動作時の気剣体の一致について検討することを目的とした。

【方法】

対象者は、剣道の専門的な指導を受けたことのない女子大学生10名とし、重心位置の異なる竹刀を持たせ一歩で打突できる距離（各被験者の足一刀の間合い）から実践的な打突動作を各条件5本成功試技が出るまで行わせた。その際、右足の踏み込み位置と打ち込み台の打突部にマットスイッチとテープスイッチを貼付し、打突と踏み込みの時間差をデジタイマー（オジデン社製）を用いて1000Hzで計測した。測定で用いた打ち込み台の高さは、各被験者の身長と同等の高さに設定し、測定試技は対象者ごとにランダムに行なった。

【結果および考察】

剣道初心者の打突動作の特徴として、踏み込み後に打突が行われ、初心者ほど両者間の時間差が大きくなる。しかしながら、剣道熟練者は打突後に踏み込みを行う動作様式であり、初心者の打突動作とは異なる動作様式である。本研究において、竹刀の重心位置と打突と踏み込みの時間差の関係について検討を行なったところ、重心位置の違いによる時間差への影響は認められなかった。しかしながら、身長に対する竹刀の重心位置においては、竹刀の重心位置が柄頭側の方が剣先側と比較して時間差が少なく、熟練者の様な打突動作様式に近づいた。このことから、竹刀の長さと同様に対象者の身長に応じた操作を行いやすい竹刀の可能性があることが示唆された。

B-2

大学生柔道競技者における減量時の身体組成・水分摂取量・発汗量変動の一例

○金持 拓身（桐朋中・高等学校），竹澤 稔裕（順天堂大学），前川 直也（国際武道大学），上野 剛（順天堂東京江東高齢者医療センター），平山 哲（順天堂大学），三井田 孝（順天堂大学），廣瀬 伸良（順天堂大学）

【目的】競技スポーツにおいて減量は，階級別競技種目の試合前に計量に向けて行う減量とパフォーマンスを向上させるために体重（体脂肪）を減少させる減量の2つがある．階級制を採用している柔道に競技者においては，前者の減量を行うことが多い．また柔道競技者は，3週間から10日程度の短期間で急速に体重を減少させる急速減量を実施することが多いが，問題点が指摘されている．柔道競技者の減量方法について，質問紙などにより調査は行われているが，減量時の体重と摂取水分量や発汗量との関連性については調べられた例は少ない．

そこで本研究では，実際に急速減量を実施している大学生柔道競技者について1週間ごとの体重，体脂肪量，体水分量，筋肉量および摂取水分量，推定発汗量などについて調べ，それらの関連性について検討した．

【方法】対象者：大学生柔道競技者14名を対象者とした．うち減量を行っている10名を減量群，減量を行っていない4名を非減量群とした．

期間：大会3週間前から前日までを調査期間とし，1週間ごとに測定を行った．また3週間前までを通常期，通常期から2週間前までを減量初期，減量初期から1週間前を減量中期，減量中期から1日前を減量後期とした．

測定項目：測定項目および測定方法は，練習前体重（kg），練習後体重（kg），体脂肪量（kg），体水分量（kg），筋肉量（kg）を体成分分析装置InBody730で計測し，練習中の摂取水分量をメスシリンダーで測定した．測定されたデータから推定発汗量（kg），体重減少量（kg），体重減少率（%）などを算出した．推定発汗量については，体重1kgあたりの減少を水1リットル（L）と換算し，以下の式を用いた．

$$(\text{推定発汗量}) = (\text{練習前体重}) + (\text{摂取水分量}) - (\text{練習後体重})$$

統計処理：測定されたデータを元に，減量群と非減量群の比較，および期間での比較については統計ソフトを用いて二元配置の分散分析および多重比較を行った．また，測定項目ごとの相関関係についても調べた．なお，練習内容に関しては大会1日前である練習後期を除いては，同程度の内容とした．

【結果および考察】減量群の通常期から前日まで3週間の体重減少率は平均（標準偏差）5.2（3.2）%であった．特に後期は2.4（2.1）%で最も減少した．体脂肪量減少率をみると，全体で13.9（8.1）%であったが，うち中期で13.3（6.1）%と最も大きく減少した．一方で，体水分量減少率，筋肉量減少率は，全体ではそれぞれ3.7（2.6）%，3.5（2.5）%と減少したが，ともに後期で最も大きく減少した．

【結論】大学柔道競技者の減量では，減量初期から中期にかけて，体脂肪量を減少させ，後期には，体水分量，筋肉量が減少させて減量を行っている．

柔道における肩車の運動学的技術分析

○伊藤悦輝（早稲田大学スポーツ科学研究科），平沼義浩（早稲田大学スポーツ科学研究科），長谷川公輝（早稲田大学スポーツ科学研究科），射手矢岬（早稲田大学スポーツ科学学術院）

【目的】

本研究は、柔道における肩車の熟練者（肩車得意）と未熟練者（肩車不得意）の動作の違いを明らかにすることである。

【方法】国内レベルの選手を対象とした。光学式モーションキャプチャシステムを用いて、肩車の施技する取の身体分析点（37点）の3次元座標値を得た。被験者（取）には普段通り投げるように指示した。肩車の分析区間は、取の脚の初動（離地）時点から受の脚がマットに接した時点までとした。分析区間を鉛直成分の身体重心加速度の最大値（相手を持ち上げる力が最大に発揮された時点）を境に前半を「崩し・作り局面」、後半を「掛け局面」とし、各動作局面の時間を100%として規格化した。

主な分析項目は、動作時間、身体重心速度（鉛直成分）である。

【結果と考察】熟練者と未熟練者の動作時間（図1）を比較すると、崩し・作り局面、掛け局面、総動作時間の全てで熟練者の時間が短かった。図1から崩し・作り局面の時間の短さが総動作時間の短さに影響していると考えられる。

次に身体重心速度の変位を比較すると、鉛直成分（図2）において、未熟練者は崩し・作り局面の75%あたりから急激に負の速度が増加したが、熟練者は25%から負の速度の増加が始まり、75%でも急激に負の速度が増加した。このことから、熟練者の重心の沈み込みの速さが、崩し・作り局面の時間の短さに繋がっているものと考えられる。

【結論】柔道における肩車の熟練者と未熟練者の動作の違いは、沈み込みの速さである。それが熟練者の崩し・作り局面の時間の短さに繋がっていると考えられる。

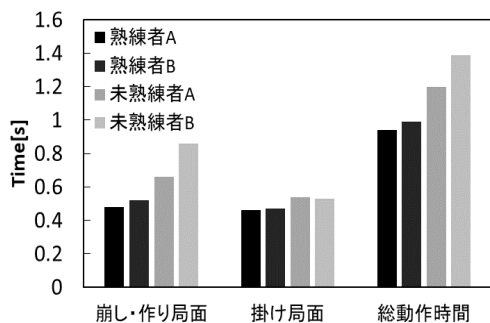


図2 動作時間

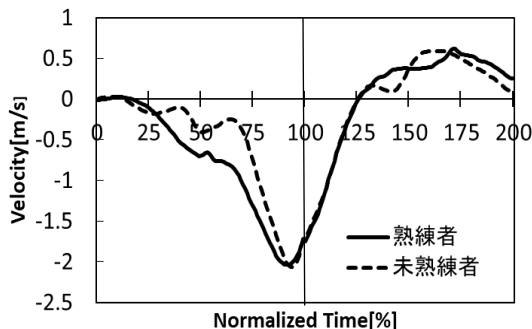


図1 身体重心速度（鉛直成分）

B-4

柔道の受のバイオメカニクス的研究 —熟練者における投げやすい受について—

○平沼義浩（早稲田大学スポーツ科学研究科），伊藤悦輝（早稲田大学スポーツ科学研究科），長谷川公輝（早稲田大学スポーツ科学研究科），射手矢岬（早稲田大学スポーツ科学学術院）

【目的】本研究は、柔道熟練者が体落の投げ込み（約束練習）を行う際の受の投げやすさの要因を明らかにすることである。

【方法】某大学体育会柔道部に所属する2年生以上の男子柔道部員を対象とした。被験者は事前にアンケートを実施し、投げやすさの総得点が上位であった部員2名（上位群）と総得点が最下位であった部員1名とし、受動作を比較した。三次元動作解析装置（Motion Analysis 社製）用カメラ8台を用いて、体落の投げ込み時における受動作の座標点を収集した。同時にフォースプレートを用いて、受の床反力も測定した。受には、実験用柔道着を着用させ、「普段の練習通りに投げられる」ように指示した。取は、柔道参段の現役実業団選手1名とし、「どの被験者に対しても同じ力で普段の練習通りに相手を投げる」ように指示を行った。分析区間は、自然体から取が動き出す地点から、取が右体落を施し、受の身体の一部がマットに接地するまでとした。

【結果および考察】上位群と下位部員の身体重心の変位を比較すると、前後成分（図1）において、上位群は自らの右足の離地と同時に身体重心が後方に移動していることが明らかになった。これは、取の掛けに従って身を預けていると考えることができる。一方、下位部員は、右足の離地後も重心位置が前方に移動し続けた。さらに、右足の床反力鉛直成分（図2）は二峰性を示した。これは、受が取の掛けに反して前方に崩れる姿勢を保ち続け、取の掛け足に体重がかかり減少し、離地する直前に受が意図的に地面を蹴ったと考えられ、この動きが投げづらい原因と推測される。

【結論】体落の投げ込み時における受の投げやすさの要因は、自ら投げられようとするのではなく、取の動きに従って、身を預けて投げられることである。

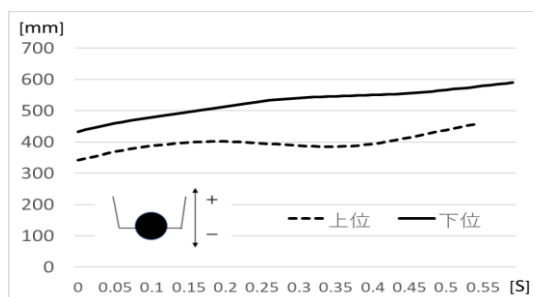


図1. 身体重心変位前後成分
(取の掛け足着地－受身)

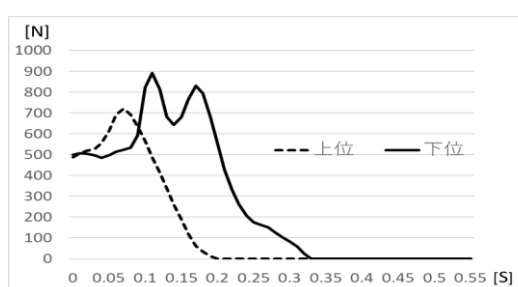


図2. 床反力鉛直成分
(取の掛け足着地－受身)

B-5

柔道の太外刈りによる頭部外傷に対するマウスガードの装着効果

○生田秀和（大阪体育大学），穴田賢二（石川工業高等専門学校），
石川美久（大阪教育大学），内村直也（大阪産業大学），
林 弘典（びわこ成蹊スポーツ大学）

【目的】柔道では，真後ろに投げられる太外刈りによって後頭部を打撲し，障害・死亡事故が起きている．ボクシングやアメリカンフットボールでは，頭部外傷の予防にマウスガードの装着が効果的であると報告されている．柔道の頭部外傷の予防策として，後ろ受け身の技能や頸部筋力の向上が提言されているが，マウスガードの装着について提言されていない．そこで本研究の目的は，柔道の太外刈りによる頭部外傷に対するマウスガードの装着効果を検証することとした．

【方法】投げられる人は男子大学生柔道選手 5 名（身長 169.8 ± 4.66 cm，体重 74.2 ± 9.80 kg）とし，投げる人は 1 名（身長 180.0cm，体重 107.0kg）とした．マウスガードは Nicotto 社製の Dr.ハミングを使用した．投げ込みを行う技は太外刈りとし，投げられる人はマウスガード装着時 5 回，非装着時 5 回の計 10 回投げられた．3 軸角速度センサ（MVP-RF8-GC，MicroStone 社製）を用いて，頭部で生じる前額軸まわりの角速度を測定し，得られたデータを数値微分して角加速度を求めた．マウスガード装着の有無による頭部最大角加速度を比較するために，willcoxon の符号順位検定を行った．有意水準は 5%未満とした．

一般
B-1
B-8

【結果および考察】マウスガード装着時と非装着時において，頭部最大角加速度に有意差は見られなかった（図 1）．これは，マウスガード装着の効果が報告されているボクシングやアメリカンフットボールと異なる結果であった．被験者はマウスガードの装着に慣れておらず，頸部筋力が発揮できなかったためであると考えられる．また，今回使用した簡易性のマウスガードでは，口腔内の噛み合わせが十分でなかったためであると考えられる．

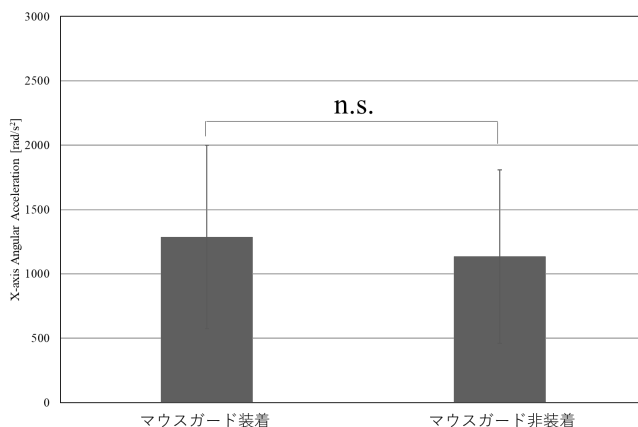


図1 マウスガード有無における頭部最大角加速度の比較

【結論】今回の実験では，柔道の太外刈りにおける頭部外傷に対するマウスガードの装着効果について明らかにすることができなかった．今後，普段の練習においてカスタマイズしたマウスガードを一定期間装着させたデータを収集することが必要である．

B-6

柔道の初心者と熟練者の後ろ受け身における頭部角加速度の比較

○林 弘典（びわこ成蹊スポーツ大学），穴田賢二（石川工業高等専門学校），
内村直也（大阪産業大学），生田秀和（大阪体育大学），
石川美久（大阪教育大学）

【目的】後ろ受け身について，初心者と熟練者の動作を比較したり，活動する筋を検証したりするなどの基礎的研究が行われている．そこで本研究の目的は，柔道の初心者と熟練者の後ろ受け身における頭部角加速度を比較し，基礎的なデータを収集することとした．

【方法】被験者は柔道の男性初心者 21 名（中学生 11 名，高校生 5 名，大学生 5 名）と男性熟練者 34 名（中学生 9 名，高校生 15 名，大学生 10 名）とした．初心者は無段者とし，熟練者は有段者（初～二段）とした．両者とも後ろ受け身ができる技能を有する者とした．被験者には，本人の同意を得て実験を行った．未成年者の被験者は保護者の承諾も得た（成ス第 33 号）．

実験では，被験者を水平に押す電動アームの装置を使用した．被験者は中腰の姿勢になって装置に向かい合い，2 種類の押され方で胸を押されて後ろ受け身を行った．1 種類は押される瞬間を被験者に伝えて押した（計算なし）．もう 1 種類は被験者の注意をそらすために計算問題を解かせている最中に押した（計算あり）．その際，加速度計（MVP-RF8-GC，MicroStone 社製）で前額軸まわりの頭部角加速度を測定した．次に，計算ありグループの初心者と熟練者，計算なしグループの初心者と熟練者のそれぞれにおいて頭部最大角加速度を比較した．統計処理は Mann-Whitney's U test を用いた（有意水準 5%未満）．

【結果および考察】表 1 より，計算なしの高校生において，熟練者の頭部最大角加速度は初心者よりも有意に高かった．これは初心者が押される前から警戒して首や体幹に力を入っていたことによって，押される力を減少させたためであると考えられる．その他において有意差は見られなかった．これは被験者を押す力がそもそも弱かったために有意差が見られなかったと考えられる．

表1 初心者と熟練者の頭部最大角加速度（rad/s²）

計算なし				計算あり			
被験者	初心者	熟練者	有意差	被験者	初心者	熟練者	有意差
中学生	138.3	141.0	p = 0.99	中学生	179.9	169.9	p = 0.88
高校生	146.0	214.7	p = 0.01	高校生	154.2	237.0	p = 0.08
大学生	207.5	172.7	p = 0.18	大学生	182.9	172.0	p = 0.53
全体	174.5	200.1	p = 0.24	全体	156.6	182.9	p = 0.04

【結論】本研究では，十分なデータを収集することができなかった．今後，強い力で被験者を押すことによって基礎的データを収集することが重要である．

【付記】本研究は競輪の補助を受けて実施されました（2018M-180）．

B-7

柔道選手における運動間に行う前腕筋群へのアイシングが把持筋持久力に及ぼす影響

○志々目 由理江（宮崎大学），藤田 英二（鹿屋体育大学）

【目的】

柔道競技において組み手の優劣，特に相手柔道衣の技の掛けやすい位置を掴み続ける力（以下，把持筋持久力）は勝敗を大きく左右する要因の一つであるとされる．このため試合後には前腕筋群の疲労は著しく，試合間における同部に対するリカバリーは，勝ち進むための戦略として重要な鍵となっている．特に競技レベルの高い国際大会では，メダルがかかった試合でのインターバルが最短 5 分程度となることもあり、迅速かつ有効な方法が求められる．これまでに筋疲労を起こした前腕筋群に対するリカバリー法について，山本（2015）が前腕部へのアイシングとストレッチの併用が有効であったと報告しているが，この効果に関する評価手法は主観的な疲労感のみとなっている．したがって，より有効性を確認するためには再検討が必要であると思われる．そこで本研究は，柔道選手における運動間に行う前腕筋群へのアイシングが把持筋持久力に及ぼす影響について再度検討することを目的とした．

一般
B-1
B-8

【方法】

被験者は大学生女子柔道選手 13 名（身長：157.5±4.5 cm，体重：60.2±8.1 kg，年齢：19.2±0.7 歳）とした．把持筋持久力を評価する課題運動として，木村ら（2018）の先行研究を参考に釣手・引手強化補助具を用いた重りの把持可能時間の計測を行った．課題運動間には 5 分間の休息時間を設け，その休息時間中にアイシング（Icing 条件），ストレッチ（Stretch 条件），アイシングとストレッチ（Icing×Stretch 条件），安静のみ（Control 条件）の 4 条件による介入を行った．把持可能時間の他に，課題運動前後での皮膚温，握力測定，ならびに前腕筋群に対する主観的疲労感の聴取を行い，前腕筋群に対する有効なリカバリー法について検討した．

【結果】

本実験で得られた測定データは、発表当日に公表するものとする。

B-8

金的（釣鐘）への当身に関する考察

○稲川郁子（日本体育大学）

【目的】

股間は打撲時の症状の強さから、武道においては金的、釣鐘などと称される急所として攻撃対象とされる。主に急所を打撃する当身技は、その危険性から現行の試合では禁止され、柔道では形にその技術を留めている。本研究では大学生を対象とした股間打撲の実態を性差に着目して調査するとともに、文献的考察を加えつつ金的（釣鐘）に関する知見を得ることを目的とした。

【方法】

2018～19年度、A大学B学部に入学者1年生585名に質問紙を配布し、有効回答を得られた522名（男性263名、女性259名）を対象とした。

【結果および考察】

有効回答を得られた対象者のうち、股間の打撲の経験があると回答した者は男性77.9%、女性25.5%、合計51.9%で、男性が有意に高率に受傷していた。受傷場面は、男性はスポーツ活動時に多く（男性82.4%、女性31.8%）、女性は日常生活動作時に多かった（男性9.3%、女性51.5%）。NRSの平均値は 7.5 ± 2.0 （男性 8.1 ± 1.6 、女性 5.6 ± 1.9 ）で、疼痛は男性に有意に強かった。症状の消失に要する時間は、男性の最頻値は3～5分以内で30.7%であったが、女性では1分以内が45.5%で、男性は女性より回復に時間を要する傾向がみられた。症状は、苦痛を感じる疼痛は男性88.8%、女性93.9%で差はみられなかったが、男性では腹痛が66.3%にみられたのに対し女性では1.5%であった。また、気分不快が男性49.8%に対し女性0%、冷汗が男性43.9%に対し女性21.2%、吐き気が男性23.4%に対し女性0%、顔面蒼白が男性20.0%に対し女性1.5%、脱力感が男性18.5%に対し女性4.5%で各々に有意差を認め、男性では自律神経症状を伴いやすいことが示された。受傷後に実践した自己対処法は、男性では跳躍が最多で71.2%が実践していた（女性13.6%）。女性では何もしないと回答した者が45.5%で最多であった（男性7.8%）。一般に、股間の打撲後、男性が頻繁に実践している跳躍や腰部の叩打については医学的な根拠は不明であるとされる。しかし男性は打撲により精巣の上昇感や消失感を感じている場合が多く、実際に一過性かつ軽度の精巣転位を生じている例も多いと考えられることから、物理的に精巣を下降させるための方途として跳躍が実践されている場合が多いと推測される。また、武道で伝統的に行われている活法のうち「睾丸活」あるいは「陰囊活」は、虚脱状態の受傷者を長座させ、腋窩に術者の両上肢を差し入れそのまま持ち上げ殿部から数回軽く落とし、さらに術者の母趾で腰を数回蹴るものである。これも、精巣を下降させるための方途として今日まで伝承されてきたものであると考えられる。金的の強打は、当身技でなくても、内股や巴投などの投技を受けた際に偶発的に生じることが多い。したがってスポーツに内在する危険として捉えざるを得ない側面もある。しかしながら、打撲により器質的損傷が生じた場合、例えば精巣破裂や精巣転位に対しては早急な処置が必要であることから、症状が遷延化する場合は安易な経過観察は避けるべきである。

弓道における通信大会の歴史と現代的活用の検討

○松尾牧則（筑波大学）

【目的】

本研究では、弓道において過去に行われてきた通信大会の歴史を振り返り、その目的・実施方法や課題を検討しながら、弓道通信大会の現代的活用方法を模索することを目的とする。

【方法】

①日米親善通信大会（昭和 12 年～）、日米女子親善通信大会（昭和 13 年～）、全国中学生通信弓道大会（昭和 49 年～）、全国高等学校通信弓道大会（昭和 51 年～）について、その目的・実施方法を明らかにする。②弓道の通常の大会と通信による大会の相違点、課題を体験者のコメント等から探る。④現代的通信機器等を活用した新たな通信大会の可能性を検討する。⑤テストケース実施とそこから得られる課題の検討、通信による練習試合実施者への聞き取り調査等により実施上の解決すべき課題を検討する。以上を通して、弓道における通信大会の現代的活用法と実施手法をモデルとして提示する。

【結果及び考察】

弓道の通信大会が可能となる要因としては、競技規則上の空間設定（射距離、的サイズ、的設置方法、射手の立位置（射位）・射手間の距離、等）が明確に規定されることがあげられる。弓道は競技上、対人接触がなく（直接の攻防がない）、結果の良否に対戦相手からの物理的な作用を受けない。使用具の規制が少なく、公式ボールのような同一のものを使用するのではなく、各人が準備調整した用具で競技を行なっている。競技規則からの逸脱行為、すなわち、射距離、的サイズ、的中判定等の意図的な不正行為を排除できれば、それ以外の不公平感が生じにくい。ただし、環境（天候、気温、風、光、視覚環境、床質、音響等）要因の一致には限界は生じる。通信大会において公平に競技を実施する前提として、武道精神、性善説を前提とせざるを得ない。通信大会を公式戦として扱うには、通信上の対応方法により公平性が保てないケースも生じる（例：映像利用方法、音声利用方法、的中の表示方法等）が、練習試合（親善試合）としての活用には有効と考えられる。新しい時代の練習試合（親善試合）として通信大会は、様々な工夫により活用の巾が広がる可能性がある。通信大会の公式戦としての運用には、公平性担保のための様々な条件整備が必要であるが、整備と運営方法を工夫することで実用に至ることも不可能ではない。

【結論】

弓道の試合は対人形式ではなく、各団体または個人がなし得た記録の比較をもって勝敗を決定するという種目特性がある。そのことは、遠隔地にあって通信による記録比較によっても勝敗を決定できることを示唆する。通信による試合（競技）において、可能な限り条件を整え、正確に判定された記録を比較することができれば、同一会場に参集しなくとも勝敗決定（優劣の評価）が可能となる種目である。条件整備を進め、不正が発生しない規則が整備されれば、練習試合のみならず公式戦としての運用も可能である。

C-2

少林寺拳法の授業前後におけるライフスキルの変化 ～授業展開の違いに着目して～

○高坂正治（国際武道大学）、前川直也（国際武道大学）
中島正樹（富士見丘中学高等学校）、藤原豊樹（東京理科大学）
秋元宏介（一般財団法人少林寺拳法連盟）

【目的】「少林寺拳法の授業におけるライフスキルの変化～指導方法の違いに着目して～」高坂他（2019）によると、指導方法や声かけ、授業内容や展開の仕方によって、ライフスキルの獲得に差異があることが示唆された。

本研究では、授業展開の異なる中学校の生徒のライフスキルの変化を見ることによって、授業展開の違いがライフスキルの変化にどのように影響しているのか検証・分析を行った。

【方法】T 中学校 1 年生（184 名）、M 中学校 1 年生（39 名）を調査対象とし、「学校体育における武道関連ライフスキル尺度」を用いて、第 1 時間目の授業の始めと最終授業の終わりに質問紙調査を実施した。比較が容易になるように初めて少林寺拳法を学習する 1 年生を対象とした。授業時間前後における調査について、二要因分散分析を行った。分析は統計解析アドインソフト・エクセル統計 for Windows®を用いた。

T 中学校は全 5 時間、前半は基本動作・対人的技能の学習を一斉指導やグループ指導で行い、後半は 4 人 1 組のグループ学習による学び合い、教え合い（団体演武）を取り入れた展開で行われた。M 中学校は全 15 時間、基本動作・対人的技能・講話という流れで、一斉指導によって展開された。

【結果および考察】

項目 9「目標のためにコツコツと努力することができる」、項目 10「集中して物事に取り組むことができる」について、交互作用が見られ、M 中学校の授業前後で有意差があり値が上昇した。T 中学校には変化は見られなかった。また、項目 12「苦しい場面でも自分に負けずに努力できる」について M 中学校の授業前後において有意差が見られ、値が上昇した。M 中学校では全 15 時間にわたる授業において、基本動作や対人的技能を反復練習したこと、技の説明や講話の際には正座で聞いたことなどの体験が精神力向上に影響したと考えられる。

T 中学校では、リーダーシップや前向きな思考に関する項目で授業前後において有意差が見られ、値が上昇した。団体演武の取り組みや生徒の良さを引き出そうとする指導者の声かけの影響であると考えられる。

項目 8「あいさつの仕方など日常の礼儀作法に気を配っている」については、両校ともに授業前後において有意差が見られ、値が上昇した。両校ともに授業の始まり、授業中、授業の終わりの場面において、繰り返し礼儀に関する指導が行われ、生徒の意識が高まったと考えられる。

【結論】授業展開の違いによって、ライフスキルの獲得に差異があることが示唆された。今後、少林寺拳法の特性である対人技能の指導展開方法の一つである団体演武を生かした、主体的・対話的で深い学びを実現できる授業の組み立てや展開方法について、さらに研究を進めていきたい。

C-3

武道等指導充実・資質向上支援事業に係る武道指導に関する調査結果 第五報

○柴田一浩（流通経済大学）、若山章信（東京女子体育大学）

【目的】

中学校 1・2 年において武道が必修化され 8 年目を迎えた。2014 年度に実施した調査から 5 年が経過した 2019 年度に、改めて中学校における武道の指導実態を把握するために、2014 年度と同じ質問紙調査票を用いて全国規模の調査を実施し、武道指導について縦断的に分析することを目的とした。

【方法】

(1) 調査対象

47 都道府県・7 政令指定都市の 2019 年度の 2 年生で男女とも柔道、剣道、相撲のいずれかの授業を実施した公立中学校のうち、回答が得られた柔道：教員 53 名と生徒 1,700 名、剣道：教員 55 名と生徒 1,685 名、相撲：教員 21 名と生徒 551 名の合計：教員 129 名と生徒 3,936 名

(2) 調査内容

- ①教員調査：2019 年度に 2 年生の武道を担当した教員を対象に、2 年生の単元終了時の技能等の指導状況及び習得状況に関する質問紙調査
- ②生徒調査：2019 年度の 2 年生を対象に、単元終了時の技能等の習得状況に関する質問紙調査

(3) データ処理

全て単純集計した。教員及び生徒に実施した質問は、回答に矛盾のない全てのデータを有効回答とし、欠損値は無回答として集計した。

【結果および考察】

(1) 「技能」の内容について

2014 年度調査と比較すると、習得状況等について、教員及び生徒が肯定的な回答をした割合が減少した項目が多かった。これは、単元の取り扱う時間が 1 単位時間減少したことで、「思考・判断」させる時間を確保したために運動従事時間が減少したことによると考えられる。

(2) 「知識、思考・判断」の内容について

2014 年度調査と比較すると、習得状況等について、教員及び生徒が肯定的な回答した割合が増加した項目が多かった。これは、思考力、判断力、表現力等を高めるために教員が課題解決の場面を設定し、ペアやグループによる学習を取り入れたことによると考えられる。

(3) 「態度」の内容について

2014 年度の結果と同様に、習得状況等について、教員及び生徒が肯定的な回答をした割合が高かった。

(4) 生徒の自由記述について

「楽しかったこと」については、技能の内容に加えて協力、教え合いなどの態度の内容についての記述が見られたが、「難しかったこと」については技能に集中していた。今後は簡単な攻防をする中で、技ができる、技が使えるなどの難しいことができるようになるという達成感や成就感を味わわせるなど、生徒の愛好的態度を高めながら技能の習熟を図ることが求められる。

C-4

「わかる」と「できる」を結び付ける中学校剣道授業の 学習指導法に関する研究

○本多 壮太郎（福岡教育大学）

【目的】本研究は中学校第1学年を対象に，学習者が面打ち，小手打ち，胴打ちといった基本動作（以下，基本打ち）に関する知識を構造化させ，その知識を活用しながら技能向上に取り組む授業の有効性について明らかにすることを目的とした。さらには，得られた結果より基本となる技の学習へのつながりについても検討することとした。

【方法】F中学校第1学年121名（A組男子20名，女子20名，B組男子20名，女子21名，C組男子20名，女子20名）の生徒を実践対象者とし，2019年10月から11月にかけて，9時間で構成される授業を実施した。基本打ちの学習指導については，前年度の学会で報告したリズムを活用した学習指導法を改善し，打撃後に元立ちの横を通り抜けず，送り足で2歩下がって残心を示す方法を採用した。また，この過程において，各基本打ちに共通する動き方に関する知識の構造化を促し，その知識を基に各基本打ちの技能の向上に向けた取り組みが図られるようにした。データ収集として単元終了後にスキルテストとともに基本打ちの習得に向けた取り組みに関する質問紙調査を実施した。記述データについては，KH coder（樋口，2014）によるテキストマイニングの手法を用いて計量テキスト分析を行った。

【結果および考察】剣道経験者や欠席，見学した生徒を除いた89名を分析対象者（以下，「対象者」）とした。記述分析の結果より「気剣体の一致」「残心」など，ほとんどの対象者がいずれの基本打ちにも共通するポイントを手掛かりに基本打ち習得に取り組んだことが示唆された。スキルテストの結果からは，部位や男女に関係なく高い割合での技術の習得が確認された。このことより実践した学習指導は，対象者の多くが知識と技能を関連させながら授業に取り組み，「わかる」と「できる」の両方を実現する上で有効であることが示唆された。

【結論】本研究において実践した学習指導法は，対象者が面打ち，小手打ち，胴打ちといった基本打ちに関する知識を結び付けて構造化させ，その知識を手掛かりに技能の向上に向けた取り組みにつなげていき，「わかる」と「できる」の両方の実現を図る上で有効であったこと示唆された。このことはまた，二段の技や引き技といった基本となる技の学習指導においても，同様のアプローチにより学習者の知識の獲得と技能の向上を図ることができる可能性を示すものであり，今後の授業づくり及び実践に活かしていきたいと考える。

○今福一寿（明星大学教育学部），天野聡（東海大学体育学部）

【目的】我々は過去の本学会で、僅かな動きで起（打突動作の起こり）を認知することを報告した．相対した相手の起こりを読み切って、認知する能力は勝敗の大切な要因である．宮本の「枕をおさゆると言事」や柳生の「機前の兵法」、千葉の「起こり頭は必ず打つべし」、高野の「見えた時は出ていなければならない」、堀口の「見えた時は遅い気配を打つ」等も、打突の起こりや先々の先を重視する指導言葉といえる．岡と塩入は「起」は動作、「機」は技、「気」は気持ちの起こりと説明した．三橋は先々の先をよみの勝ち、後の先を反射的な勝ちとし、かつ原理を論じた．今回の研究は、相対した相手のどの動作（局面）が起を認知する要因なのかを分析し、その結果から打突の機会や勝つ原理について考察した．

【方法】①被験者：M大学剣道部の男子部員 13 名（打突者 3 名，判定者 10 名）．②実験試技：打突者は、一足一刀の間合い（250cm）から判定者に向かい 10 本の正面打ちを行った．判定者は、打突者の起を認知した瞬間に起の判定計測器（DKH 社製・PH-1251-5v・以下判定器）のスイッチを押した．③撮影・計測及び分析：打突動作は高速度ビデオカメラ（nac 社製）で撮影し、Frame-DIAS V（DKH 社製）で分析した．同時に打突者の左足床反力（KISLER-9287B）を計測し、TRIAS II System（DKH 社製）で分析した．判定者の視覚単純反応時間は、光刺激反応時間測定器（竹井機器工業社製）で測定した．④起の認知判定：判定器のスイッチを押した時点から、各判定者の視覚単純反応時間分を遡った時点とした．⑤撮影・計測機器の同期：打突動作の撮影と床反力の計測及び判定器のスイッチは全て同期させた．

【結果及び考察】図 1 に実験結果を示した．判定者の視覚単純反応時間は 0.22 秒であった．判定者は、打突者の打突開始 0.17 秒後に起を認知し、0.39 秒後に判定器を押した．打突動作の局面から起を認知する要因は、踏み切り予備動作（局面）であった．従って、認知した後に相手の起を捉えることは難しく、先人達の重視した「見えた時は遅い気配を打つ」等や先々の先の教えは、打突の機会を捉えて勝つための「コツ」を伝える大切な指導言葉であることが確認できた．

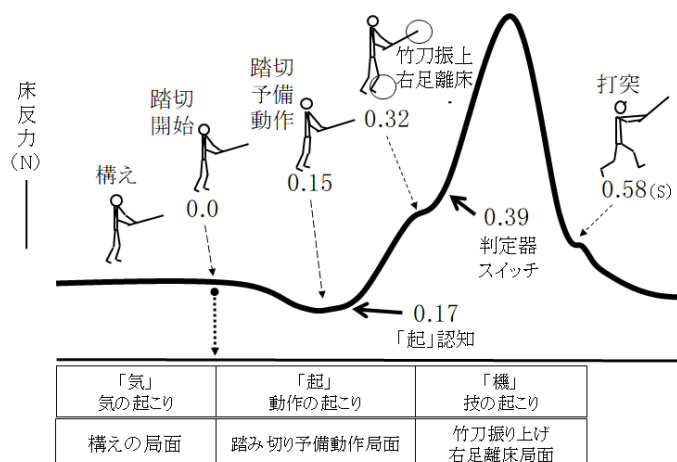


図 1 左足床反力と打突動作局面及び起の認知と打突の機会

網膜色素変性症と闘う剣道愛好家への指導を通して見える武道の可能性 ～競争社会から共創社会へ～ その2

*三苦 保久¹、山上 良子²、Davis Gale Kenneth³、東山 明子⁴

(1.滋賀県立瀬田工業高等学校、2.びわこバリアフリー剣道クラブ、3.Retired Veteran Navy/Army、
4.大阪商業大学)

【はじめに】

発表者は、2015年6月より、在日外国人や障害者、外国人留学生、地域の未就学児とその保護者等に剣道を指導している。2018年4月には、共創社会の実現を目指した「びわこバリアフリー剣道クラブ」(以下「クラブ」と省略)を創設した。(この経緯については、過去3年間本学会で発表済)

今回は、網膜色素変性症と加齢黄斑変性症の二重疾患を持つ視覚障害者Y(68歳女性、剣道経歴歴2年目)への指導実践を通して、得た知見を報告する。

【Yが剣道を始めようとした動機】

Yは、42歳の時、視覚に異常を感じて眼科を受診し網膜色素変性症と診断。治療はなく次第に失明すると主治医から宣告。53歳の時、左目に加齢黄斑変性発症。視野狭窄、中心視野の歪みが起こり、歩行困難となる。女優業をもちながら、様々なスポーツを楽しく実践していたYは、2年間失意のどん底であったが、その後「障害者として生きる」と決意し、治療不可能であれば、失った視覚を何かで補うことが出来ないかと模索。そのような時に、「クラブ」で視覚障害者の外国人Kが剣道をしていることを知った。武道には「氣」のはたらきという、からだの中から感じ取る機能を高める修行法があると発表者やKより聞き、その可能性にかけて「クラブ」に入会した。

【Yの感想】

日常生活では一人で真つすぐに歩くこともままならないが、木刀を構え先生に向かって進むときは、ふらつかず先生の剣先に合わせて自由に動けるようになった。これが目に見えない「氣」なのかと感じ、縁あっての剣道との出会いを、私の一生の修行と志したい。

【Yへの指導を通して得た指導上の留意点】

- ①「こっち」「このように」など、指示語での指導は全く理解されない。アナログ時計の短針の位置(例えば左右面の指導は「左面は1時と2時の間、右面は10時と11時の間を打つ」)を示す言葉を用いて具体的に時計の盤面を使うと視覚障害者にはよく理解される。
- ②新しい技を指導する際は、視覚や聴覚ではなく、筋運動感覚を生かして指導者が手を取り、体で木刀の動きを体感させることが有効である。
- ③木刀による剣道基本や日本剣道形は、視覚障害者に理解されやすく、体得し易い。
- ④剣先と剣先が触れ合う指導により氣のはたらきを感じる事が促進される。
- ⑤木刀の柄に切れ目(しるし)をつけることで、刃部と峰の位置を触覚で理解できる。

【まとめ】

視覚障害者の剣道指導で、木刀を用い剣先を合わせることで氣のはたらきの感受性を高めることにより、失われた機能に替わる新たな機能を得てQOLの向上を目指す可能性が示唆された。

柔道初学者に対する受身の練習方法に関する考察 — 古流武術式稽古方法の紹介 —

○河野敏博（新風館道場）

【目的】

平成 24 年より、中学校の正課として、多くの中学校で講道館柔道（以下、「柔道」という）が採用されている。柔道ではその基本技術として「受身」が重視されており、指導においても必須の課題である。しかしながら、初学者にとっては受身の練習は必ずしも興味を引くものではないと思われる。そこで、受身に対して興味を覚えさせ、安全に修練する方法として、古流柔術で行われている受身動作の稽古方法を紹介する。

本報告が、初心者に対する指導の工夫において参考となることを期待する。

【方法】

柔道が創始される以前の、所謂「柔術」等の徒手躰術には、受身動作を含む型が存在している。それらの型では、受身動作の習熟が必須であり、その受身動作を活用して流麗な型を打つことを目指して稽古を行っている。

本件の報告では、受身動作を内包する幾つかの型とその稽古方法を紹介する。

1. 概容：後ろ受身、前方回転受身、横受身、前受身などの受身を単独で練習した後、「二人一組になって（組稽古にて）、同時に受身を行う」練習。
2. 紹介する型：竹内三統流「向返（二）」「横返（四）」「谷風」、竹内流「車返」「大力（裏）」「内鎌（崩）」
3. 組稽古の要素：（練習する 2 名を「甲」「乙」と呼ぶ）
 - （1）甲「後ろ受身」、乙「前廻受身」：向返（二）、谷風、車返
 - （2）甲「横受身または前受身」、乙「前廻受身」：大力（裏）、横返（四）
 - （3）甲「横受身」、乙「後ろ受身」：内鎌（崩）

【結果および考察】

受身の練習を組稽古で行うことにより、以下の効果が期待される。

1. 受身について短時間の指導を受けるだけで、捨て身投げを経験できる。
2. 受身の稽古が投げ技（主に捨て身投げ）の上達に繋がることを認識できる。
3. 単調になりがちな受身の練習に興味を持たせることができる。
4. 受身の技量が向上する。（転倒による怪我を軽減できるようになる）
5. 全身運動である受身を繰り返すことで、体力・持久力を養成できる。

【結論】

古流武術の徒手躰術には「受身」「当身」「手解」の三つの基本がある。

この内、「当身・手解」は「柔道」の授業には馴染まないが、「受身」の稽古は初学者に対して安全に投げ技（主に捨て身投げ）技術を体験させ、興味を覚えさせることができる優れた教材になると考えられる。

C-8

大学男子柔道において高校時代の結果がチーム成績に与える影響

○大辻康太（桐蔭横浜大学）、吉鷹幸春（桐蔭横浜大学）、廣川充志（桐蔭横浜大学）、木村昌彦（横浜国立大学）、射手矢岬（早稲田大学）

【問題意識】 大学競技スポーツの強化において、スカウト活動は必要不可欠である。大学柔道でも同様にスカウトが強化において重要な役割を担っている。しかしながら、これまでの大学競技スポーツに関する研究では、現場（競技分析・コーチング方法等）に焦点を置かれたものが多く、スカウトに関する研究が少ないのが現状である。既存研究ではスカウト活動の結果（インプット）が、チーム成績（アウトプット）にどれほど寄与しているかということについて研究を行ったものは見当たらない。そこで本研究は、スカウトの結果（生産要素）と個人戦の結果（生産物への変換）がチーム成績（売上）にどれほど影響を与えるかについて研究を行う。

【理論的視点】 本研究では柔道組織の活動を企業経営の視点でとらえなおす。企業活動のシンプルなモデルとして、生産要素を生産物に変換する、その生産物を製品市場に提供する、利益をあげるというものがある。質の高い生産要素を仕入れ、質の高い生産活動をして、質の高い生産物へと変換すると、成果は当然高くなることが予想される。大学柔道を経営活動として捉えた場合でも、良い選手（生産要素）をスカウトして、良い練習・良いコーチング（生産活動）をすると、大学個人戦でも勝つ選手（生産物への変換）が増え、団体戦でも良い結果（売上）をあげることが予想できる。この予想を検証するため、下記の仮説を設定することとした。

①高校時代の個人戦の結果がチーム成績に影響を与えるのではないかな。

②団体戦と同年の個人戦の結果がチーム成績に影響を与えるのではないかな。

【調査方法】 対象は、過去3年間の全日本学生柔道優勝大会でベスト16に入った大学とした。16大学を得失点差による順位付けを行い、各大学全選手の高校時代の実績（高校総体）、団体戦が行われた同年の全日本学生柔道体重別選手権大会（個人戦）の成績を調査した。調査したデータを基に、大学順位を目的変数、高校時代の成績（X1）、大学の成績（X2）を説明変数として重回帰分析を行った。統計分析はエクセル統計を用いた。

【分析結果】 表1 回帰分析結果

変数名	偏回帰係数	標準回帰係数	T 値	P 値	判定	単相関
高校	0.2133	0.4588	3.2695	0.0021	**	0.7245
大学	0.2123	0.3638	2.5929	0.0128	*	0.6989

分析結果は表1の通りとなった。高校・大学の結果、ともにチーム成績に大きく影響を与えていることがわかった。高校時代の実績の方が、大学時代の実績よりもチームの結果に影響が大きいことがわかる。また、高校時代の結果と大学個人戦の結果にも相関が見られたが、VIF: 2.143 だったため多重共線性の発生は回避されている。以上の通り、①、②の仮説は支持される結果となった。

【結論】 分析の結果、大学の団体戦で順位が高い大学ほど高校時代に実績を残した選手が多くいることが明らかとなった。以上のことから実績のある高校生を多く獲得した大学が良い成績をあげる可能性が高いことが示唆される。これまでの大学柔道の研究は生産物への変換（個人戦の結果や育成・練習）が売上（チーム成績）に大きく影響すると言われていたが、本研究の結果、生産要素（スカウト）も生産活動と同程度、生産物への変換・売上に影響を与えるという新たな知見を得た。

知的・発達障がい児の実践事例から捉えた柔道療育の効果と課題

後藤優太（鹿屋体育大学）、内村香菜（合同会社笑光）、小崎亮輔（関東学園大学）、久保山和彦（日本体育大学）、河鱈一彦（関西学院大学）、田村篤敬（鳥取大学）、藤田英二（鹿屋体育大学）、前田明（鹿屋体育大学）、小澤雄二（鹿屋体育大学）、濱田初幸（鹿屋体育大学）

【緒言】 近年、障がい児を対象とした『発達が気になる子が輝く柔道&スポーツの指導法』（西村ら、2020）が上梓されるなど、福祉領域において柔道を活用した療育が注目を集めている。特に、九州南部では新聞（南日本新聞等、2019）やテレビ（NHK 等、2019）のメディアに「柔道療育」（以下、療育と略す）に関する報道が大きく取り上げられるなど、県内外の関心が高まっている。佐々木（2003）は、「既に欧米では、柔道がボディワークや身体セラピーなどで療法的手段として用いられ、我が国よりも先んじて柔道を精神・心理医療面のリハビリテーションとして広く応用されている」と述べている。一方、日本ではこの療育の歴史は浅く、事例報告は稀有である。しかし、今後の日本柔道界の発展の為にも、療育に関する情報・有効性を広く社会に発信していく必要があるものと考えられる。なお、本研究では、放課後などのデイサービス「笑光」（以下、笑光と略す）にて実施している柔道を用いた療育を「柔道療育」と定義する。

【目的】 本研究は、療育における知的・発達障がい児に対して現場で実践指導した経緯から明らかになった事実や効果、聞き取り調査から得られた情報を発信する。また、今後の課題についても検討する。

【方法】 「笑光」に通所する利用児の保護者及び指導者を対象に、運動技能の変化のほか生理的効果に関するフィールド調査および聞き取り調査を行う。療育に関する文献や先行研究、利用児の活動記録（12 ヶ月間）を精査するとともに、筆者らの観察記録から療育効果に関する考察を試みる。

【結果・考察】 保護者より提供された定期健康診断の血液検査の結果から「AST」や肝機能検査の代表格である「ALT」（岡上ら、2015）の値が減少し、療育に伴う肝機能の生理的改善（療育効果のあること）が示唆された。また、後ろ受身の学習から、背後へ倒れることの恐怖心を軽減することができ、後転動作のできなかった利用者が、スムーズな回転ができるまでに至った。同様の運動動作の改善は、他の利用者にも観察された。さらに、ビデオで録画した道場内での走法比較から、当初は支脚が外旋傾向にあり、前傾への重心移動ができず、不安定な走法であったものが、滑らかな動きへと修正されるケースも認められた。これは、柔道量の安全性から「転倒しても大丈夫」との安心感（中野、2006）が醸成され、ランニングフォームが改善したものと推測される。しかしながら、「投技」や「体捌き」など柔道技能の上達速度は緩慢であり、現在も指導の複雑さに直面している状況であることから、引き続き、障がい児対象の指導法の構築に取り組んでいく必要がある。

【結論】 知的・発達障がい児における生理的機能の一部に改善が見られ、療育効果の認められることが示唆された。また、特定の運動技能にも改善が見受けられた。今後の課題は山積しているが、柔道経験の乏しい指導者が類似の施設を開設するなどの問題が生じていることもあり、この領域に関する指導法および資格制度等の確立が求められる。

C-10

柔道療育施設における利用時の行動変容についての一考察

内村香菜（合同会社笑光）、小崎亮輔（関東学園大学）、後藤優太（鹿屋体育大学）
藤田英二（鹿屋体育大学）、前田明（鹿屋体育大学）、小澤雄二（鹿屋体育大学）
濱田初幸（鹿屋体育大学）

1. 背景

文部科学省が2012年に行った調査では、小学校の通常学級に在籍する児童の約6.5%に発達障害の疑いがあることがわかっている。発達障害の子供たちにみられる課題には対人関係、感覚過敏、順番や競争へのこだわり、新しい事への不安、落ち着きのなさなどがあげられる。このような発達障害の疑いのある子供や、その他障害のある子供の発達を促したり、自立生活を援助したりする方法の一つに療育がある。療育を受ける場所について、日本では2012年より始まった「障害児の学童保育」である放課後等デイサービスが一般的である。放課後等デイサービスは児童福祉法を根拠として療育機能と居場所機能が兼ねられた、発達・精神・身体障害の種類に関わらず障害のある子供が利用できる福祉サービスである。放課後等デイサービスで受けられる療育の方法は多岐に渡るが、その一つに運動を利用した療育がある。鹿児島県鹿屋市にある放課後等デイサービス笑光（にこ）では、療育方法として柔道を採用している。これは日本において非常に希少な事例である。この柔道を利用した療育は「素足で移動する」「柔道衣を着る」「相手と組む（道衣を握る）」「投げる・投げられる」等という柔道の特性を生かし、身体に関連した各種感覚の育成を始めとしてコミュニケーション能力の向上や相手との距離感の修得、相手を思いやる気持ちの育成につながれる可能性があると考えられる。これまでにこの柔道を利用した療育は通称「柔道療育」として新聞（南日本新聞等、2019）やテレビ（NHK等、2020）に大きく取り上げられ、社会的な注目を集めている。そこで本研究では、放課後等デイサービス笑光での療育活動を調査・吟味し、利用者の行動変容等を観察することによって、柔道を用いた療育活動の有効性について考察を行う。

2. 方法

放課後等デイサービス笑光（鹿児島県鹿屋市）にて利用者を対象に実施されている療育活動（＝柔道療育）をビデオカメラで録画し、指導者の主観的評価も併せた観察研究を実施した。研究の対象者については施設の利用者数人（小学生）を選定し、対象者及び対象者の保護者に研究の説明と了承を得た上で本研究は実施された。観察項目は言動を中心に行動変容等に着目した。

3. 結果および考察

当該施設を週2日以上利用している4名に着目し療育中の観察研究を実施した結果、以下の行動変容が示唆された。

- ①競争の際、相手の学年や能力を考慮して行動することができるようになった。
- ②順番にこだわらず最後までやり遂げる事に重点をおけるようになった。
- ③周囲の状況を適切に判断できるようになった。
- ④2人で協働して行う作業を適切に実行できるようになった。

このような行動変容は柔道を用いた療育活動の有効性を示唆すると言えよう。

空手道に携わる女性の現状についての調査報告Ⅱ

-海外空手道実践者の調査をもとに-

○末次美樹（駒澤大学）、田井健太郎（群馬大学）、三村由紀（防衛大学校）

【目的】筆者らは、これまで日本で活動している空手道に携わる女性に焦点を当て、生活環境や活動状況等々のアンケート調査を行ってきた。その結果、結婚の有無や経済格差、地域格差、非育児期と育児期といった環境格差、さらに各組織における女性軽視や女性に対する無意識の偏見が生じていることが明らかになった。空手道に求められている課題と解決策として、①育児期や介護期の女性のサポート②資格取得にかかる金額や時間、更新制度の見直し③女性の活躍の場の増加④全ての女性が安心して活動できる場の提供という4つのカテゴリーを挙げた。国外に目を向けると、日本に比べて女性の社会進出が促進される国や女性の社会的活動が依然として阻害されている国など様々である。そこで本研究は、海外で活動する女性に焦点を当て、生活環境や活動状況等の調査を実施し、その結果をもとに、空手道に携わる全ての女性が活動を持続するために必要な環境や改善策、問題点を明らかにすることを目的とした。

【研究方法】海外で活動する女性を対象に、セミナーや学会、SNSを通して、web方式のアンケートを周知し、調査を行った。「生活環境（年齢、仕事・結婚の有無等）や空手道活動歴（空手道歴、指導歴、審判歴、試合出場の有無」等をチェック方式で、自由記述として「空手道の魅力」、「女性が空手道活動を持続することで大変なこと」等の項目について回答を求め、各環境や空手道活動に対する考え方の相違について検討した。

【考察および結果】空手道の活動理由について、「健康の維持や精神の安定」、「自己実現や自身の成長」等を挙げている女性が多くいた。「女性が空手道活動を持続することで大変なことはありますか？」という質問に対し、「はい」と「いいえ」の回答数がほぼ同じであったが、その背景に、「個人の空手道に対する考え方や捉え方・女性特有の身体的な面・家族の有無・組織からのサポートの有無・活動時の子供の預け先や仕事や家事との両立・組織内でのジェンダーバランス」等の要因が挙げられていた。

【結論】海外で活動する女性対象のアンケート調査から、活動の阻害要因については、日本での調査と同様、「環境的要因」が深く関連しており、組織としてのサポートが不十分であることが明らかになった。またこれらの結果は、女性に限らず、障害者や高齢者等、本人の努力だけでは解決できない環境の中で活動している多くの人々に共通していると考えられる。個々の環境による「活動阻害要因」に対応できるシステムを明確にし、空手道に携わる多くの方がその能力を十分に発揮できる環境の構築を目指したい。

P-2

サンドイッチ構造とエラスティカ理論を活用した 現代和弓の設計とその特性評価について

○G. Mariani (筑波大学大学院), M. Matsuo (筑波大学体育系)

【目的】合成素材によって和弓は複合弓へと進化し、構造耐久性と再現性を向上させる。しかし、伝統的な和弓の設計や製作は弓師の試行錯誤(cut-and-try method)のみであった。そこで本研究では、材料が弾性変形するものと仮定し、Euler-Bernoulli エラスティカ式の数値モデリングによる現代弓の正確なシミュレーションと 製作をすることを目的とした。

【方法】サンドイッチ理論を用いて弓の構造と剛性を定めた。本研究では図 1 のように弓の断面は中心にある針葉樹材(SW) を 2 枚の堅木 (HW) で挟み、弓の内と外面に 2 枚の FPR(fiber reinforced polymer)を貼り付けたサンドイッチ状構造である。また境界面は接着剤で結合した。弓の剛性と幅 $b(s)$ は固定し、弓の製作用に厚みの分布 $a(s)$ を提供される。弓の強さや曲げ、また材料の応力状態を静的な負荷条件下においてエラスチ理論で定めた。本研究では B. W. Kooi (1980) の対称的な弓の理論を用いて非対称的な弓の理論を作成した。解析として Runge-Kutta 法(RK4, $\Delta s \sim 0.75\text{mm}$)と Broyden 法の数値計算を用いた。弓設計の事例は、長さ 2.14 m, 85cm 引き張力が 15kgf を使用する。材料のヤングは $E_{SW}=9\text{ GPa}$, $E_{HW}=13\text{ GPa}$, $E_{FPR}=41\text{ GPa}$, 厚みは $h=3\text{ mm}$, $t=1\text{ mm}$ である。

【結果および考察】図 2 は製作のために定めた弓の厚みと幅を示す。これまでの研究の比較において、本研究では弓の応力は製作中に発生する材料のプレストレス σ_{pre} と曲げ応力 σ_{bow} の重ね合わせを評価し、弓の構造的な弱点が分かる。図 3 と 5 に示すように (A) $s_A \sim -0.50\text{m}$ と (B) $s_B \sim -0.25\text{m}$ の位置に曲げ応力が最も高いことが分かった。図 4 と 5 は弓力曲線と非対称曲げの計算結果である。これらは 1 分以内にシミュレーションが完了し、和弓を製作する時間の短縮につながる。

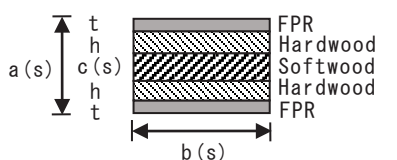


図 1 和弓の断面のモデル

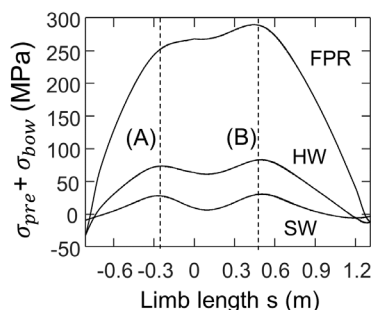


図 3 85cm 引きの曲げ応力

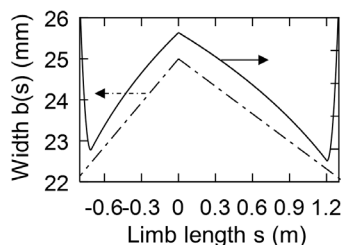


図 2 厚みと幅の分布

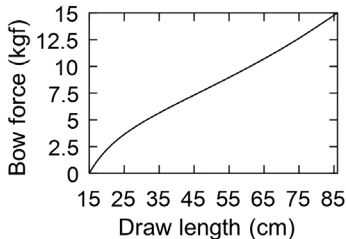


図 4 弓の張力

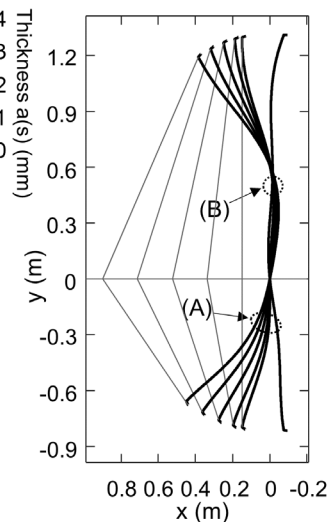


図 5 弓曲げ

小学校体育における相撲の授業実践 ～地域の奉納相撲と連携させて～

○小出高義（大東文化大学）

1 目的

学校教育における相撲は、中学校体育の武道領域から登場するが、学習の適時性は、小学校期にあるのではないかと考える。けれども、小学校体育では、武道の領域がないため、内容の読み替えが必要となる。ここでは、体づくり運動の「多様な動きをつくる運動」および「体の動きを高める運動」として実践を推進した。ところで、神社祭で奉納相撲を行っている地域は、少なからず存在する。そこで、奉納相撲に参加する児童を抱える小学校での実践から、相撲学習の可能性を検討した。

2 方法

北海道東部K町のK小学校（へき地小規模校）において、体育授業での「体づくり運動」として、相撲の出前授業を実践した。

＜期間＞2017年8月30日・31日、2018年9月20日・21日、2019年9月26日・27日　＜対象児童＞1年生から6年生までの全校20名　＜授業方法＞低学年、中学年、高学年と2学年合同（少人数のため）で、1日1時間ずつ実施　＜場所＞K小学校体育館（相撲マットの周囲にセフティマットやマット運動マットを敷き活動場所とした）　＜授業づくりの工夫＞相撲における所作は、意味を理解させると共に、動きを引き出す言葉をつけた。ケンケン相撲など、様々な相撲遊びを用いて、活動の意欲を引き出した。互いに回しを掴んでの押し相撲から、相撲へとつなげた。　＜教員研修＞放課後、先生方に研修会を実施（相撲の体験および指導方法）

3 結果および考察

① 子どもたちの相撲へ向けた意欲・関心の向上

授業で負けた子が、奉納相撲では負けないように自宅で練習をした。

体育館の相撲マットで、休み時間に相撲をとり、遊ぶようになった。

② 先生方の授業づくりへの理解の深まり

相撲の指導は無理と思っていたが、授業参観と研修により、自分でも指導したいと思うようになった。（相撲の教材としての価値を認識）

③ 地域からの学校評価が向上

奉納相撲における子どもたちの取り組みの向上から、学校の評判が高まり、K小学校より出前授業の依頼が継続した。

4 結論

体育授業においては、中学生よりも小学生の方が、相撲の特性に触れ易いといえる。へき地小規模校の児童たちは仲が良く、高学年でも男女での対戦に難色を示さず、また簡易廻しにも抵抗がなかったが、多様な小学校での実践を重ねる必要性を認める。また、子どもたちのみならず、保護者や地域の人々が、子どもたちの力の入った相撲を観戦し、地域の将来に向けた活力を感じると共に、相撲の持つ力に触れることから、相撲文化発展の一助となる事を期待する。

P-4

大学生なぎなた選手の疼痛部位と傷害予防についてのアンケート調査

○橋本留緒（丸太町リハビリテーションクリニック），
浦辺幸夫（広島大学大学院），中村ゆりこ（全日本なぎなた連盟），
田中ひかる（近畿大学）

【目的】なぎなたは武道として歴史があるものの，スポーツ医科学的な研究は数が少ないのが現状である．我々は，大学生なぎなた選手の傷害発生率が 53%と他の年代の選手よりも高く，下肢・腰部の傷害が多いことを報告した（橋本，2018）．しかしながら，疼痛が生じていても受診をせずに疼痛を抱えながら稽古しているケースが多く存在する．また，傷害発生率が高い大学生選手の傷害予防の実態は明らかになっていない．本研究の目的は，疼痛部位と傷害予防の実態を把握し，問題点を抽出することで傷害予防に向けた効果的な対策を検討することとした．

【方法】2018 年 3 月に東京都で開催された，全日本学生なぎなた研修会に参加した女子大学生、全 102 名に対して書面でのアンケート調査を実施した．

調査項目は，「基本情報」「疼痛部位」「傷害予防について」とした．疼痛の定義は「痛みを感じるが医療機関は受診せず，稽古も休まず参加していたもの」とした．「傷害予防について」は，傷害予防のために行っていることや気をつけていることの有無（以下，予防の有無）と，その内容（自由記載）を調査した．

【結果および考察】90 名（88%）から有効回答が得られた．90 名のうち，過去に外傷性水疱（足底のまめ）を除いた疼痛を経験した選手が 68 名（76%）であった．疼痛部位を表 1 に示す．外傷性水疱は 37 名（41%）の受傷があった．

「傷害予防に関して」は，63 名（75%）が「予防している」と答えた．傷害予防の内容としては，「稽古後や自宅でストレッチングをする」と答えた選手が 29 名（32%）で最も多く，次いで「準備運動をしっかりと行う」が 23 名（26%）だった（表 2）．

（件）

	右	左		右	左
頭頸部	3		股関節	2	2
肩関節	3	5	大腿	2	2
肘関節	1	5	膝関節	10	13
前腕	3	6	下腿	12	11
手関節・手	2	2	足関節	4	7
背部	1		踵	35	37
腰部	16				

表 1 疼痛部位別件数

内容	件数
ストレッチング	29
準備運動を十分に行う	23
正しい動作で行う	9
セルフマッサージ	2
用具の整備	2
その他	3

表 2 傷害予防の内容

【結論】傷害と同様に下腿や足部足趾，腰部に加えて，膝関節の疼痛が多いことがわかった．足底の外傷性水疱は半数近くの選手が経験していることが明らかになった．今後は，下肢・腰部の疼痛、傷害を予防するための具体的なコンディショニング方法の立案や，外傷性水疱に対するフットケアの啓蒙が必要である．

剣道選手の平常時と試合前後の心理的变化について

○新里知佳野・古澤伸晃・櫻井美子・八木沢誠・軽部幸浩・藤田主一
(日本体育大学)

【目的】本研究は、「剣道選手の試合に対する取り組み」と「選手の心理的变化」との関係について明らかにし、その知見をもとに今後の剣道選手育成へ貢献することを目的として計画された。

【方法】日本体育大学剣道部女子学生のうち、第38回全日本女子学生剣道優勝大会（愛知県春日井市）出場の選手7名（平均年齢20.9歳，SD=0.83）にSTAI（状態－特性不安尺度）、POMS（気分プロフィール検査）、また事前にY-G性格検査（矢田部－ギルフォード性格検査）を実施した。調査期間は、2019年10月15日～11月10日（大会当日）までであった。調査は、毎週火曜日の同時間と同場所で行ったが、試合の前日と当日の実施については、大会開催地への往復移動中に行った。すなわち、STAIの特性不安は10/15、状態不安は試合前日と試合直後に実施した。ただしPOMSは毎回実施した。なお本研究は、日本体育大学倫理審査委員会の承認、ならびに全選手から研究参加の同意を得て行った。

【結果と考察】試合に臨む場合、監督は選手の試合直前の仕上がり状態を把握するだけでなく、試合に向けて稽古を行っている選手の心理的側面も客観的に捉えておく必要がある。図1から、10/15（試合前）の得点ではE、D、Gは状態不安が高い。さらに11/9（試合直前）の得点ではFとGが前回より得点が高く、他の選手は低かった。また11/10（試合後）の得点では、7名全員の「不安不在項目」が上がっていた。試合後、緊張からの解放、安堵、落ち着きが見られ、不安の軽減が考えられる。図2から、EとGは凹型、他の選手は凸型であった。凹型は、「緊張－不安」「混乱」が高く「活気」が低い。凸型は、「緊張－不安」「混乱」が低く「活気」が高い。Y-G性格検査ではFとGはAC型であった。表には出さないが、内在する不安感が高いと推察される。

BとCはD型である。Cは今年度、Bは次年度の女子主将を務める。監督として指導する上で、性格の要因も必要な背景と考えられるので、上記の結果を今後の指導に活かしていきたいと考えている。

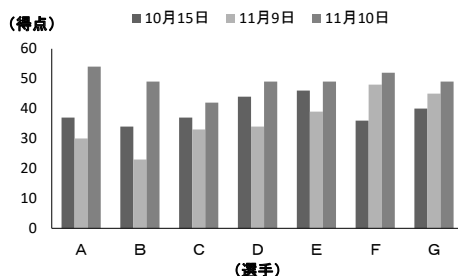


図1 STAI（得点）

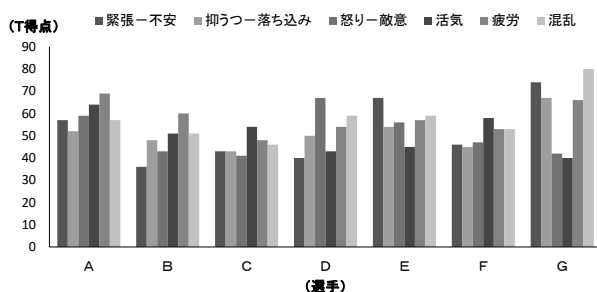


図2 POMS（粗点）

P-6

教員養成カリキュラムにおける「剣道」の位置づけ

○中嶋克成（徳山大学/広島大学大学院教育学研究科）

【目的】2012年度から必修化された中学校「武道」について、2021年度施行予定の学習指導要領では、現行の柔道、剣道、相撲、なぎなたのほか、合計9武道が例示された。現状では現行学習指導要領に例示された柔道・剣道・相撲・なぎなたの4種目が武道授業の中心であろう。全国の公立学校での種目選択状況として、柔道実施が64.1%、剣道（37.6%）、相撲（3.4%）、空手（2.3%）と続いている（時事通信 2012年3月15日 47都道府県から各20校ずつ計940校による抽出調査、複数回答方式）。4種目のうち柔道については様々な観点から分析がなされているが他の3種目について、大学のカリキュラム上の位置づけについて分析されたものは少ない。3種目の中でも剣道については実施率37.6%と柔道に次いで高く、3校に1校は実施されおり、教員養成カリキュラムにおいて「剣道」がどう位置付けられているかは極めて重要な問題である。

本研究では、現在教員養成系大学では、どのような科目の中でどの程度剣道が取り入れられているのかの現状を把握した上で、授業の目標、授業の内容等を分析することを目的とする。

【方法】①文部科学省ホームページ「教員免許状を取得可能な大学等」から保健体育免許を取得できる大学数、大学名を調査し、その属性を確認する。②保健体育教員免許を取得可能な大学のうち武道（剣道）がカリキュラム上に存在する大学を対象とする。③剣道を導入している教員養成系大学のシラバスを「授業目標」、「授業計画」ごとに集約しKHcoder分析し、共起ネットワークを作成する。

【結果および考察】上記①の通り、文部科学省ホームページ「教員免許状を取得可能な大学等」の「保健体育」を確認すると、190校が該当している。なお「二種」免許のみを取得できる大学、「専修」免許のみを取得できる大学は通常の養成大学とカリキュラムが異なるため省いている。また、190校のうち教科「保健」教員免許のみを取得可能な大学が13校あった。したがって本研究の対象は一種免許取得可能な190校のうち上記13校を除いた177校とする。教科「保健」では本研究が対象とする「武道」を取り扱っていないためである。

KHcoderで分析したところ「授業目標」としてシラバス上に頻出した語句として、「基本」、「指導（法）」、「技術」の習得であった（ポスター表1）。「指導法」が入るところに教員養成カリキュラムの特徴が見られた。「授業計画」では、「基本」や「指導法」の他、「形」や「試合」、「審判方法の練習」なども実施されている（ポスター表2）。

【結論】共起ネットワーク（ポスター図1）を見ると教員養成課程での「剣道」は「武道」という「運動」「文化」の「指導法」を学ぶことや「対人」「技能」の「習得」を企図していることが分かった。一方で先行文献等で指摘のある「礼法」などについての授業への導入は限定的といえる。

踏み込み動作に伴う力の抜きの評価—剣道競技者の下肢筋電図活動と動作の解析—

○麓 正樹（東京国際大学）、田井 健太郎（群馬大学）、赤池 行平（東京国際大学）、谷木 龍男（清和大学）

【目的】剣道や空手道では、前方への鋭い踏み込みとともに攻撃技を繰り出す踏み込み動作が行われ、その速度や力強さは勝敗に大きく影響する。踏み込み動作は後脚で瞬間的に強く床を押すようにして身体を前方へ移動させ、前足の足底で鋭く床をたたくように行なわれる。我々のこれまでの研究では、踏み込み動作開始直前には、前脚筋活動の休止する期間が観察されている。この休止は、基礎的な電気生理学的研究では、素早く大きな力発揮にとって重要とされているが、剣道や空手道の踏み込み動作の中でどのような役割があるかは明らかでない。我々は、踏み込み動作開始前の前脚大腿部の筋活動の休止は、前脚の緊張を瞬間的な脱力によって緩め（力の抜き）、身体に位置エネルギーの変化（落下運動）を引き起こし、その後の踏み込み動作に利用されると考えている。しかしながら身体がどのように落下しているかは明らかになっていない。そこで本研究では、踏み込み動作が含まれる剣道の面打ちを被験者に行わせ、大腿部の筋活動および腰部の移動に注目して、筋電図と光学式モーションキャプチャによる3次元動作解析を行った。

【方法】被験者は、6年以上の稽古継続年数を有する剣道競技者であった。近間、遠間、中間の3つの距離を各自の判断で設定させ、踏み込み動作を伴う面打ちを、対人にて自己ペースで行わせた。筋電図の測定は、左右の大腿四頭筋（外側広筋）、左右の大腿二頭筋、右の上腕三頭筋、左のヒラメ筋を対象として、無線筋電図センサを用いて行われた。記録された筋電図は全波整流してその後の解析に用いた。モーションキャプチャについては、8台の赤外線カメラを用いて、14箇所（仙骨、左右の上前腸骨棘、左右の上後腸骨棘、左右の腓骨小頭、左右の外踝、左右の肩峰、第7頸椎、左右の手首）に装着された反射マーカの位置情報を元に、腰部の移動についての3次元解析を実施した。

【結果および考察】剣道の面打ちにおいて、踏み込み動作の直前に、前脚大腿部筋電図活動の休止期が得られた。休止期の開始後に、腰部垂直方向の変位において下降が開始された。腰部運動は下降のピーク後にその状態をわずかに維持した後にゆるやかな上昇に転じ、その途中で面打ちのインパクトがあった。これらのことからまず、我々の先行研究と同様の、踏み込み動作開始前の筋電図休止期が本研究でも得られた。この休止期がその後の斜め下方向への身体の落下を導くと推察されていたが、腰部運動の3次元的な解析から、落下運動が確認された。また、相手との距離が遠くなると、腰部の下降開始から終了までの角度が急になってスピードが上昇する傾向があった。さらに、前脚筋電図の休止期間と面打ちのインパクトに向けた後脚筋電図活動の増加には、関連性が見られた。これらの結果は、踏み込み動作直前の前脚筋電図休止期間と身体の落下運動が、相手との距離によってコントロールされ、面打ちのインパクトに向けたその後の動作に利用されている可能性を示唆する。

P-8

小野派一刀流における「九太刀」と組太刀表五十本との関係性について ー小野家、津軽家の古文書をもとにー

○立木幸敏（国際武道大学）

【目的】著者は小野派一刀流（以下一刀流）の伝書である「小野家伝書（春風館文庫）」、「津軽家文書」の検討から、一刀流の刀法である「切落」が、伊藤一刀斎（生没年不明）（以下一刀斎）の時代の古い組太刀である「三重」、ならびに「五点」に由来する事を証明してきた。2018年の武道学会発表では、忠方の「一刀流割目録（以下割目録）」の注釈にて、「真之五点」の「真剣」には七種の遣い方が記述されており、内三本は「きりおとし」の記述から「切落」の原型が見られ、さらにその他の四本もあわせ「切落」直後の打太刀の動きに七通りのバリエーションがあり、それ毎に顛末を示していると報告した。つまり小野家での一刀流は刀法の「切落」が核となり「切落」の刀法および「五点」のバリエーションの多くが表五十本の構成要素になっていると考えられる。

また、「割目録」には「本目録」を註解する形で、「真之五点」「草之五点」「新真之五点」が記され、それ以外にも組太刀として「十二点」「九太刀」が記されている。本研究では「九太刀」と近代まで伝わる「表五十本」の組太刀の関係性について知見が得られたので報告する。

【方法】本研究では小野家伝書の「九太刀」翻刻、さらに津軽家文書内「剣術組遣方覚書」にある「表五十本」をあわせ、先行研究で確立された、伝書から推定復元する手法を用いて復元（吉田 2007、魚住 2009）、比較検討することにより、「九太刀」と「表五十本」の関係性の検証を行った。

【結果および考察】小野家伝書では四代・忠一の「九太刀」の注釈には「戦場の致やう也、具足しやうぶ也」とある。また四代・忠一、五代・忠方による割目録に対する注釈が残されており「九太刀」9本の組太刀にも仕様が記されており復元が可能である。さらに、津軽家文書内「剣術組遣方覚書」にある表五十本は「ひとつ勝（一勝）」、「ニッ勝」、「乗身」、「折身」、「不ん志やう（本生）」、「切返」、「ち志やう（地生）」、「巻返し」、「拂（發）」、「志ゅんひ（順飛）」のそれぞれが五本の組太刀、十組で校正され（丸括弧は小野家伝書より）、その仕様が記されており復元が可能である。

小野家伝書の記述から「九太刀・8本目右点」の注釈に「表五十本、地生ニツ目と可レ知ナリ」とあり、組太刀の復元の検討を行った結果、小野家伝書「割目録」記された「九太刀・8本目右点」と津軽家文書内「剣術組遣方覚書」にある「地生・2本目」とは相同であった。さらに割目録の注釈では「キリオトシ」の如くまたは「キリオトシ」を使うとの記述が3箇所確認できる。また「九太刀・6本目真之信剣」の注釈には「本目録の真之真剣に同じ」とある。また復元過程において「九太刀・2本目添切」では、表五十本の他に五本おかれている「二つの切落」との関連性が窺えるものもあった。

よって「九太刀」の一部は「表五十本」の構成要素となっていることが考えられる。

【結論】著者らの先行研究を加味すると以下の事が考えられる。一刀流の成立過程では「当流第一の所（四代・忠一）」とされた一刀流の根幹の刀法である「切落」は「車を廻す切落」であり（吉田 2007）、組太刀「三重」と「真之五点」真剣に由来する（立木 2016）。

切落の刀法を元に復元、検討をした結果、「本目録」を註解する「割目録」に記される「九太刀」は昨年報告した「十二点」（日本武道学会第52回大会）とともに表五十本の校正要素となっている。また、今後の検討が必要であるが、他に記されている「真之五点」「草之五点」「新真之五点」にも表五十本の構成要素となったと考えられる。

参考文献： 吉田頼男、「小野派一刀流について ー小野家伝書（春風館）と津軽家伝書からうかがえる流儀の刀法とその意志及び無刀流への継承に関する一考察-」、武道・スポーツ科学研究所年報 13（2007）

魚住孝至、立木ら「新陰流勢法の研究 ー伝来古文書に基づく考察-」、「武道学研究」42（2009）

立木幸敏、仙土克博、吉田頼男、「小野派一刀流における「切落」の由来について ー「三重」および「五点」を参考に、国武大紀要 32（2016）

剣道経験が人間形成に及ぼす影響 —実践者と保護者の質的調査からの検討—

○天野聡（東海大学）、鶴見健太（東海大学大学院）、笹木春光（東海大学）、松本秀夫（東海大学）

【目的】

全日本剣道連盟が制定している剣道の理念には「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である」とし、剣道による人間形成、人格形成を掲げている。また、林（1985）は、スポーツと人間形成について、大学生を対象とした調査から、スポーツ経験年数が多い者ほどスポーツが個人的特性に及ぼす機能の影響を強く受けることを報告している。このように、スポーツが個人的特性や性格・人格に与える影響は大きいと考えられている。

そこで本研究では、幼少より剣道を実践した人とその保護者を対象にし、剣道の継続的な実践が人間形成に与えた影響について明らかにすることを目的とした。

【方法】

1. 研究協力者：小学生より現在まで剣道を継続している大学生 3 名（男性 2 名、女性 1 名）およびその保護者 3 名（男性 2 名、女性 1 名）。
2. 調査方法：半構造化面接による質的調査を実施した。
3. 調査内容：面接項目は①剣道経験について（開始時期・場所・動機、活動頻度、他のレジャー・スポーツ活動歴）②人間形成について③感情・満足度について④その他（性別・年齢・家族構成・職業・最終学歴・居住地・出身地・段位）とした。
4. 分析方法：剣道開始時からその後の成長過程において、本人と保護者を対比させ、時系列に人格形成の過程と剣道経験を体験から質的に分析した。

【結果および考察】

剣道経験について、剣道開始の動機は家族に剣道経験者がいることが影響しており、3歳～8歳と早い時期から開始したことがわかる。また、剣道開始から大学生までに他のスポーツ活動歴はほとんどなく、ほぼ毎日剣道の活動をしていた。人間形成について、小学生時は、実践者・保護者共に「礼儀作法」が身に着いたと回答している。中学生時は、実践者の「洞察力」、「思考力」、「持続力」、「思いやり」、「成長なし」に対し、保護者は「自主性」、「責任感」、「努力」と回答していた。高校生時は、実践者の「思いやり」、「協調性」、「忍耐力」に対し、保護者は「精神面」、「忍耐力」、「成長なし」と回答していた。大学生時は、実践者・保護者共に「主体性」、「思いやり」、「人間関係」という回答が得られた。以上のことから、人間的成長は小学生時では礼儀作法のみであったが、その後成人するまでの過程において様々な成長過程があり個人差が大きくみられた。しかし、大学生時では人間的成長にあまり個人差はみられず、保護者も同様の成長を感じていたことから、剣道の継続的な実践が社会の秩序や人間関係を構築するために必要な「礼儀作法」、「思いやり」、「主体性」などに影響を及ぼす可能性が示唆された。

剣道高段者における剣道の実践と人間形成の関係

○笹木春光（東海大学）、山本聖樹（東海大学大学院）、天野聡（東海大学）、松本秀夫（東海大学）、

【目的】

生涯を通じて人間形成を図ることが目的である剣道は、その魅力から国際的普及も進み、幼年から高齢まで幅広く愛好者が存在している。幼少年の人口が減少しているとはいえ、2020年3月における全日本剣道連盟に登録している有段者の数は1,948,902人名であり、この数字からも剣道の普及・発展による有段者が一定数存在していることが推測される。その要因として挙げられるのは、各年齢層に沿った様々な目標設定と達成を実感し、熟練者においてはその過程を何度も繰り返し、長期に渡り修行を重ねていける事であると考えられる。

また、剣道を継続するための動機づけとなるものの1つに「昇段」がある。この「昇段」を目標に精進し、さらに上を目指すという姿勢が武道としての剣道の特性でもある。剣道の最高段位八段者の登録者は735人であり、上述した有段者数の僅か約0.04%である。また、近年の八段審査合格率は0.3~0.9%と極めて難関である。このような多くの剣道実践者が目標としている最高段位を取得した八段者は、長期に渡りどのような経験を経て、どのような価値観を持って剣道の実践を行ってきたのかについての調査研究は見当たらない。

そこで、本研究は剣道八段者を対象にインタビュー調査を行い、剣道実践と人間形成の関係について分析することを目的とした。

【方法】

2020年2~3月に個別面接が可能な部屋にて50~60分程度の半構造化面接を行った。研究協力者は、剣道教士八段の男性5名（年齢50~60歳）とし、文章と口頭で研究の趣旨と方法を説明し同意を得た。音声データは対象者の承諾を得た上でICレコーダーに記録した。面接内容は①実践者としての経験について（開始時期・開始場所・開始動機・活動の頻度・他のレジャー・スポーツ活動歴）②活動用具・大会・講習会について③感情について（愛着・中心性・満足度・成功体験・継続していく理由）④人間形成について（自己の人間的な成長・指導者として生徒の人間的な成長）について質問した。質問においては、ありのままのエピソードや思い・考えを語ってもらうために配慮した。分析は、テキストの文脈から分析ワークシートを作成、カテゴリー化してその特徴を考察した。

【結果および考察】

各カテゴリーにおいて特徴が見られ、愛着・中心性・満足度は、すべての研究協力者に共通点が見られた。また、健康、楽しく、教え子の成長、心の教育、自然体、勝つ喜び等の発話から、八段としての使命感や期待される立場、剣道界への恩返し、自らのさらなる技能向上など、剣道実践と人間形成の関係についての特徴が明らかとなった。詳細については当日報告する。

生体信号から日本剣道形の技術を定量化できるか

○高橋 健太郎（関東学院大学理工学部）

【目的】

剣道において、日本剣道形は基本的な心得や動作を集約したものであり、「打太刀」と「仕太刀」と呼ばれる二役に分かれ、定められた動作をおこなう。また、昇段審査にも用いられており、動作だけでなく精神面についても評価の対象となっている。日本剣道形一本目の動作中における筋電位（EMG）及び脳波（EEG）を解析した実験では、EEG-EMG コヒーレンス強度が段位を識別する可能性があることを示唆していた。剣道では 3 つの先があり、機先を制することが大事といわれている。先々の先を表す日本剣道形一本目の実験報告は存在するが、後の先を表す剣道形六本目では、未だ報告がない。そこで、日本剣道形六本目の動作中における EEG 及び EMG の同時計測を行い、被検者間での技術レベルの特徴を明らかにすることを目的とした。

【方法】

被検者は剣道経験者 5 名（7 段 1 名，5 段 1 名，4 段 1 名，3 段 2 名），未経験者 1 名の計 6 名とした。試技として、日本剣道形一本目，六本目の打太刀，仕太刀を各 3 回ずつ行わせた。EEG 及び EMG の測定には eegosports を使用し、サンプリング周波数 1024Hz にて計測した。EEG 測定には、国際 10/20 法に基づく 32ch を測定し、 α 波、 β 波、 γ 波でパワースペクトル密度を算出した。検出された EEG、EMG から EEG-EMG コヒーレンス値を算出した。すべてのデータは、全被検者の試行において動作開始から終了までの時間を 100% とし、正規化した。

【結果および考察】

本研究では、後の先を表す日本剣道形六本目における特徴を検討した。打太刀では、7 段選手が、動作開始から打突時にかけて、仕太刀では、7、5 段選手が、すり上げ時から打突時にかけてコヒーレンス値が高値を示した。これは、それぞれの局面で集中力が高まり、技としてのメリハリが現れていたと考えられる。打ち太刀では、高段者の EEG-EMG コヒーレンス最小値のバラつきが低い。これは、脳からの強い命令によって、正確な動作が繰り返し行われていると思われる。また、仕太刀では、EEG-EMG コヒーレンス平均値のバラつきが多く出現する傾向が確認された。日本剣道形において、仕太刀は正確な木刀操作を行い、相手の細かい動作変化にも随時対応しなければならない。そのため、段位が上がるほど EEG-EMG コヒーレンス平均値のバラつきが高くなったのではないかと考えられる。よって、本研究の結果から、日本剣道形において生体信号を解析することで、段位による技術レベルの特徴を明らかにすることが可能であると示唆された。

剣道用具の評価観点に関する検討

○鶴見健太（東海大学大学院）、天野聡（東海大学）、笹木春光（東海大学）、松本秀夫（東海大学）

【目的】

剣道用具には、剣道具（面、小手、胴、垂）、竹刀、稽古着があり、他には付属品として道具袋、竹刀袋、鰐などがある。剣道具は、数万円から100万円を超える高価なものまで多岐にわたり、高級な装飾を施した物から、軽量でデザイン性、機能性の高いものなど多種多様なものが販売されている。竹刀も、バランスや重さ、握りの太さ、重心、材質などに特徴があり、実践者の好みによって選考される。これまで、このような剣道用具に関しては、安全な剣道用具の開発や剣道具の構造、材質、道具の歴史などに関する研究は数多く行われている。しかし、剣道実践者が、剣道用具を購入、使用する際に、これらの用具をどのように評価、購入しているかについての研究は見当たらない。

そこで本研究は、剣道用具の評価観点と項目について、論文検索システムを用いて被服（装着を目的に人体を覆い包む被覆物の総称）、道具（工具・スポーツ用具など）の評価に関する、被服学、家政学、工学、工業デザインなどの各種分野の研究論文を網羅的に分析し、剣道用具の評価観点と項目の検討を行うことを目的とした。

【研究方法】

インターネットの論文検索システム Google scholar、J-stage、Cinii Articles、国立国会図書館リサーチを用いて、キーワードによる論文の検索と収集を行った。また、検索はスポーツ科学領域に限らず、被服学や家政学、工学などの服装、用具などとして、キーワードは「評価」「道具」「用具」「剣道具」「工具」「被服」「洋服」など関係しそうなものを使用した。そして、検索した論文から、評価の観点、評価項目を分析・検討した。

【結果及び考察】

「剣道具」・「評価」のキーワードによる検索では、重複論文も含め Google Scholar 3720 件のヒットを数えるが、剣道の技術や授業の評価、道場の床材質、細菌などに関する論文であり、剣道具や竹刀自体の評価に関する論文は見当たらなかった。「被服」「用具」「道具」と「評価」の組み合わせなどから 103 件の文献（論文・学会抄録等）を収集した。これらの文献から、評価観点と評価項目の抽出を行った。その結果、商品評価、感性評価、性能評価、構造評価、視覚的評価の観点を抽出した。また、評価項目は、素材性（16 件）、色彩（13 件）、安定性（12 件）に関するものと、SD 法を用いた印象評価（12 件）などが検出された。その他、嗜好感や用具のフィット性、安全・安心性、耐久性などの項目が採用されていた（結果の詳細な数値は当日報告する）。

本研究において評価観点と評価項目を行った。その結果、評価観点と項目を整理・検討した。今後は、剣道用具評価尺度の開発と剣道実践者の剣道用具購買行動に関する検討が課題である。

剣道の実践がライフスキル・主観的幸福感に与える影響

○山本聖樹（東海大学大学院），笹木春光（東海大学），天野聡（東海大学），松本秀夫（東海大学），

【目的】

全日本剣道連盟は、剣道の理念を「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である（1975）」とし、剣道による人間形成、人格形成を掲げている。また、WHO が定義したライフスキルに関連して、学校教育における剣道の授業とライフスキル獲得や剣道経験とライフスキルに関する研究が行われている。このように、剣道を行うことによるライフスキル獲得は、少なからず人間形成の醸成に影響を与えていると考えられる。

そこで本研究は、剣道の継続的実践と人間形成の関係について、剣道実践がライフスキル・幸福感、剣道の満足感に与える影響を明らかにすることを目的とした。

【方法】

- 1.調査対象：大学生以上の剣道実践者を対象とした。
- 2.調査方法：SNSにて調査依頼を行い、SurveyMonkey(オンライン調査システム)を用いて調査を実施した。
- 3.調査内容：嘉瀬ら（2016）の開発した「青年・成人用ライフスキル尺度」を参考にしたライフスキル4因子（意思決定・対人関係スキル・効果的コミュニケーション・情緒への対処：20項目）、剣道に関する人間形成3因子（礼・誠・仁：12項目）の計32項目、剣道経験、幸福感、満足感に対する質問とした。
- 4.分析方法：ライフスキル・人間形成の項目に対して確認的因子分析（CFA）を実施し、ライフスキル・人間形成と幸福感、満足感に与える影響について構造方程式モデリング（SEM）を行った。

【結果および考察】

調査の結果436名（男性353名、女性83名）から回答を得た。ライフスキル・人間形成の7因子に対して確認的因子分析を行った。その結果3項目で天井効果が見られたが最大で5.16であることから3項目を含めて分析を行った。CFAを行ったところ「情緒への対処」以外の各因子から7項目で因子負荷量が0.4未満であったことから除外し再度CFAを行った。その結果、適合度指標は、 $\chi^2/df=2.24$ 、CFI=0.91、RMSEA=0.038であり基準値をクリアした。SEMの結果を図に示した。人間形成の「誠」から「剣道満足感」「幸福感」、ライフスキル「情緒への対処」から幸福感へ有意な影響が認められたことから、剣道実践者の経験による人格形成が幸福感・満足感に影響していることが一部示唆された。

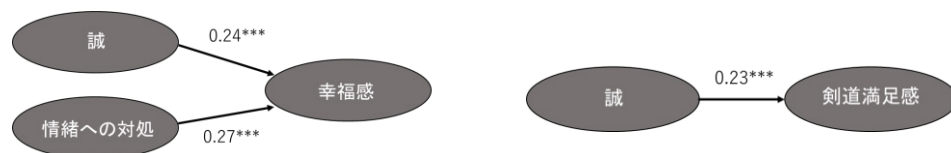


図 ライフスキル・人格形成から幸福感・剣道満足度への影響 *** $p < .001$

中学校柔道授業が共感性に及ぼす影響 -固技を主体とした単元の検討-

○島孟留（群馬大学共同教育学部）、田井健太郎（群馬大学共同教育学部）

【目的】観察者が対象者と同様な情動状態を抱く“共感性”は、人との繋がりを形成する上で重要な能力である。昨今の学校現場でのいじめ件数の増加は、現代の子ども達の“共感性”の欠落が一要因となっている可能性があり、学校教育には、この解決に向けた手立ての確立が求められる。近年、運動が共感性を高める可能性が示されていること、加えて、身体接触は、共感性に関わるオキシトシンの分泌を高めることから、学校教育において、身体接触を伴うような運動といえる保健体育の柔道授業は、子ども達の共感性を高める上で有効な手立てになるかもしれない。最近、私どもは柔道実習が大学生の共感性を高めることを見出したが、中学校保健体育における柔道授業の効果については、未だ不明である。そこで本研究では、中学1年生を対象とし、固技主体の柔道単元が共感性に及ぼす効果と、共感性が変容する要因を調査することを目的とした。

【方法】A 中学校に在籍する1年生の2クラス、計68名を調査対象とした。固技を主体とした柔道単元（全8回）の最初と最後に質問紙調査を実施し、質問紙への回答漏れがあった5名を除いた生徒63名（男子：30名、女子：33名、いずれも柔道の運動部活動経験無し）を分析の対象とした。共感性の評価には、多次元共感性尺度（鈴木ら、2008）を用いて、「視点取得」、「他者指向的反応」、「被影響性」、「想像性」、「自己指向的反応」の5因子の変化を評価した。また、運動・スポーツのイメージの調査として、「運動・スポーツは楽しい」、「運動・スポーツは得意」かどうかの変化も評価した。

【結果および考察】「視点取得」、「想像性」、「自己指向的反応」、「被影響性」に変化がなかったものの、「他者指向的反応」は、単元前に比べて、単元後に有意に低下した。これまでに、中学校1年生に比べて中学校2年生の共感的関心が有意に低いことが知られている（大山ら、2018）。したがって、本研究でみられた「他者指向的反応」の低下には、思春期特有の時間経過に伴う変化による可能性も考えられるため、この点について、さらなる検証が不可欠である。一方で、「運動・スポーツは楽しい」の変化と「視点取得」の変化の間に有意な正の相関関係がみられた。これは、中学校の柔道授業において、生徒らが楽しさを享受できることが、生徒らの心の成長、特に共感性を高める上で重要な要素となる可能性を示唆する結果である。今後、形成的授業評価などにより、柔道授業を通じて生徒らが楽しさを享受した要因や、生徒らの共感性が高まる要因をより詳細に検討することが、心の成長をもたらす柔道授業を計画する上で必要である。

【結論】中学校生徒らが、運動・スポーツの楽しさを感じられるような固技主体の柔道授業は、中学1年生の共感性を高める手立てとなるかもしれない。

柔道 MIND 活動に関する実態調査－指導者を対象として－

○田中 勤(奈良学園登美ヶ丘高等学校) 石川美久(大阪教育大学)
横山 喬之(摂南大学) 正木嘉美(天理大学)

【目的】全日本柔道連盟は、Manners(礼節)、Independence(自立)、Nobility(高潔)、Dignity(品格)の4項目を設けた「柔道 MIND プロジェクト」を発足させた。そこで本研究は、柔道指導者を対象として「柔道 MIND」における意識を明らかにすることを目的とした。

【方法】調査対象は、高校近畿地区大会および奈良県中学校柔道新人大会に参加した指導者とした。調査方法は、事前に調査の趣旨および研究目的などを説明し、承諾が得られた指導者(95名)に回答を求めた。調査項目は、田中らが作成した質問紙を用い、分析には単純集計を行った。

【結果および考察】アンケートを集計した結果、対象者の属性は次の通りである。年齢 43.5 ± 10.3 歳、段位 4.6 ± 1.5 段、柔道経験年数 30.3 ± 12.5 年、教員経験年数 18.0 ± 10.3 年であった。男女比は、男子 84 人(88.4%)、女子 11 人(11.6%)であった。公認指導者の割合は、A 指導員 27 人(28.4%)、B 指導員 57 人(60.0%)、C 指導員 5 人(5.3%)、顧問 5 人(5.3%)、無記名 1 人(1.1%)であった。

「柔道 MIND」に関する質問の集計結果は、表1の通りである。質問2では、回答の多くが「そう思う」「少しは思う」であった。指導者の多くが、「柔道 MIND」活動を理解して指導していることが伺える。質問3では、ほとんどから「はい」の回答が得られ、柔道を指導するうえで「柔道 MIND」が必要であるという考えを持つとともに、「柔道 MIND」を必要としながら柔道を志すべきだという考えを、指導者自身が持っていることも伺えた。回答の理由欄では、質問3-1.「精神面が大切」、質問3-2.「強さだけを求めるのは良くない」「柔道の原点を知るため」、質問3-3.「礼節は必要」「柔道の目的がわかる」などの、「はい」に基づく記述が数多くみられた。

表1. 柔道MINDに関する質問の集計結果

質問1についての項目	はい (%)	いいえ (%)	未回答 (%)
1. 現在学校柔道授業を教えているか。	49 (51.6)	46 (48.4)	
2. これまでに柔道授業を教えたことがあるか。	70 (73.7)	25 (26.3)	
3. 現在柔道部の顧問または監督か。	79 (83.2)	16 (16.8)	
4. 柔道部顧問や監督経験があるか。	87 (91.6)	8 (8.4)	
5. 現在学校外で柔道を教えているか。	37 (38.9)	58 (61.1)	
6. 学校外で柔道指導経験があるか。	54 (56.8)	33 (34.7)	8 (8.4)

質問3についての項目	はい (%)	いいえ (%)	未回答 (%)
1. 柔道指導者として柔道MINDが必要だと思うか。	94 (98.9)	1 (1.1)	
2. 柔道指導者をもっと柔道MINDのことを知るべきだと思うか。	93 (97.9)	1 (1.1)	1 (1.1)
3. 柔道を志す者にとって柔道MINDが必要だと思うか。	94 (98.9)	1 (1.1)	

質問2についての項目	そう思う (%)	少しは思う (%)	あまり思わない (%)	全く思わない (%)
Manners (礼節) 分野				
1. 礼儀作法をしっかりと教えることができたか。	49 (51.6)	46 (48.4)	・	・
2. 生徒の礼儀作法ができるようになったと思うか。	70 (73.7)	25 (26.3)	・	・
3. 生徒のマナーが改善したと思うか。	79 (83.2)	19 (16.8)	・	・
Independence (自立) 分野				
1. 生徒が柔道を真剣に取り組んだと思うか。	87 (91.6)	8 (8.4)	・	・
2. 生徒が柔道を自ら進んで取り組んだと思うか。	37 (38.9)	58 (61.1)	・	・
3. 生徒が何事にも自ら進んで取り組めるようになったと思うか。	54 (56.8)	33 (34.7)	8 (8.4)	・
Nobility (高潔) 分野				
1. 生徒が柔道の経験で相手への思いやりが持てるようになったと思うか。	49 (51.6)	44 (46.3)	2 (2.1)	・
2. 柔道指導中に生徒による思いやりの言動や行動が認められたか。	41 (43.2)	52 (54.7)	2 (2.1)	・
3. 自らの柔道経験を通して謙虚で誠実な人格となれたか。	33 (34.7)	61 (64.2)	1 (1.1)	・
Dignity (品格) 分野				
1. 生徒が柔道の経験により礼儀正しくなったと思うか。	55 (57.9)	39 (41.1)	1 (1.1)	・
2. 柔道指導を通して生徒による周囲に配慮した行動が認められたか。	32 (33.7)	58 (61.1)	5 (5.3)	・
3. 自らの柔道経験を通して品格が身についたと思うか。	16 (16.8)	67 (70.5)	12 (12.6)	・

P-16

柔道競技における投技のスコアを獲得するために効果的な方法： 男子 60kg 級と男子 100kg 級の比較

○三宅 恵介（中京大学・順天堂大学大学院），廣瀬 伸良（順天堂大学大学院）
伊藤 潔（富士大学），佐藤伸一郎（拓殖大学）
竹澤 稔裕（順天堂大学），前川 直也（国際武道大学）

【背景・目的】柔道競技の試合は，投技や固技によるスコア，もしくは罰則によって勝敗が決定される．その中でも，投技のスコアによって決着する試合が最も多いことが報告されている（中村ほか，2002；三宅ほか，2014；2015）．そのため，試合中の投技の技術や戦術に焦点を当てて分析することは，柔道のコーチングに関する研究を行う上で重要な意味があると考えられる．

伊藤ほか（2015；2018）は，投技でスコアを獲得するために「組替え戦術行動」の有効性を示唆している．しかし，これらの研究では，被施技者（以下，受）の組み方について言及していない．施技者（以下，取）の組み方のみならず，取と受の組み方の関係が投技の成否に影響すると推察される．

本研究では，新たに投技施技時の受の組み方に注目し，取と受の組み方の観点から，投技のスコアを獲得するために効果的な方法を検証する．また，柔道の試合が階級制であることを鑑みて，男子最軽量の 60kg 級，体重制限がある中で男子最重量の 100kg 級の違い，共通の特徴，特有の特徴を明らかにし，コーチングの実践現場に有用な知見を導くことを目的とした．

【方法】研究の対象は，Paris Grand Slam 2020 の 60kg 級 46 試合，100kg 級 53 試合の計 99 試合とした．国際柔道連盟によって Judo base に公開された試合映像，および全日本柔道連盟強化委員会科学研究部が撮影し，独自のシステムにアップロードした試合映像を繰り返し再生し，全ての投技の施技時における取と受の組み方，投技の種類，投技の効力（一本，技あり，なし）を分析した．

【結果および考察】表 1 の階級と勝利方法（技 or 罰則）の関係，階級とスコア（投技 or 固技）の関係，階級と試合時間の比較に，有意な関係は認められなかった．つまり，勝利方法とスコア，試合時間に関しては，階級に関係なく同様の傾向にあることがわかった．その他の結果については，当日ポスターにて発表する．

表 1 階級と勝利方法の関係

	60kg		100kg		合計	
	N	%	N	%	N	%
技で勝敗が決まった試合	41	89.1%	45	84.9%	86	86.9%
罰則で勝敗が決まった試合	5	10.9%	8	15.1%	13	13.1%
合計	46	100.0%	53	100.0%	99	100.0%

$\chi^2 = 0.104$, ns

P-17

柔道の乱取りが大外刈りで生じる頭部角加速度に及ぼす影響

○石川美久(大阪教育大学), 穴田賢二(石川工業高等専門学校), 林 弘典(びわこ成蹊スポーツ大学), 内村直也(大阪産業大学), 岡田修一(神戸大学)

【目的】本研究は、柔道の乱取り後に投げられた際の頭部角加速度を明らかにし、頭部外傷リスクを検証することを目的とした。

【方法】被験者は、男子大学柔道選手 10 名(年齢 19.7 ± 0.9 歳, 身長 173.3 ± 3.9 cm, 体重 79.7 ± 4.1 kg, 柔道経験年数 12.6 ± 2.6 年, 段位 1.7 ± 0.5 段)とした。被験者を投げる人は男子大学柔道選手 1 名(年齢 20 歳, 身長 180.0 cm, 体重 105.0 kg, 柔道経験 14 年, 二段)とした。

実験は、乱取り前に心拍計(M400, POLAR 社製)を用いて心拍数を測定した。徒手荷重計(モービィ MT100, SAKAI med 社製)を用いて頸部筋力の前屈, 後屈を測定した。被験者はセンサの付いたヘッドギアを装着し、大外刈りで投げられた際の頭部角速度を測定した。1 度の乱取り時間を 5 分間とし、10 セットの乱取りを行った。セット間の休憩時間は 30 秒とした。被験者には、最大努力で乱取りを行うように指示した。乱取り終了後、被験者の心拍数および大外刈りで投げられた際の頭部角速度, 頸部筋力を測定した。測定機器には、3 軸角速度センサ(MVP-RF8-GC, MicroStone 社製)を用いて、頭部で生じる角速度を測定し、得られたデータを数値微分して角加速度を求めた。乱取り前後における前額軸まわりの頭部最大角加速度, 頸部筋力を比較するために、willcoxon の符号順位検定を行った。有意水準は 5%未満とした。本研究は大阪教育大学倫理委員会の承認を得て行われた(受付番号 176)。

【結果および考察】頭部最大角加速度について、乱取り後は乱取り前よりも有意に上昇した(図 1)。頸部筋力(後屈)について、乱取り後は乱取り前よりも有意に低下した(図 2)。乱取り後に頸部筋力が低下したため、頭部の角加速度が上昇したと推察される。

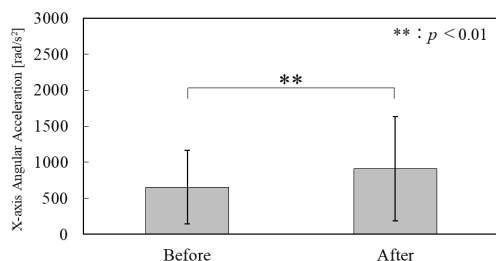


図1 乱取り前後における前額軸まわりの頭部最大角加速度

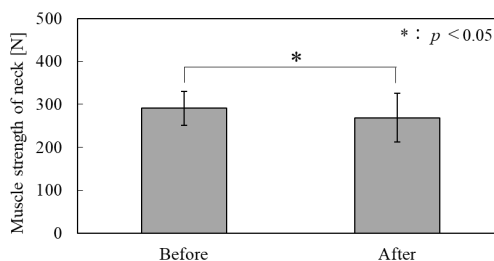


図2 乱取り前後における頸部筋力(後屈)

【結論】大学柔道選手が乱取り後に大外刈りで投げられた場合、頭部外傷リスクが上昇することが示唆された。本研究は、科学研究費(若手研究 B: 16K16520)の助成を受けて実施されたものである。

P-18

柔道授業における心理社会的学習成果の特徴と教師の言葉がけとの関連
○山本浩二（関西福祉大学）・島本好平（明星大学）・永木耕介（法政大学）

【目的】

学校の体育授業において、教師の言葉がけによる肯定的なフィードバックが生徒の学習行動に正に影響する一方で、否定的なフィードバックが負に影響することが明らかにされている（深見ほか，1997；高橋ほか，1997）。また，体育授業に取り組む生徒の実態は多様である（高橋・岡澤，2010）ことから，教師の指導内容や方法に加え，生徒の学習行動などのさまざまな要因が学習成果に影響を及ぼすと考えられる。そこで本研究では，中学校体育の柔道（以下「柔道授業」と略する）における生徒の心理社会的学習成果を類型化して特徴を見出し，教師の言葉がけとの関連を検討することを通じて，生徒の学習成果を高めるための基礎的資料を得ることを目的とする。

【方法】

1. 調査対象者と調査時期 調査は，関西地区の市立中学校 5 校における 1・2 年生 610 名（1 年生 314 名，2 年生 296 名）を対象として，2015 年 3 月に実施された。調査対象者の多くが，競技柔道を経験していない初心者であった。
2. 主な調査内容と手続き
①柔道授業の心理社会的学習成果評価尺度：山本ほか（2017）が柔道授業の心理社会的学習成果を「対応行動」，「積極的相互作用」，「礼儀作法」，「授業規範の遵守」から評価できる。なお，尺度の信頼性と妥当性は確認されている。
②教師の受容的な言葉がけを評価する項目：深見ほか（1997）が明らかにした体育授業中の子どもにとって役に立つ言葉がけの側面である「技術的助言」・「賞賛」・「励まし」をもとに，本研究で独自に作成した 3 項目である。本調査票の配布と回収および調査の実施は，各校の授業担当教諭が行った。
3. 統計処理 分析は，大規模ファイルのクラスター分析を実施し，心理社会的学習成果をもとに生徒を分類した後，分類されたタイプごとに心理社会的学習成果の各下位尺度と教師の言葉がけとの関係性を相関分析により検証した。

【結果および考察】

まず，クラスター分析の結果，各学年で生徒が 5 つのタイプにそれぞれ分類された。各学年における共通のタイプとして，高成果型，低成果型，平均型，態度重視型がそれぞれ示された。さらに，1 年生は対応困難型が，2 年生は規範軽視型が特徴的なタイプとして示された。次に，生徒のタイプごとに相関分析を実施した結果，心理社会的学習成果と教師の受容的な言葉がけとの間に有意な相関関係が複数示された。特に，各学年における教師の賞賛は，分類された生徒のタイプに関わらず，心理社会的学習成果の側面に有意な正の関係性が多く示されたことから，高橋ほか（1997）や深見ほか（1997）の知見を柔道授業においても支持する可能性が示唆された。一方で，2 年生における賞賛が規範軽視型の礼儀作法，励ましが態度重視型の積極的相互作用に有意な負の関係性を示した。これは，中学生年代には教師からの言葉がけの認知の仕方が変化するためであることが示唆された。以上のことから，教師は生徒の学習状況を踏まえた適切な言葉がけを用いる必要があると考えられる。

体づくり運動における小学校低学年を対象とした柔道遊びの検証

○與儀幸朝（鹿児島大学）、木村昌彦（横浜国立大学）、高橋進（大東文化大学）

【目的】

新中学校学習指導要領（2017）改訂の基本的な考え方には「児童生徒の発達段階を踏まえて小中高を通じて系統性のある指導」が明記されている．しかし武道領域においては，球技や水泳などの運動領域とは異なり小学校から系統的にカリキュラムが編成されていない現状が存在する．そこで本研究では，小学校の体づくり運動領域「多様な動きをつくる運動遊び」の「力試しの運動遊び」において，柔道衣を着用しなくても実践できる柔道遊びの運動教材を開発し，その効果について検証することを目的とした．

【方法】

1．調査対象と時期

本研究における対象は，鹿児島県内の小学校（1校）に協力を依頼し，第2学年33名（男子16名，女子17名）の児童を対象とした．時期は2019年2月に全7時間の単元計画で行った．

2．調査内容

単元前と単元後の変容を検討するため質問紙調査を実施した．また，単元終了後に感想の記入を求めた．質問紙調査は，高橋（2003）を参考に著者らと授業を実践する教員とで話し合いを重ねたうえで質問項目を決定した．さらに保護者にもインタビュー調査を実施した．主な内容は実施期間中の行動変容について聞き取りを行った．

3．柔道遊びの運動教材

多様な動きをつくる運動遊びは，体のバランスをとる・体を移動する・用具を操作する・力試しの4つの内容で構成されている．そこで本研究では，体のバランスをとる運動遊びと力試しの運動遊びをユニットで教材開発を行った．

【結果】

質問紙調査の結果から，情意目標（たのしむ）及び運動目標（できる）に関する項目が単元後に有意に高まった．しかし，認識目標（まなぶ）及び社会的行動目標（まもる）の項目では有意な差は認められなかった．

単元後の感想では，「友だちと力くらべができて楽しかった」「自分の力がつよくなった」「友だちの力がつよかった」といった情意目標や運動目標に関連する記述が多くみられた．また，単元の前半で実施した「だるまあそびをやったらあたまをうたなくなった」「だるまあそびでころがりかたがうまくなった」といった記述も確認された．

保護者へのインタビュー調査では，「柔道の授業があった日は家に帰ってきて授業の様子をいっぱい話してくれた」「柔道の授業の前日には父親と練習をしていた」といった声が多く聞かれた．また，「父親とのコミュニケーションが増えた」といった声も聞かれた．

【結論】

体のバランスをとる運動教材として受け身を基礎とした転がり方，力試しの運動教材として柔道の動きを取り入れた力試しの有用性が示唆された

P-20

柔道の基本動作を導入した体づくり運動（高校）に関する実践的研究

○天久功一（沖縄県立那覇西高等学校）、與儀幸朝（鹿児島大学）、
木村昌彦（横浜国立大学）

【目的】

本研究は、高等学校の体づくり運動領域において柔道の要素を取り入れた運動教材を開発し、実践を通してその効果について検証することを目的とした。

【方法】

①対象は、高校3年生2学級の男子73名とした。柔道の要素を取り入れて実践した介入群（35名）、柔道の要素取り入れないで実践した統制群（38名）の2群で実施した。

②授業は、柔道を専門とする教師歴30年の保健体育教師が行った。

③単元計画は、両群とも7時間設定し1時間目はオリエンテーションを実施した。2時間目は統制群が回転運動と自重トレーニングを、介入群は斜め回りなどの転がり運動と寝姿勢での体移動を実施した。3から5時間目は2時間目の実施内容にサーキットトレーニングを加え、介入群のこれらの運動は受け身や寝姿勢での体移動で構成した。6時間目は両群とも生徒が体力を高める運動を考案しグループで発表する機会を設けた。7時間目は単元の振り返りを行った。

④評価は、単元前後に西田（2004）の体育に関する学習意欲検査（AMPET）と横山（2005）の感情プロフィール POMS 日本語短縮版および高橋（2003）の診断的・総括的授業評価を用いた。

【結果】

体育に関する学習意欲検査（AMPET）では、7つある下位尺度の中で「運動の有能感」だけに有意な交互作用が認められた（ $P<0.05$ ）。また2つある同類側面（意欲的側面、回避的側面）では、意欲的側面の交互作用に有意傾向が示された（ $P<0.1$ ）。単元後の値はいずれも介入群が Positive に変化したことから、柔道の要素を取り入れた体づくり運動が、柔道の要素を取り入れない体づくり運動よりも学習意欲を Positive に変化させる可能性が示唆された。

感情プロフィール POMS では、6つある気分尺度の中で、怒り-敵意、抑うつ-落ち込み、緊張-不安、および混乱に有意な主効果が認められた（ $P<0.01$ ）。これらの結果から、2種類の体づくり運動の単元は、柔道要素の有無に関わらず生徒の気分状態を改善させたことを意味する。このことは両群の単元前後の総合的気分状態得点の低下幅が同等であったことも要因の一部として考えられる。

診断的・総括的授業評価では、4つある因子の中で「社会的行動目標」の交互作用だけに有意傾向が示された（ $P<0.1$ ）。単元後の統制群の値が単元前より減少したのに対し、介入群では逆に増加したことから、介入群の生徒は「ルールを守る」、「自分勝手なことをしない」、「先生の話聞く」、「約束事を守る」などの実社会で必要とされる規範遵守の意識が高まる可能性が示唆された。

【結論】

柔道の要素を取り入れた体づくり運動の実践は、運動の有能感や4つの気分尺度および社会的行動目標に影響を与えることが示唆された。

Special Judo Fitness Test を用いた大学女子柔道選手の 体力特性の検討

○大川康隆（東海大学）、石橋剛士（熊本学園大学）、
小澤雄二（鹿屋体育大学）、塚田真希（東海大学）、宮崎誠司（東海大学）

【目的】

本研究の目的は、Sterkowicz (1995) によって提唱され、Franchini ら (2009) により、指数に基づく分類が作成された Special Judo Fitness Test を用いて大学女子柔道選手の体力特性を検討することである。

【方法】

被験者：大学女子柔道選手 20 名とした。全国大会出場レベルであり、1 日 2 時間以上、週 6 日の稽古を行っている。

実験プロトコル：被験者を中心に、3 メートル離れた位置に一方の受（受 1）を配置し、反対側の 3 メートル離れた位置にもう一方の受（受 2）を配置する。被験者は合図とともに受 1 に向かって全速力で走り、一本背負い投げで投げる。投げ終わるとともに、次は受 2 に向かって全速力で走り、一本背負い投げで投げる。本プロセスをそれぞれ 10 秒の休憩をはさみながら、15 秒、30 秒、30 秒の 3 セット繰り返す。3 セット目が終わった直後に 1 回目の心拍数を測定する（直後心拍数）。その後、3 セット目が終わってから 1 分後に 2 回目の心拍数の計測を行う（1 分後心拍数）

分析方法：直後心拍数と 1 分後心拍数を合計した値をそれぞれのセットで投げた回数の合計で割り、算出された値を指数（体力レベルを表す）とし、分析を行った。

【結果および考察】

Franchini ら (2009) の分析方法に従い、本実験における分類を算出した結果は表 1 の通りである。35% が Excellent に分類され、40% が Good に分類されている。指数の平均値は 12.45 ± 1.45 であった。

今回は、Franchini ら (2009) の分類表に基づいて結果を分類したが、階級に応じた分類表の作成、競技レベルによる分類等、指数の再設定も含めた今後の検討が必要である。

表 1 実験結果に基づく人数分布

分類	指数	本実験結果（人）	割合（%）
Excellent	≤ 11.73	7	35
Good	11.74-13.03	8	40
Average	13.04-13.94	1	5
Poor	13.95-14.84	3	15
Very Poor	≥ 14.85	1	5

中学校武道授業の実施状況と担当教員の意識

○京林由季子（岡山県立大学）、平田佳弘（IPU 環太平洋大学）

【目的】中学校での武道授業の必修化が定着し、新学習指導要領も 2021 年度から全面実施となる。そこで本研究では、武道授業の実施状況と保健体育教員が武道授業実践においてどのようなことに困難を感じているのか、その意識について検討することを目的とする。

【方法】

1. 調査対象：中学校保健体育教員を調査対象とした。
2. 調査方法：民間のリサーチ会社に依頼し全国の中学校体育教員を対象に質問紙調査を実施し 107 件の回答を得た。調査内容は①フェイスシート 6 項目、②武道授業の実施状況 2 項目、③武道授業に関する意識 5 項目、④武道・体育授業における配慮や支援の状況 6 項目より構成されている。調査期間は 2020 年 1 月～3 月であった。本研究では、武道授業の実施状況および武道授業に関する担当教員の意識について報告する。

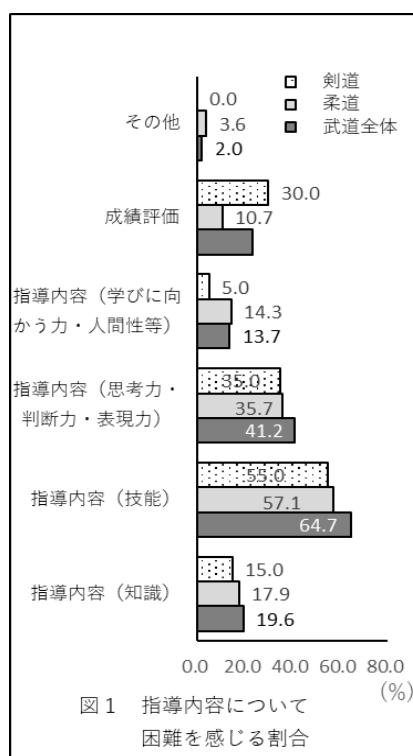
【結果および考察】

武道授業の実施状況は、1 学年と 2 学年での実施が 8 割以上、実施種目は男女とも柔道が 4 割以上と最も多かった。1 クラスの平均生徒数は「31～40 人」が全体の 8 割を占め、1 クラスの指導者数は 7 割弱が「体育教員 1 名」であった。「外部指導員」の配置は 7.5%、「支援員」の配置は 3.5%と少なかった。保健体育教員の意識では、「困難を感じる」との回答が最も多かったのは「指導内容」（57.3%）であり、次いで「指導体制」（40.4%）、「用具の整備」（36.0%）であった。

「指導内容」の内訳（図 1）では、「指導内容（技能）」が最も多かった。 χ^2 検定の結果、武道種目による有意差は認められなかった。武道授業では畳や着装等の準備で時間を取られる中で、安全面に配慮しながら、武道の技能面の指導に十分な時間を割くことが難しい状況にあることが推察された。

【結論】武道授業においても新学習指導要領の下、「知識」「技術」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性」と指導内容に求められるものが多くなっている。保健体育教員は、ほぼ 1 人で限られた授業時間数の中でそれらに対応し「安全で楽しく効果の上がる」武道授業を模索しているものと考えられる。指導体制の充実や、指導力向上のための研修や資料の充実を図る必要がある。

※本研究は JSPS 科研費 15k01526 の助成を受けて実施されたものです。



中学校武道必修へ「型」の考え方を取り入れた授業づくり

○太田順康（大阪教育大学）、金森昭憲（豊中市立庄内小学校）
由留木俊之（岸和田市立山直中学校）、石川美久（大阪教育大学）

【目的】

これまで我々は、中学校武道授業の円滑な導入に向けて、小学校体育科での武道的な対人運動教材を開発してきた。この運動教材は、「駆け引き」、「力のやり取り」、「さばき」、「かわしと抜き」など、対人的な動きの要素を取り込み、安全性に配慮した教材として、「G ボールずもう」「フラッグ取り」「S フラッグ」「ロープレスリング」「武道体操」などを開発してきた。そのなかでも「武道体操」は武道の「型」の要素を取り入れ、「型体操」として、対人的な動きが自然に取り込むことができないか試み、小学校での一定の評価を得ることができた。中学校学習指導要領解説にも「基本動作や基本となる技を習得する学習においては、「形」の取扱いを工夫することも効果的である。」とあり、「型」の考え方を整理し、中学生の「型」の理解や興味を分析することは、必修化した武道において「伝統的な考え方」を取り込んだ授業づくりを検討する一助となる。

そこで本研究では、これまでの研究結果を整理するとともに、小学校で対人運動教材を体験した生徒を含む中学生に武道に関する調査することにより、対人運動体験が武道のイメージ形成の影響について、同時に中学生の「型」について知識や興味について、調査しその結果報告する。

【研究方法】

これまで開発してきた小学校体育科での武道的な対人運動教材について、報告できていないところについて報告し、この運動教材の可能性を整理検討し、これを基とした「型」の考え方を取り入れた授業づくりの経過を報告する。

小学校段階における対人運動教材としてこれらを体験した生徒が含まれる中学校に調査を実施、報告する。

調査期間：2020年7月～8月

対象：T市立S中学校、O大学附属I中学校、O市立M中学校

調査方法：独自調査用紙を作成し体育授業終了時に担当教員の指示により実施した。

調査内容：調査は、浅見ら（1995）が作成した質問項目から抽出した武道のイメージ調査、および中学生の「型」への認知・興味・関心を訊ねる調査とした。調査項目については当日報告する。

【結果および考察】

結果の詳細については、発表会時に報告する。

ご存知ですか！

全日本剣道連盟が推奨するルールを礎に、 安全用具を推進。

賠償責任保険対象商品

■SSPシール

1年間に100万本の竹刀に貼付



SSP Q1 000001
全日本武道具協同組合
※竹刀規格はQRコードから 全日本剣道連盟公認規格に基づいています

Shinai (竹刀) Safety (安全) Promotion (推進)



■安全顎

突きから喉を守る

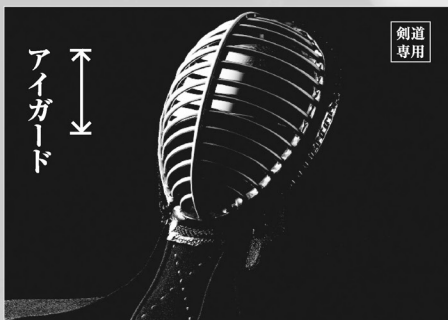


特許第5438204号

● 頸動脈突入防止
● 外見の変化なし
● どの防具にも適応

■アイガード

竹刀などの破片から目をガード！



アイガード

剣道
専用

アイガード

幼児用、少年用、中型大人用、一般大人用、特大人用をご用意。
適正サイズの物をお選びください。

「安全対策の一つとして、初心者への剣道防具面には、必ず
備わっていることを推し進めています。」

■フェイスシールド

相手からの飛沫飛散の防止に！



フェイスシールド

剣道
専用

フェイスシールド(一体型)

幼児用、少年用、中型大人用、一般大人用、特大人用をご用意。
適正サイズの物をお選びください。

「対人稽古再開に向けた感染拡大予防ガイドライン」に
対応してフェイスシールド(一体型)を製作し、シールドの着用
を推進しています。



全日本武道具協同組合

zenbukyo.jp/



株式会社 建武堂

営業時間 AM10:00～PM7:00
(日曜・祭日はPM6:00まで) 毎週月曜定休

〒170-0013 東京都豊島区東池袋1-15-1 菱山ビル2F

TEL 03-3971-4840 (代) FAX 03-3971-4461

URL: <http://www.kenbu-do.co.jp/>

e-mail: information@kenbu-do.co.jp

(五十音順)

祝 日本武道学会第53回全国大会

竹刀一筋48年



株式会社 タイヨー産業

薩摩川内市小倉353

TEL: 0996(22)7101 / FAX: 0996(20)5053

<http://www.taiyo-shinai.co.jp/>

e-mail: info@taiyo-shinai.co.jp

勘 松 勘



勝つために生まれた
実戦型シリーズ
実戦型防具
実戦型剣道着/袴
キャリー/コンバクトバッグ
バックパック / 竹刀ケース



夏の剣道に新しいカタチ
軽く・涼しく・快適に
洗える面・甲手・垂
十字刺防具
織刺調ジャージ剣道衣・袴
軽量縮袴
活人ケール面マスク



～装着感ゼロへ～

素材の特性を生かし防具・衣類
による動作抵抗を極限まで抑えた
新感覚実戦型防具・衣類シリーズ

松勘工業株式会社 〒347-0056 埼玉県加須市土手1-4-27 TEL.(0480)61-2211(代) FAX.(0480)61-2044

(五十音順)



伝統の様式美

布団芯材には真綿と新毛氈、
紺革は最高級素材のチビ小唐正藍染革を使用。
面布団の脳天部は厚く、
下り部は薄く仕上げました。
打たれ強く、柔らかくて使いやすい防具です。



面 : 面金 IBB-SD衝撃吸収面金 顎 つぶし刺5段飾
胴 : 胴台 50本型黒樹脂胴
胸 3種類より選択 (セット写真は総刺濃紺糸)
甲手 : 総紺鹿革頭 一重ケラ 先折れ
垂 : 二分手刺グノ目刺5段飾

剣道具 二分手刺グノ目刺 紺革仕立

限定20組

178,000

(税込)

今回限りの数量限定生産品の為、売り切れ次第販売終了となります。ご了承ください。

東京 ◀M▶ 日本橋
創業大正二年

森 武道具株式会社

東京都中央区日本橋小伝馬町 6-12
TEL.03-3661-0469

日本武道学会賛助会員

- ・ 全日本武道具協同組合
(以下、五十音順)
- ・ 株式会社 建武堂
- ・ 株式会社 五感
- ・ 株式会社 三恵
- ・ 株式会社 松興堂
- ・ 尚武堂産業株式会社
- ・ 株式会社 タイヨー産業
- ・ 株式会社 ヒロヤ
- ・ 株式会社 めりけんや
- ・ 森武道具株式会社